下，その主要なものについて説明する。なお，番号は図のそれに対応する。

① 微高地間の低地部分で弥生・古墳時代の包含層がある。同時代の水田層の可能性を持つ。

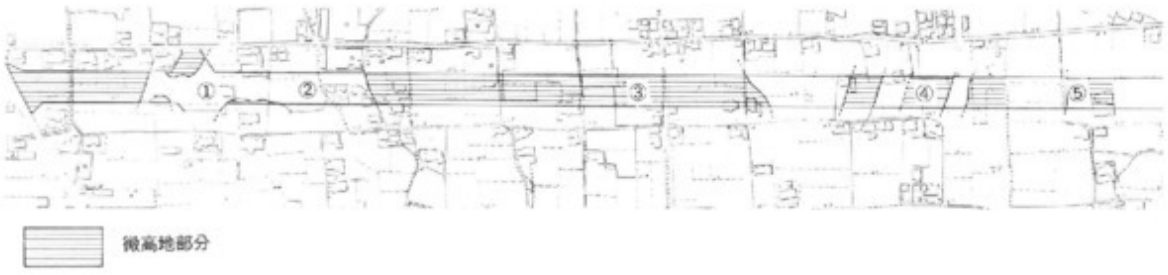
② 旧河道部分　上層は弥生～古墳時代の包含層，下層には縄文時代晩期の包含層がある。

③ 微高地上部分　弥生時代～古墳時代の溝状遺構多数がある。

④ 小規模な微高地と低地部分が交互に見られる。中近世の建物群・弥生時代以降の包含層がある。

⑤ 微高地部分であるが春日川の洪水砂が厚く覆っている。中世の包含層がある。同時代の水田層の可能性もある。

以上のように，弥生～古墳時代には集落跡の中心部分は確認できなかったものの，多数の溝状遺構・包含層・水田域？を確認した。また中世以降に関しては，建物群・包含層・水田域？を確認した。以前から知られていた旧山田郡条里については，それの坪界線の大部分が現行道路・水路と一致しているため今回の試掘調査では発掘することが出来なかった。そうでない部分についても今回の調査ではその起源を考えうるデータは得られなかった。また，今回，縄文時代晩期の土器群が出土したことは，同時期の遺構を確認し得なかったとは言え，高松平野部の初例であり，重要な資料である。高松平野の形成過程，縄文～弥生の移行の問題を考える上で興味深い。



第1図　遺構配置図

本　鴨　遺　跡

所在地　坂出市加茂町　　調査期間　昭和62年５月７日～５月９日，８月24日～８月26日

綾川下流域の平野部，坂出市府中町，加茂町，林田町周辺は讃岐国府を始めとして数多くの遺跡が知られている。ここで，本加茂遺跡と仮称する遺跡は，この平野の奥まった部分の綾川東岸，弥生中期後半の高地性集落が存在することで有名な鳥帽子山の西麓に位置する。周囲には，このほか，弥生後期の樋本遺跡，鴨廃寺などが知られている。

本鴨遺跡位置図

遺跡は，海抜８m～10m前後の複数の微高地上にまたがって広がり，その厳密な範囲は今のところおさえきれていない。ただし，加茂町西加茂神社を中心とした微高地，その北800mの加茂町・氏部町境界付近の微高地に遺溝の密集部分が見られるようである。今回の一連の調査はいずれも一般国道11号線拡幅関連の工事中遺跡発見という不幸な事態であった。

５月の調査は，西加茂神社西隣から北へ延長約80mの部分で行われた道路拡幅に伴う香川用水松山導水管移設工事中に発見されたことによる。連絡を受けて，現地に赴いた際には既に掘削が完了し，断面に遺溝が露出している状態であった。このため調査方法としては，断面に露出した遺溝の観察・記録化および遺物の採集にとどめざるを得なかった。

この結果，確認した遺溝は竪穴住居10棟，溝もしくは土壙３基（本），自然河道１本に達する。竪穴住居はいずれも上部削平をあまり被っておらず掘り込みの深さ0.5m以上を残しており，竪穴住居から採集した遺物は弥生後期全般にわたるものであった。土壙・溝についても同様である。

南端で確認した幅約５m深さ約1.8mの小規模な自然河道の上層には少量の弥生後期土器，下層には少量の弥生前期後葉もしくは中期初頭の土器を包含していた。

この部分では，確認した遺溝に限らず採集遺物に関しても古墳時代以降のものは一切含まれなかった。

８月の調査はこの部分の北方約1.5kmの地点以北のやはり，国道11号線拡幅に伴う官民境界の擁壁工事によるものであった。この場合も工事中発見で通報を受けて，現地を確認したときには，既に掘削は終了しており，今回も掘削断面の観察・記録化，遺物採集にとどまざるを得なかった。

2度にわたる失敗は遺跡範囲の把握と指導の不十分さを示すもので担当者として反省しなければならない。

今回の掘削部分の総延長は約200mで，遺構の確認できたのは，この南端部分約75mの範囲であった。それ以北は遺物包含層も認められなかった。

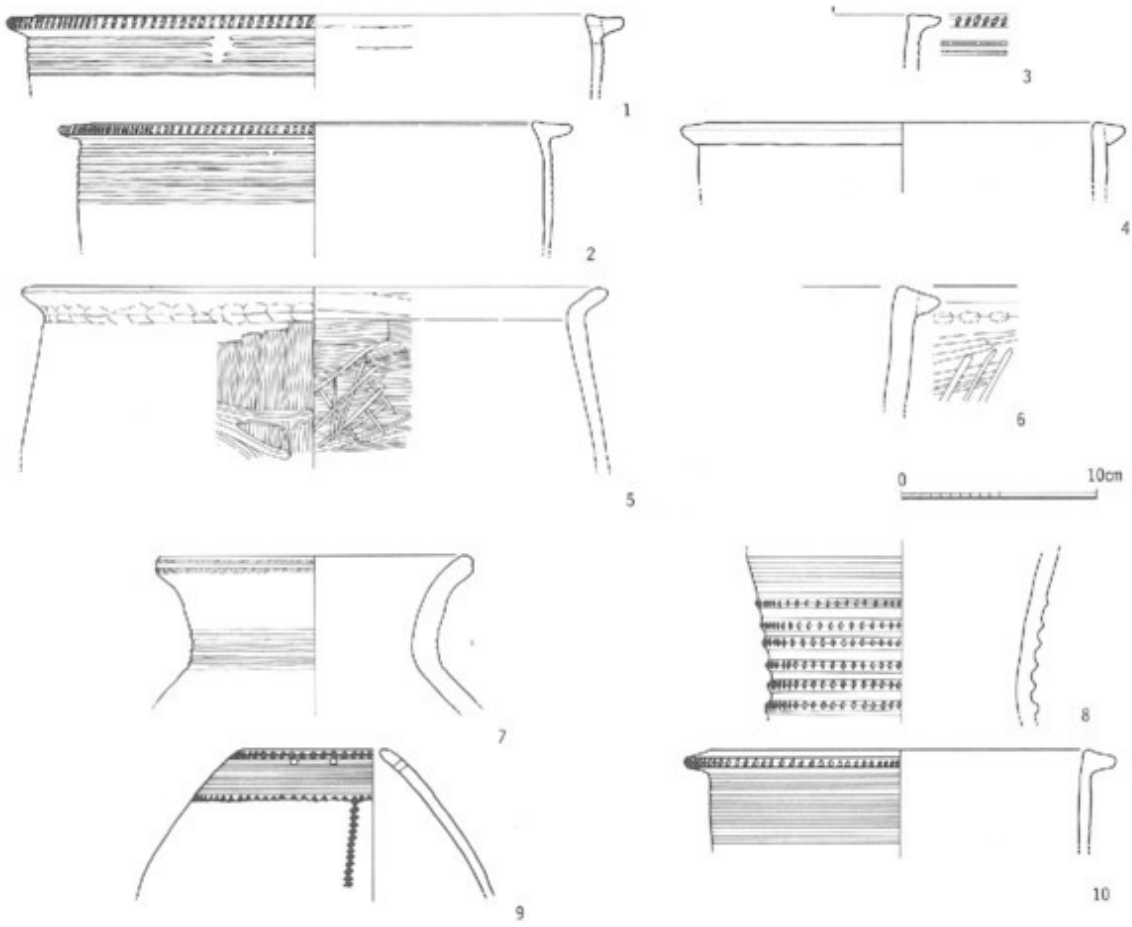
確認したのは，土壙もしくは溝14基(本)，柱穴4本であった。土壙と思われるもののなかには写真に示したように袋状を呈するもの4基を含んでいた。しかし，5月調査地点のような竪穴住居群は認められなかった。

出土遺物としては弥生時代前期後葉～中期前葉の土器，打製石鏃を含む多量のサヌカイト製石器，同剝片および獣骨が認められた。前期後葉の土器と中期前葉の土器は出土遺構によって分離することが可能である。県内に類例の少ない中期前葉の資料が得られた点，興味深い。また，多量のサヌカイト製品，剝片を伴出したのは，城山，五色台という二大サヌカイト産出地に挟まれた本遺跡の特質を示すものであろうか。

次に示したのは，8月調査時に出土した土器の一部である。上段は前期後葉の土壙資料，下段は中期前葉の土壙資料である。

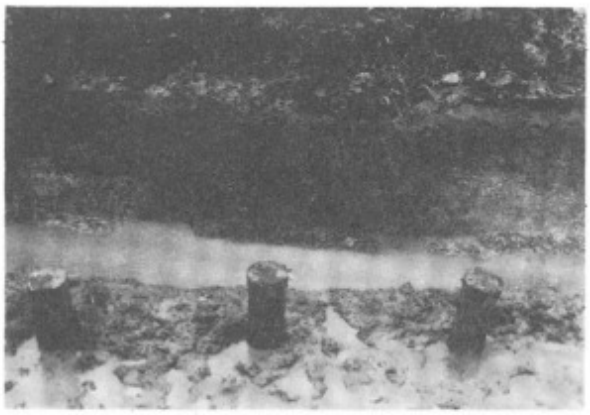
1～6は，前期後葉の甕形土器である。1～5は，断面形三角形の粘土紐を張り付けて作りだしたL字状口縁を持つ。このうち1～3は，端部に刻み目と口縁直下にへら描き沈線文を施す。6は，如意状口縁を持つ無文の甕である。

7～10は，中期前葉の資料。7は，頸の短い広口の壺で端部に沈線と細かい刻み目，頸部の付け根にへら描きの並行沈線文を施す。8は，壺の頸部片で刻み目を持った突帯を連続して張り付ける。9は無頸壺で，口縁部を連続刺突文，くし描き沈線文で飾る。また，端部直下に二孔一組の穿孔を持つ。10は，L字状口縁の甕。端部に刻み目を持ち，くし描き沈線文で飾る。



第１図　遺物実測図

第２図　本鴨遺跡87年８月調査区（北から）



第３図　木鴨遺跡87年８月調査区　袋状土坑

東　原　遺　跡

所在地　綾歌郡綾南町大字陶　　調査期間　昭和62年８月３日～９月30日

今回の調査は，一般国道32号線綾南バイパス建設に伴うもので，調査対象地の面積2,700㎡，61年度の遺跡詳細分布調査によって所在を確認したものである。

当該地は，いわゆる滝宮台地の東端に位置する。滝宮台地は西を横山山塊，北を火山，鷲の山山塊，南東を高山山塊に囲まれ，東は本津川を挟んで香南台地に相対し，南西は羽床盆地によって画されている。この台地の大部分は綾川水系に属するが，東端部のみ，本津川水系に含まれる。

東原遺跡位置図

東原遺跡はこの本津川水系に属する台地東端部，火山東南麓の標高60m前後の緩斜面上に位置する。更に微細に地勢を見ると火山南麓には，手指状に幾筋もの尾根線が張り出しており，調査区西半は，尾根筋間の谷状地形にあたり，東部は尾根側斜面から尾根線末端にあたる。

本遺跡の背後，山麓緩斜面のやや上方には，陶古窯跡群の東限にあたる平安末の数基の窯跡群が見られる。また，東方約500mの山麓緩斜面ではかつて，サヌカイト製石鏃などがまとまって出土したといわれる。したがって，調査に入る段階では周辺の窯業生産に関連する性格，例えば工人集団の集落を想定した。

以下，調査の概要を西から紹介する。

A地区

東原池の真下に位置し，旧地形では，浅い谷状地形と考えられる。比較的新しい時期の水田整備によって下部の削平を受けている。ほぼ東西方向，すなわち等高線に並行する方向にはしる小規模な溝数条を確認した。規模，形状から見て耕地の区画線と思われる。時期は中世後半を大きく遡らない。

B地区

A地区の東側，同様に谷状地形に位置する。等高線に並行する数条の溝と一間一間の掘立柱建物一棟，柵列一条等を検出した。溝は，やはり耕地の区画線と考えられるもので中世後半，建物，柵列は近世に属する。

C地区

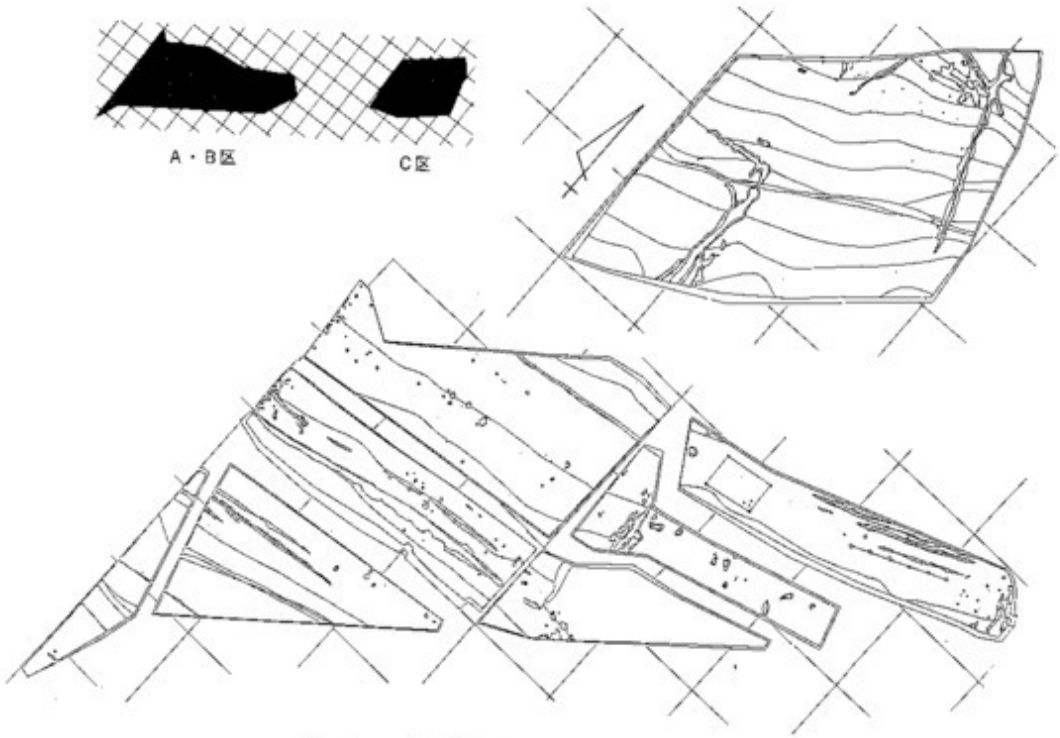
調査区東端，B地区とは約60mの間隔をあける。この地区は，前二者とは異なり尾根線側斜面から末端にあたる部分である。A地区同様の耕地整備によって南半部では1mに達する客土が見られた。直角に折れる溝を含め，概ね等高線に直行する溝数条と調査区最高所の東南端付近で10基あまりの柱穴群を確認した。調査区内で建物は復元できなかったが，検出位置から見て以北の尾根線上で建物群を形成する公算がたかい。遺物は他地区より豊富で柱穴群，溝から中世後半の土師質椀，土鍋等が出土した。特に西南部のかぎの手に曲がる溝からは，6枚の土師質椀が重ねて伏せられた状態で出土した。また，地山直上からサヌカイト片数点を検出した。風化の進み具合から見て旧面器時代の所産の可能性がたかい。尾根上方にこの期の遺跡が存在する可能性がある。

次頁に図示した遺物はC区出土の土師質土器である。何れも西南部の溝で検出した資料である。

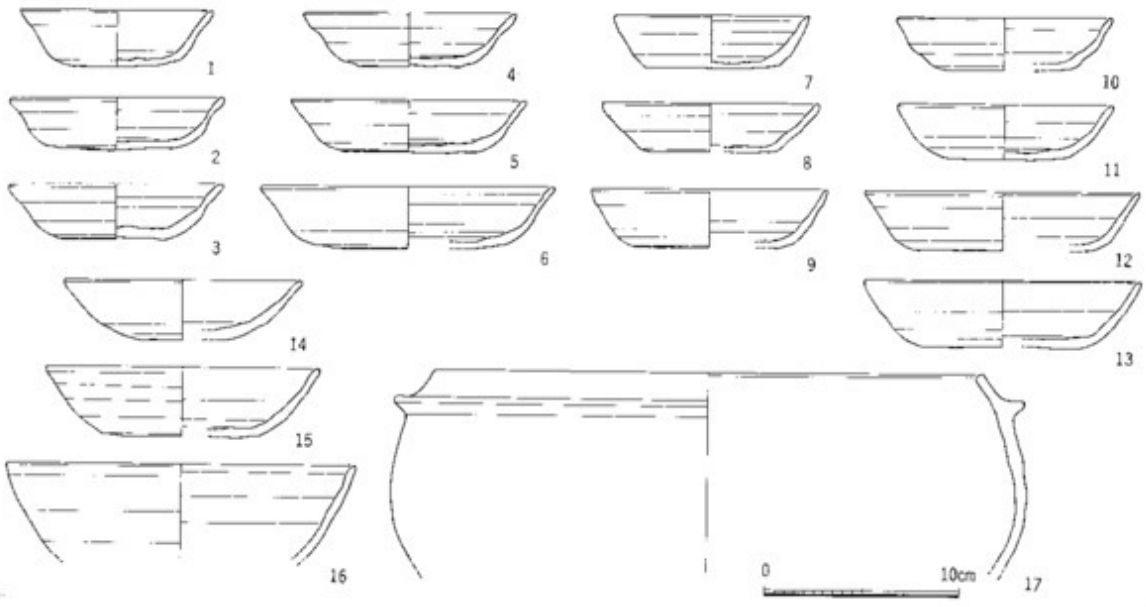
1～16は土師質椀。口径10～12cmと14～15cmの二種類が見られる。内外面ともなで仕上げで底面にへら切り痕を残すものが多く，いずれも比較的浅い。これらに比べて17は深めであるが，底部付近が欠落しているため，全形は不明。18は，土師質の土鍋，鍔部はかなり小型化している。器表は剝落しており，調整不明である。

まとめ

今回の調査では，当初期待したような時期の集落は確認できなかった。また，周辺の窯の操業期間に並行する時期の遺物も一切認められなかった。今回の出土遺物の厳密な時期比定は，行い得なかったが概ね中世後半に位置付けられると考える。また，検出した遺構の性格を上述のように考えることに誤りが無いとすれば，東原遺跡で，現在のような耕地化が開始されるのは中世後半であり，陶古窯跡群廃絶後，かなりの空白期間があることになる。この点が陶古窯跡群一円に普遍化できるかどうかは，古代の窯業生産およびその工人集団の社会的性格を考える上で重要な点であろう。



第１図　東原遺跡遺構配置図（Ｓ＝1/1,500）



第２図　遺物実測図

栗　林　公　園

所在地　高松市栗林町1564－2　　調査期間　昭和62年12月14日～12月21日

特別名勝栗林公園の南庭に所在する掬月亭南便所は，最近白蟻の被害により老朽化しているため水洗式に改築する計画が管理団体である香川県によって立てられた。それに対し文化庁より事前に試掘調査を実施するよう指導があり，県教育委員会を主体として試掘調査を実施するに至った。

栗林公園位置図

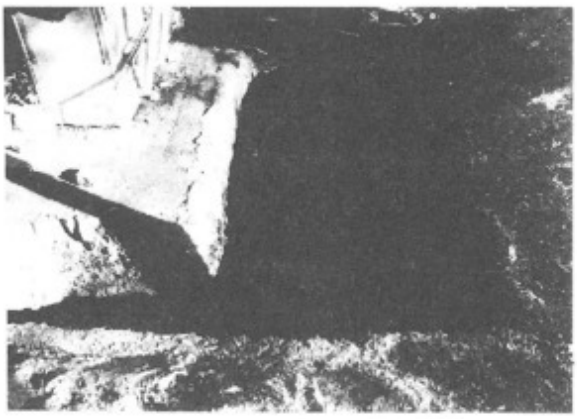
当該地は栗林公園の南辺ほぼ中央付近であり，歴史的には，当該地より北西約100mの位置に室町時代の作と言われる小普陀があり，また，西に150mほどの地点には江戸時代初期に建造されたと言われる観音堂跡が所在し，付近が公園内では最も早くから庭園として利用された地域であることを示している。

便所部分については，東西８m，南北４mの調査区を設定。現便所西側に４㎡拡張したため計36㎡を対象とした。また，排水路部分については，長さ10m，幅0.6mのトレンチを設定した。

現地表下約50cmまでは厚い黄色系の粘質土が堆積している。昭和40年代の南湖底ざらえの際，当該地を排土処理場として使用した結果と思われる。その下層は約１mほどにわたって昭和30～40年代の廃棄物が堆積している。当時の焼却炉の跡も２ヶ所でみられた。

廃棄物層直下が厚い砂礫層となる。約１m掘り下げたが，土質に変化は認められなかった。従って，当該地は付近を流れていたといわれる香東川旧河道の氾濫原であったと考えられる。

このように調査前に予想された近世に属する遺構，遺物は検出されなかった。砂礫層と現代の廃棄物層との間に間層がみられないのは，北側の土塁状の盛土を築く際，当該地の掘削土を盛った結果と考えられる。


第１図　栗林公園調査区全景

以上のことから，当該地については遺跡として認める根拠がないと判断されるが，付近の歴史的環境からみて，周辺の現状変更については同様の措置が必要であろうと考えられる。

樋ノ口遺跡

所在地　観音寺市本大町下1516　　調査期間　昭和61年6月26日～7月9日

1．調査の概要

当遺跡は，三豊平野を流れる財田川の左岸にあり，微地形を復元することによって，財田川の自然堤防上に立地していることがわかる。この付近では，以前に弥生時代の土器・石器などが多数出土しており，遺跡台帳にも周知の遺跡として登録されていた。

樋ノ口遺跡位置図

2．遺構について

耕作土直下，弥生時代前期の遺構面が確認され，木棺墓群・土坑・柱穴などの遺構が多数検出された。

木棺墓は，大きいものは168×60cm，小さいものは84×50cmで，計33基確認されている。また，土坑は集石を伴うものや貯蔵穴と思われるような袋状を呈したものが検出されている。多数の柱穴も弥生時代前期のものも思われ，おそらく後世の削平によって竪穴住居を構成する柱穴だけが残っているものと思われる。

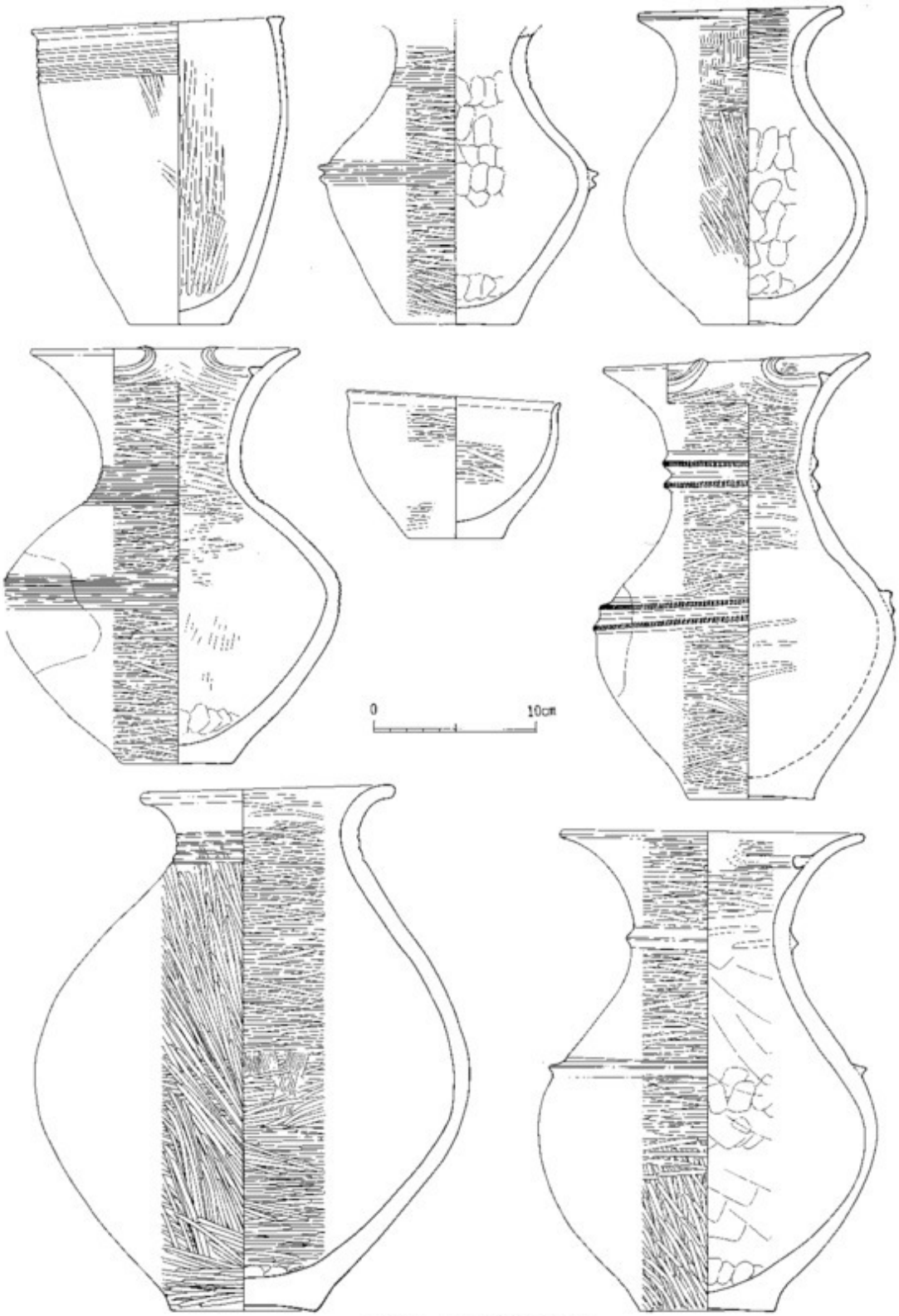
弥生時代前期の遺構面により下層で縄文時代後期の溝状の落ち込みを検出した。埋土中より多数の土器・石器・炭化物・骨片が出土している。

3．遺物について

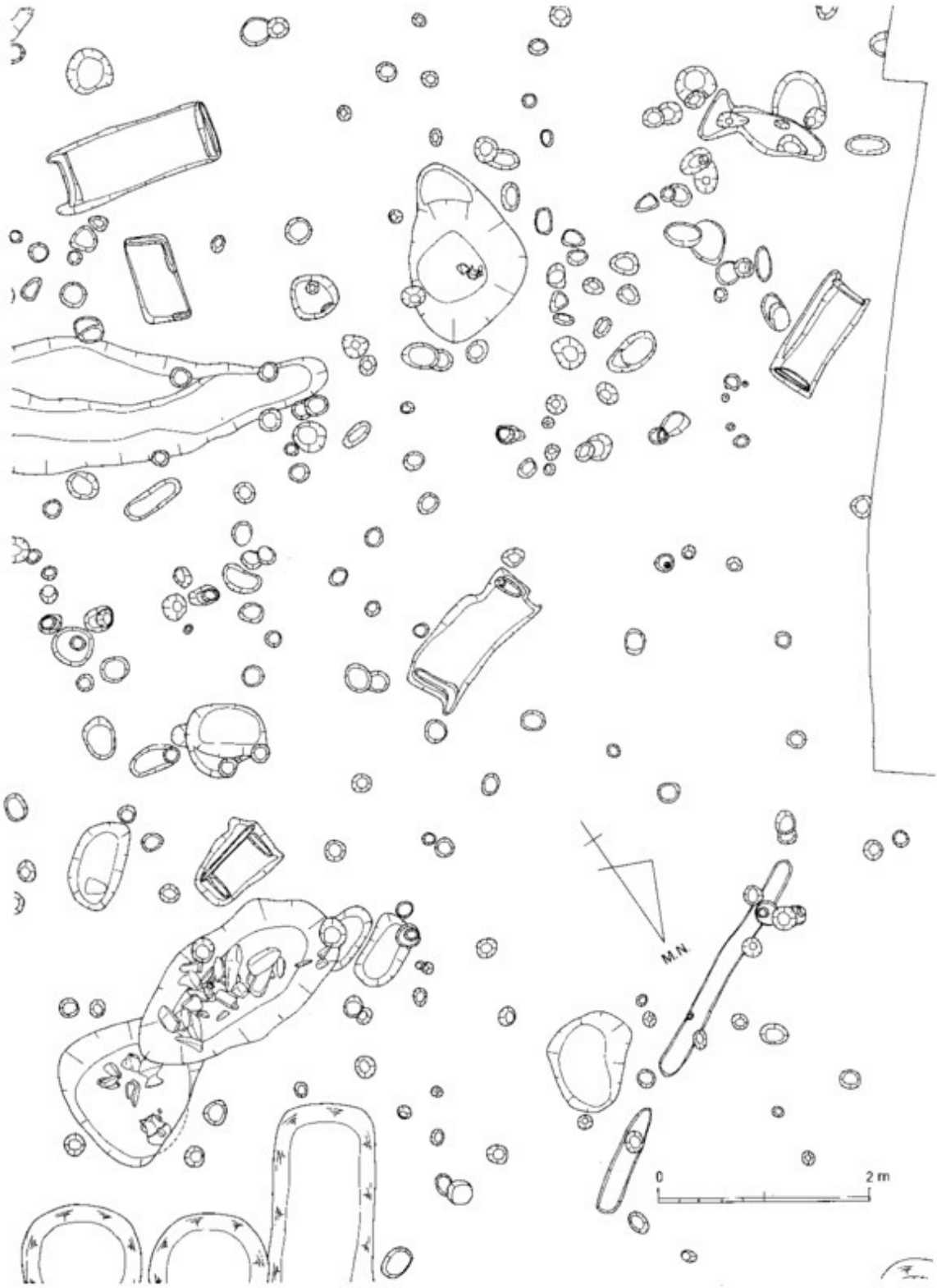
遺物は，木棺墓・土坑のなかより多数の弥生土器が出土しており，その中には完形のものも含まれる(第1図)。これらの時期は弥生時代前期新段階のものも思われる。また，縄文時代の遺物としては深鉢・浅鉢などが出土しており，九州との関係を示す鐘ヶ崎系の土器も出土している。時期は，縄文時代後期（彦崎KI式期）と思われる。

4．まとめ

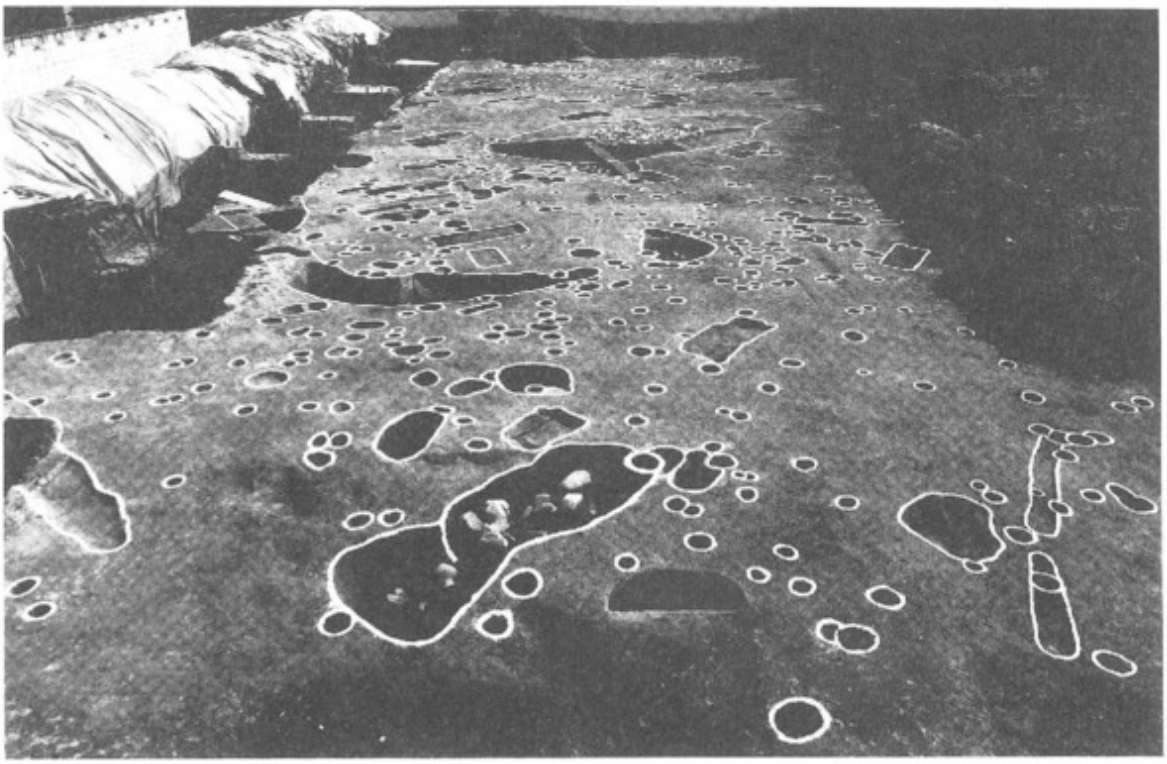
三豊平野において，やや内陸区部で発見された縄文時代・弥生時代の遺構は，今後海岸線の入り込み状況あるいは財田川の自然堤防などの自然環境を復元するだけにとどまらず，各時代を通じての自然との融合性を考えるに貴重な資料となった。また，四国横断自動車道の調査によって南方300m地点で確認された一の谷遺跡群との関係で遺跡の範囲を決定することが，今後課題となるであろう。



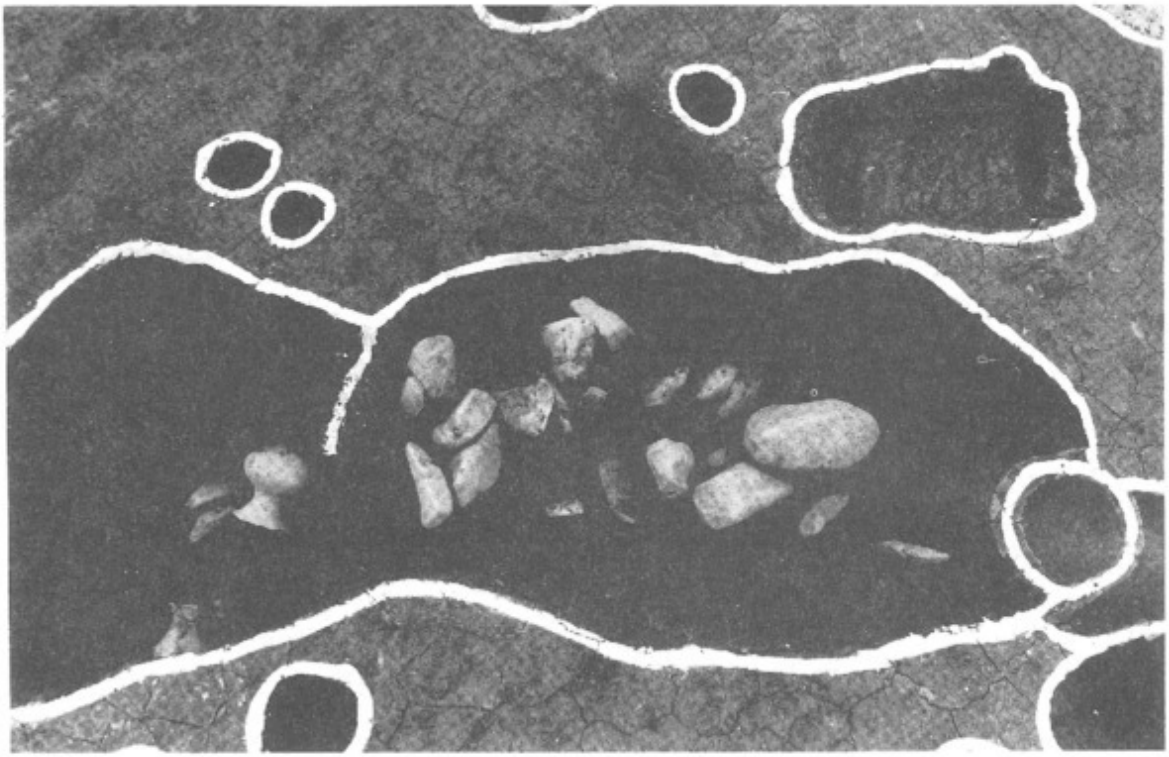
第1図　出土遺物実測図



第2図　遺構平面図



第3図　検出遺構全景

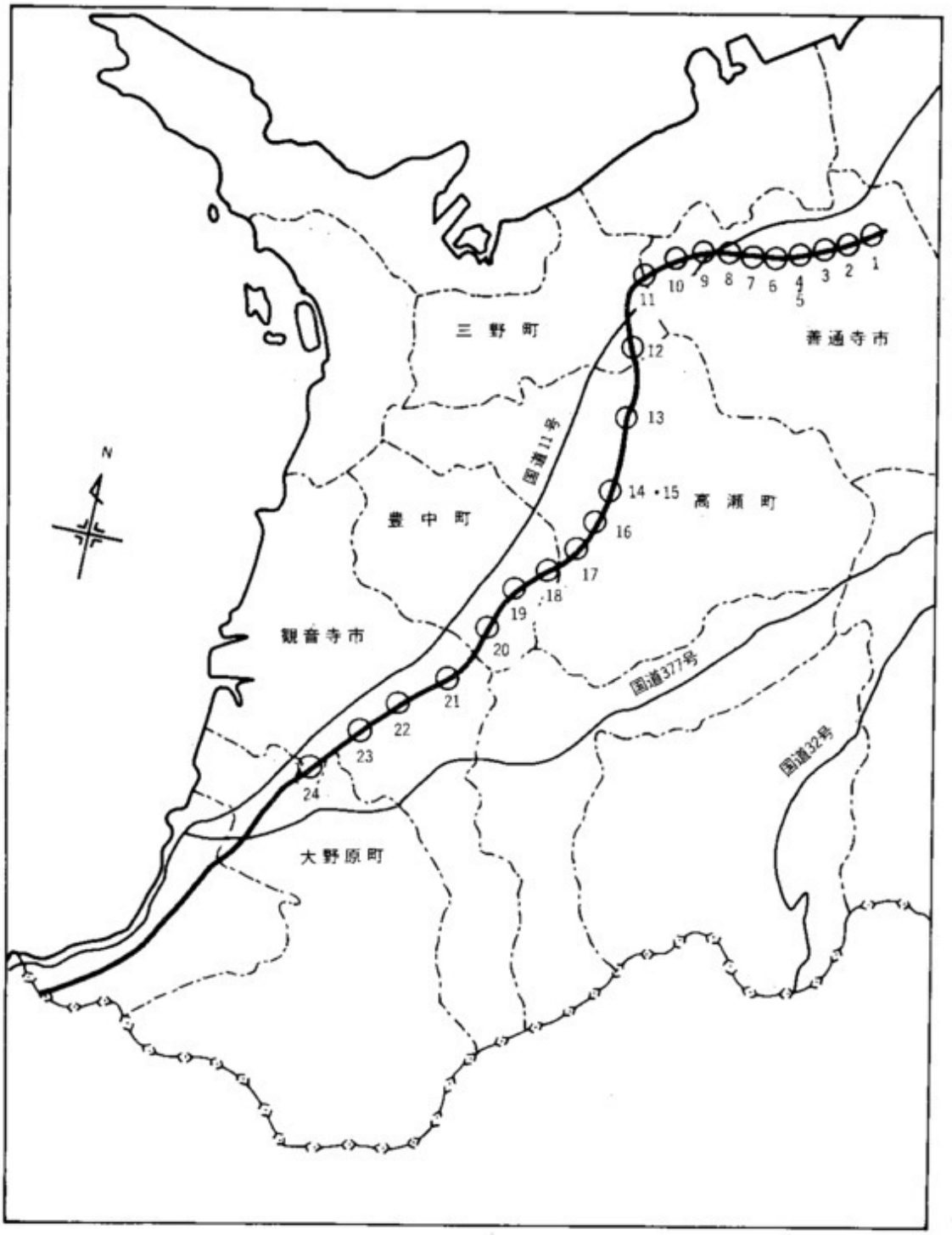


第4図　SK01，02，ST01検出状況

四国横断自動車道埋蔵文化財調査概況

昭和57年度に金蔵寺下所遺跡より開始した四国横断自動車道（善通寺～豊浜）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は，昭和59年度以降も各遺跡で継続実施し，昭和62年６月柞田八丁遺跡の調査をもって無事終了した。各遺跡ごとの調査面積，調査期間は下表のとおりである。

番号	遺跡名	対象面積(㎡)	所在地	59年度	60年度	61年度	62年度	発掘調査期間
1	金蔵寺下所遺跡	17,000	善通寺市金蔵寺町下所	7,700				57. 1. 2～60. 2.28
2	稲木遺跡C	4,000	善通寺市稲木町・下吉田町	3,400				59. 4. 1～60. 3.31
	稲木遺跡B	17,100	〃	12,000				59. 9.17～60. 2.28
3	稲木遺跡A	300	〃					58. 6.29～59. 2.14
4	永井遺跡	33,300	善通寺市下吉田町・中村町		15,600	17,700		60. 5. 7～61.12.23
5	中村遺跡	9,000	善通寺市中村町筆岡	9,000				59. 7. 3～59. 9.17
6	乾遺跡	2,100	善通寺市中村町乾	200	2,100			60. 9. 2～60.11.20
7	上一坊遺跡	2,800	善通寺市吉原町上一坊	400	2,200			60.11.13～61. 1.24
8	矢ノ塚遺跡	11,800	善通寺市吉原町矢ノ塚	4,800	7,000			59.10. 8～60. 8.30
9	西神殿遺跡	5,200	善通寺市稗殿町三反畑	3,000	1,400	800		60. 2. 4～60. 4.30(1次) 61. 7.28～61. 8.11(2次)
10	深尾石棺群	500	三野町大見深尾	500				59. 9.11～59.10.23
11	道免窯跡	100	三野町道免丸尾	100				59. 9.11～59.10.23
12	北条遺跡	100	高瀬町上高瀬北条		100			60. 5. 9
13	利生寺遺跡	3,200	高瀬町上勝間砂古		3,200			60. 5.22～60. 7.18
	大門遺跡	5,500	〃		5,500			60. 7.22～60. 1.28
14	利生寺古墳	700	〃		700			60.12. 2～61. 3.17
15	矢ノ岡遺跡	2,600	高瀬町上勝間矢ノ岡		2,600			61. 1.28～61. 2.27
16	四ツ塚古墳	1,000	豊中町笠田笠岡	800				59. 4.16～59. 5.14
17	財田古墳	1,000	豊中町上高野					58. 9.26～58.11.30
18	延命遺跡 城ノ岡地区	5,000	豊中町上高野城ノ岡	1,000				58.11.28～59. 7.18
	延命遺跡 八反地地区	13,000	豊中町上高野八反地	10,000	2,000	1,000		59. 7.19～60. 5.15(1次) 61. 9. 1～61. 9.30(2次)
19	一の谷遺跡群	36,100	観音寺市本大町・古川町	2,500	17,600	16,000		60. 5.15～61.12.25
20	石田遺跡	17,200	観音寺市池之尻町石出	1,200	16,000			60. 5. 1～60.1.11
21	長砂古遺跡	8,900	観音寺市池之尻町大長	1,200	2,500	5,200		51. 1.13～61. 9. 9
22	柞田八丁遺跡	14,000	観音寺市柞田町八丁	100		13,420	480	61. 4. 3～61.11.28 62. 1. 7～62. 1.27 62. 6. 5～62. 6.17
合計		211,500		57,900	78,500	54,120	480	



第２図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地

稲木遺跡C地区

所在地　善通寺市稲木町　　調査期間　昭和59年4月1日～60年3月30日

遺跡は扇状地の扇端部を占地し，弥生時代後期後半頃の集落跡と墳墓を中心とする。

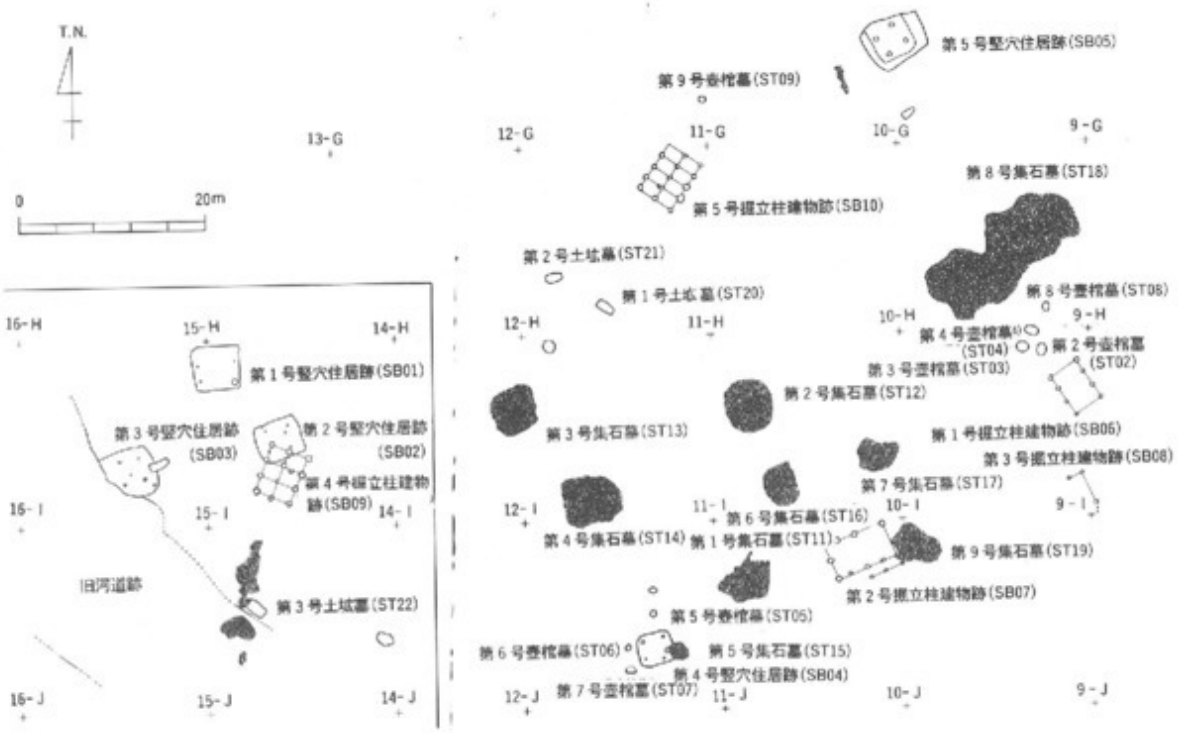
検出された遺構には竪穴住居跡5基，壺棺墓10基，土坑墓3基，集石墓9基などがあり，特に集石墓は香川県下では初例である。また同時期に形成された濃密な遺物包含層を伴っており，採集された弥生土器も相当量にのぼっている。包含層より出土した遺物には他に銅鏡片2点，管玉3点，鉄製品，石器などがある。

なお少数ではあるが，5棟の掘立柱建物跡などの古墳時代後期以降の遺構も検出されている。

稲木遺跡C地区位置図

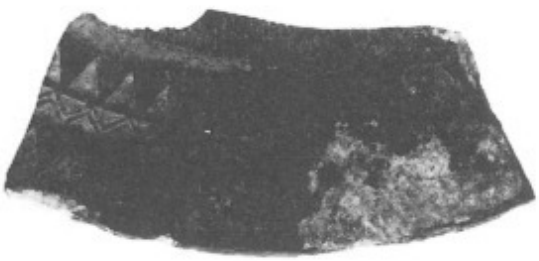
第1表　主要遺構一覧表

名　称	略号	形　態	規　模	主軸方位	特記事項
第1号竪穴住居跡	SB01	隅丸方形	長軸 5m，短軸4.7m	N-1°-W	焼失家屋。北壁にベッド状遺構を有する。
第2号　〃	〃 02	〃	〃 4.8m，〃 4.3m	N-19°-W	埋土中に礫群が遺存する。
第3号　〃	〃 03	〃	〃 5.9m，〃 5.2m	N-17°-W	東壁に舌状施設を有する。
第4号　〃	〃 04	〃	〃 4.2m，〃 3.8m	N-12°30′-W	小規模。
第5号　〃	〃 05	隅丸長方形	〃 6.4m，〃 5.2m	N-32°-W	東・西・南壁にベッド状遺構を有する。
第1号掘立柱建物跡	〃 06	梁行1間，桁行3間	梁行3.4m，桁行4.7m	N-34°-W	
第2号　〃	〃 07	〃 2間，〃 4間	〃 3.8m，〃 6.6m	N-67°-E	南東部に張出部を有する。
第3号　〃	〃 08	〃 1間，〃 2間	〃 1.5m，〃 3.5m	N-30°-W	遺存状態が悪い。
第4号　〃	〃 09	〃 2間，〃 3間	〃 4.2m，〃 5.4m	N-23°-E	総柱による。
第5号　〃	〃 10	〃 2間，〃 4間	〃 4m，〃 5.7m	N-35°-E	〃
第1号壺棺墓	ST01	棺身のみ遺存	不　明	不　明	試掘調査時の出土。
第2号　〃	〃 02	壺形土器と鉢形土器の合口	土坑長径1.3m，短径1.1m	S-12°30′-W	
第3号　〃	〃 03	〃	〃 1.3m，〃 1m	N-35°30′-E	土坑西壁にテラス部を有する。
第4号　〃	〃 04	棺身のみ遺存	〃 1.5m，〃 1m	推定N-59°-W	遺存状態が悪い。
第5号　〃	〃 05	壺形土器と鉢形土器の合口	〃 0.8m，〃 0.7m	S-11°-E	
第6号　〃	〃 06	〃	〃 0.7m，〃 0.7m	N-36°30′-W	
第7号　〃	〃 07	甕形土器の下胴部を蓋に転用	〃 1.2m，〃 0.8m	S-25°30′-W	
第8号　〃	〃 08	壺形土器2個の合口	〃 0.9m，〃 0.8m	N-29°-W	ヒトの歯が遺存する。
第9号　〃	〃 09	壺形土器の下胴部を蓋に転用	〃 0.8m，〃 0.7m	S-55°30′-E	
第10号　〃	〃 10	壺形土器と鉢形土器の合口	不　明	不　明	試掘調査時の出土。
第1号集石墓	〃 11	長楕円形	長径3.5m，短径2.5m	主体部N-45°-W	2基の主体部を有する。
第2号　〃	〃 12	〃	〃 6m，〃 4m		墳丘南端部において土坑を検出。
第3号　〃	〃 13	円形	〃 3m，〃 3m	主体部N-47°30′-W	主体部を有する。
第4号　〃	〃 14	方形	〃 5m，〃 5m		南辺部に鉢形土器5点を供献。
第5号　〃	〃 15	長楕円形	〃 1.7m，〃 1.2m		基盤層直上において焼土面を検出。
第6号　〃	〃 16	円形	〃 3m，〃 3m	主体部N-87°30′-W	墳丘中央部に土器群を有する。
第7号　〃	〃 17	不整形	〃 4m，〃 3.5m		遺存状態が悪い。
第8号　〃	〃 18	長楕円形	〃 17.5m，〃 7.5m	主体部N-24°-E	2基の墳丘から成る可能性あり。
第9号　〃	〃 19	方形	〃 4.5m，〃 不明		中央部と縁辺部に土器群を有する。



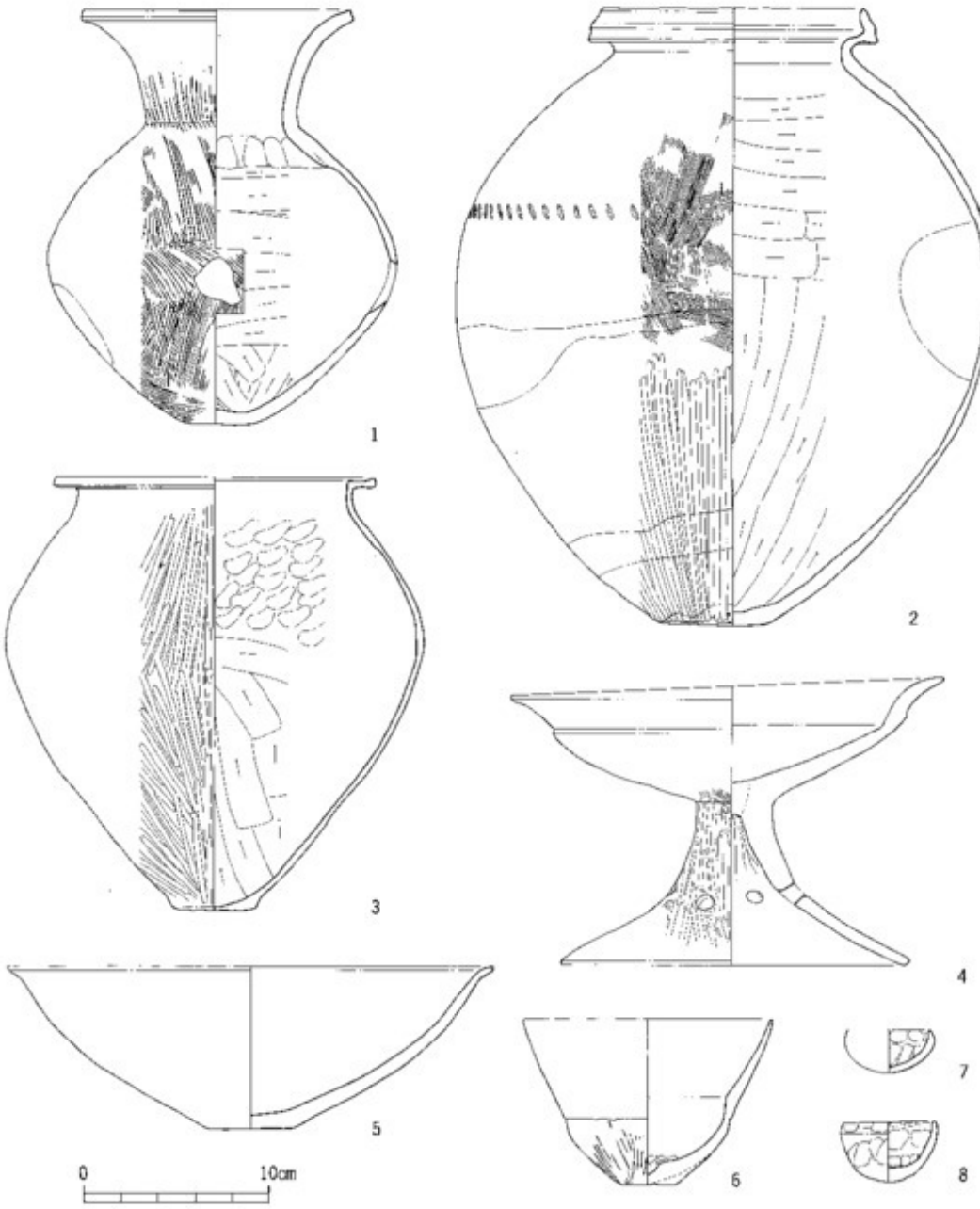
第1図　主要遺構配置図

第2図　集石墓



第4図　銅鏡

第3図　壺棺墓



第5図　第5号竪穴住居跡（SB05）出土遺物実測図

稲木遺跡Ｂ地区

所在地　善通寺市稲木町，下吉田町　　調査期間　昭和59年９月17日～60年２月28日

稲木遺跡Ｂ地区では，弥生時代の溝・西暦700年前後の建物群・９～10世紀の溝と建物を検出した。

なかでも中心は，西暦700年前後と推定している建物群である。

建物は調査区内で34棟検出され，このうち５棟が平安時代前半，残り29棟がこの時期に相当すると考えられる。

この29棟については，重複・建て替えがあり，数時期に分けられる可能性が高いが，この点については現在検討中である。

29棟中総柱建物は７棟あり，倉庫の可能性が高いと考えている。

稲木遺跡Ｂ地区位置図

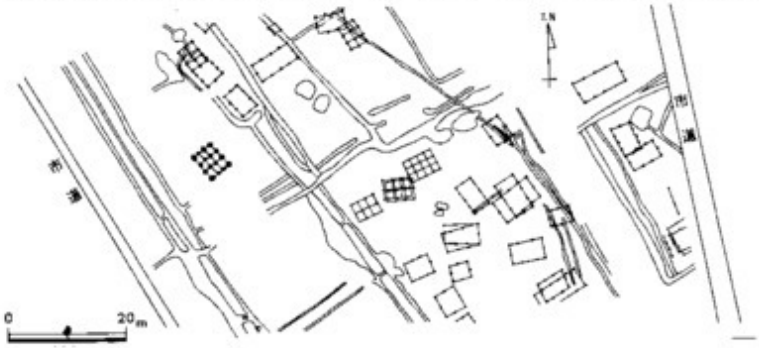
建物の規模は

１×１間が１棟	３×３間が１棟
２×２間が４棟	３×４間が１棟
３×２間が14棟	
４×２間が７棟	
５×２間が１棟	

である。

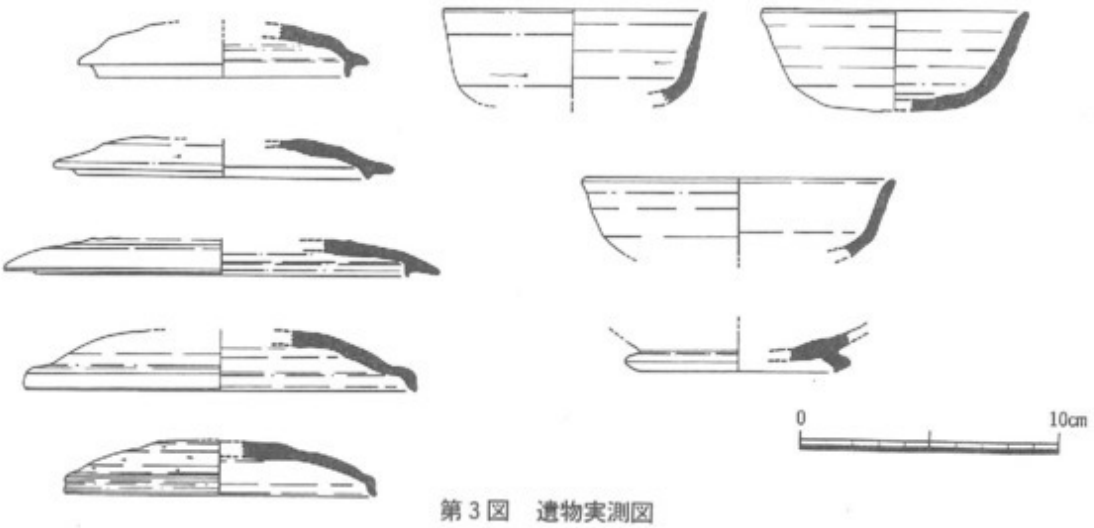
この建物群以外に検出された遺構として，溝50・土坑30がある。土坑中には弥生時代末～古墳時代初めに位置付けられるものが４ヶ所ある。

遺跡の範囲は，現状の地形からすれば，北へ20m，南へ数十mの広がりが予想される。



第１図　Ｂ₂地区遺構配置略図

第２図　B_3地区全景



第３図　遺物実測図

永　井　遺　跡

所在地　善通寺市下吉田町，中村町　　調査期間　昭和60年５月７日～61年12月24日

１．立地と環境

永井遺跡は善通寺市中村町島田・榎田及びこれに隣接する下吉田町下所西に所在する。

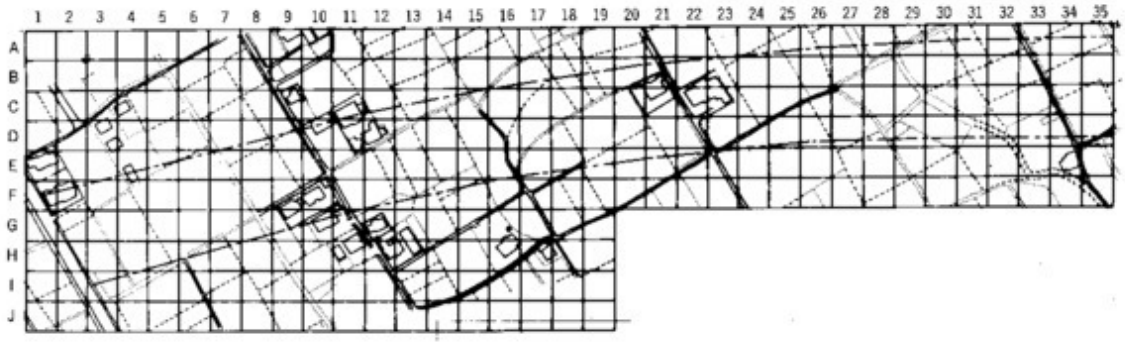
四国横断自動車道の路線にかかる遺跡面積は33,300㎡で，県道多度津・善通寺線から市道石川永井線までの約700mの範囲である。

永井遺跡の存在は，横断道予定路線内の試掘調査によって発見された。この試掘調査は丸亀平野に遺存する条里の確認を目的として実施したが，中世及び縄文時代の遺物が豊富に出土したため，昭和60年５月７日から全域の本調査が実施されるに至った。

永井遺跡位置図

本遺跡は丸亀平野の西部，金蔵川と弘田川に東西を挟まれた沖積平野に立地する。遺跡地の標高は海抜18～20mで，周辺には条里の遺制を示す方形の土地区画に基づいた水田が広がっている。

永井遺跡周辺の遺跡をみると，これまでは南部の五岳山・大麻山の縁辺部に善通寺地域の主要な遺跡が集中する反面，沖積平野地帯では三井遺跡などの弥生時代前期の遺跡がわずかに知られていたにすぎなかった。しかし，金蔵寺下所地区・稲木地区・永井地区・吉原地区などの，調査によって，縄文時代から中世に至る集落跡が明らかになった。一方，善通寺地域の縄文時代については，これまで，五条遺跡・金蔵寺下所地区・稲木Ａ地区・吉原地区などで後晩期の土器片がわずかに出土していたのみであったので，後晩期の遺物を大量に出土した永井遺跡は，この地域



第１図　横断道路線と地区割図

の縄文時代を知るうえで，きわめて注目すべき遺跡であるといえよう。

2．遺構について

今年度の調査対象地は，遺跡西端を南北に走る県道多度津・善通寺線から東へ約340m付近まで（Ⅰ～Ⅳ区），面積にして15,700㎡である。

検出した主な遺構には，縄文時代後晩期の自然河川跡（Ⅰ～Ⅲ区及びⅤ区），中世を中心とする時期と考えられる掘立柱建物跡(11棟)，その他のものとして，江戸時代の土壙などである。

第２図　SB8501

SB8501

H－３グリッドで検出した。２×４間(380cm×820cm)の規模をもち，主軸方向はN30°W，柱穴からの出土遺物は土師質小皿の破片が数点であり，時期は中世と考えられる。

SB8509

F－８グリッド（Ⅲ区）で検出された。２×２間（380cm×700cm）の規模をもち，主軸方向はN25°Wである。建物を囲む溝から近世と思われる土師質土器を出土している。

第３図　SR8501杭列

SR8501

Ⅰ区の最西端で，南東から北西に向かって流れたと考えられる，幅約12m，深さ約２mの規模をもつ自然河川を検出した。南及び西は調査区外となるため，わずか15m程度の長さしか発掘できなかったが，大量の縄文時代後晩期の遺物が出土した。土層を大別すると上よりⅠ層－黒色粘質土，Ⅱ層－青灰色粘質土，Ⅲ層－青灰色砂，Ⅳ層－青灰色砂礫の順の堆積である。

Ⅰ～Ⅲ層までは，縄文時代晩期を中心とする土器と打製石斧，Ⅳ層からは，縄文時代後期の土器及び打製石斧を出土した。特に打製石斧は，Ⅰ～Ⅳ層まで，100点以上出土していることが注目される。また，Ⅲ層の中程から，打ち込まれたと考えられる14本の杭列を検出した。杭の大きさは，おおむね長さ50cm，直径５cm程度である。杭列の方向は，川の流れの方向とほぼ同じである。

3．遺物について

60年度の調査では縄文時代から江戸時代に至る各種の遺物が出土しているが，なかでも特に注目されるのは縄文時代の自然河川から大量に出土した土器・石器・杭及び植物性自然遺物である。ここではSR8501から出土した縄文後期土器の一部を紹介する。

第4図1～4は頸部と胴部外面にヘラまたは半截竹管で施された沈線文を持つ。1は口縁部外面に縄文を持つ。4は縄文地の上に，沈線文を施している。これをⅠ類と仮称する。

6～8・9・12は横走する直線的な磨消縄文を持つ。3本沈線の内側に縄文を持つもの（12）と，縄文部と磨消部を交互に横走させるもの（6・7）があり，特に浅鉢形土器に沈線の多条化の傾向が認められる。6は胎土に結晶片岩を多量に含むことからみて，徳島からの搬入品であろう。以上をⅡ類とする。

Ⅲ類（5・10・11）は多条化した沈線を持つ。5は沈線間すべてに縄文が施されるが，10は3本の沈線間のみに縄文を持ち，11は縄文を持たない。なお，10は沈線の下に短い平行斜線文を持つ。

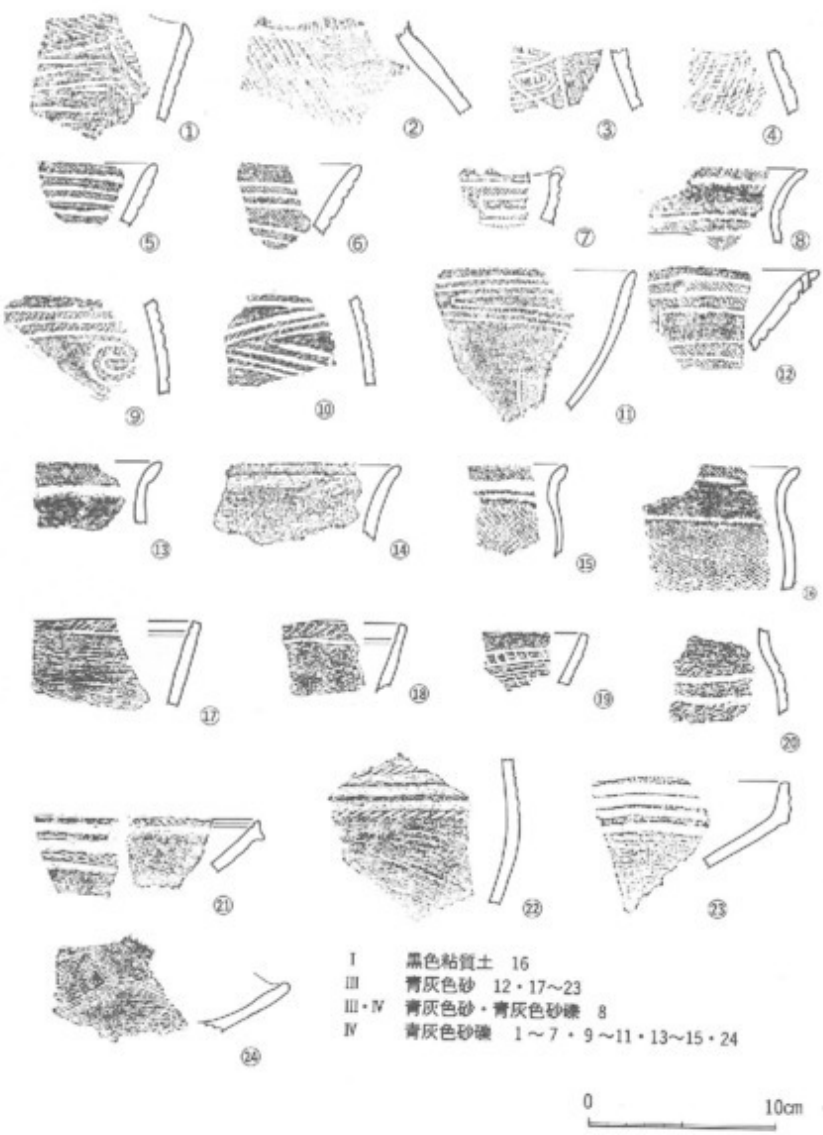
Ⅳ類（13～16）は肥厚された口縁部の外面または内面と，胴部外面に縄文を持つ深鉢形土器である。口縁部の肥厚が大きいものは少ない。

Ⅴ類（17～20）は，ヘラまたは巻貝による横走する沈線と斜行する刻み目を持つ土器である。

Ⅵ類（21・22）は巻貝による凹線と，ヘラによると思われる刻み目を持つ。

Ⅶ類（23）は巻貝による凹線を持つ土器である。刻み目はみられない。

24は櫛描文を持つ土



第4図 SR8501出土土器

器で，加曽利ＢⅠ式に属するものである。

これらの縄文時代後期土器を中部瀬戸内における既存の編年案に対応させると，ヘラ描きまたは半截竹管による沈線文や条線文を持つⅠ類は彦崎ＫⅠ式に最も近い。(註)

Ⅱ類には，３条を単位とする細い沈線の内側に縄文を施した磨消縄文を持つものがあり，福田ＫⅡ式の文様と類似する。しかし，Ⅱ類の文様は器面全体には施されず，口縁部及び体部上半を直線的に横走する。しかも，文様集約部分に曲線的な文様を持つことや，口縁部の拡張，肥厚もほとんど認められず，横走する沈線が多条化の傾向を示していることなどから，福田ＫⅡ式より新しい時期のものとすべきである。

Ⅲ類は沈線の多条化がさらに顕著であり，型式的にはⅡ類より後出する。

福田ＫⅡ式に後続するとされる彦崎ＫⅠ式・彦崎ＫⅡ式の内容が必ずしも明らかにされていないため，Ⅱ類，Ⅲ類との対応関係には不明な点が多いが，Ⅱ類が福田ＫⅡ式より後出することからみて，Ⅱ・Ⅲ類は彦崎ＫⅠ式・ＫⅡ式に平行するものと考えられる。

Ⅳ類は彦崎ＫⅠ式・ＫⅡ式の両期に伴うものであるが，一般的には13のように口縁部の肥厚が大きく，縄文帯の幅が広いものが彦崎ＫⅠ式に，14～16のように肥厚が小さく，縄文帯の幅が狭いものが彦崎ＫⅡ式に伴うと考えられている。

Ⅴ類は横走する沈線文と刻み目を特徴とするもので，27と28は馬取式とすることができる。Ⅵ類は巻貝による凹線文と刻み目を持つ。Ⅴ類とⅦ類が近しい関係にあることを示す資料である。

Ⅶ類は巻貝による凹線文と巻貝の押捺を特徴とし，福田ＫⅢ式とすることができる。

(註)

松崎寿和・間壁忠彦「縄文後期文化―西日本」『新版考古学講座』　3　1978

鎌木義昌・高橋護「縄文文化の発展と地域性―瀬戸内」『日本の考古学』　Ⅱ　1965

永井遺跡 Ⅱ

1．はじめに

発掘調査は昭和60年５月７日に開始し，61年12月24日に終了した。その結果，縄文時代後期中頃（彦崎ＫⅠ式）の自然河川跡から，ドングリなどの多量の堅果類と共にヒョウタン・編み物・石皿・磨石・鳥形木製品などがまとまって出土し，香川県の縄文時代を考えるうえできわめて重要な遺跡であることが確認された。

2．遺構について

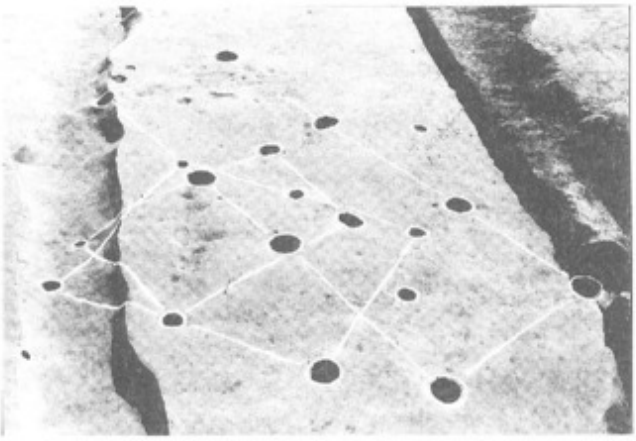
今年度の調査対象地は，市道吉田道線の西150mから東200m付近の東西約350m（Ⅴ～Ⅻ区），面積にして17,600㎡である。

検出した遺構は，掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，それに自然河川跡である。これらの多くは地表下20cm（耕作土直下）～40cmで検出された。検出した主な遺構には，縄文時代後晩期の自然

河川跡(IV～VII，X区)，弥生時代と考えられる掘立柱建物跡，その他のものとして，近現代の土坑，溝状遺構，ピットなどがあるほか，縄文時代後期の包含層も確認できた。

III～VI区で，昨年検出したSR8507に続くと考えられる幅4m，深さ1.2mの規模を持つ蛇行の激しい自然河川跡を検出し，これらが一連の自然河川跡であることが明らかになった。土層を大別すると，I層，暗灰褐色土，II層，灰褐色砂質土，III層，砂層であり，最下層のIII層から縄文土器を多量に出土している。また，この自然河川跡の下にはさらに古い河川跡があり，これに堆積した青灰色砂層，青灰色砂礫層からも，縄文時代後期の土器を主体とする遺物を出土した。

X区で，重複した掘立柱建物跡を3棟検出した。柱穴の形態は，すべて円形を呈しているが主軸方向・規模は一致しない。SB8601は1間×3間（120cm×720cm)，SB8602は1間×2間(220cm×320cm)，SB8603は1間×1間(200cm×270cm)の規模をもつ。出土遺物としては，それぞれ土器片が数点だけである。各々の柱穴は弥生時代前期と思われる溝状遺構SD8691に切られている。



第5図　X区掘立柱建物跡

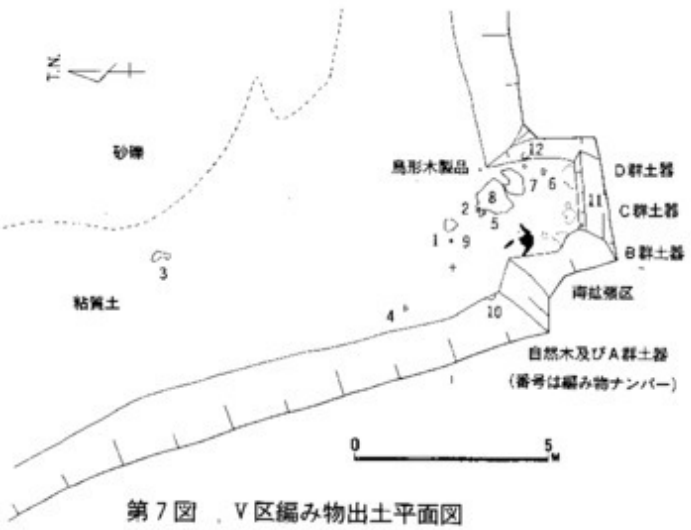
3．下層河川跡の遺物出土状態

F－16からD－14に向って北西に流れる下層河川跡の粘質土から多量の植物遺体や土器・石器・獣骨・土偶等が出土した。F－16付近では，彦崎KI式の土器群があり，その北側を中心に葭の類を用いた13点の編み物や石皿・磨石を出土したほか，ドングリ・トチ・クリ・クルミ・ムクロジ・センダン・イヌガヤ・ムク・クス・ヒョウタンが出土した。これらの中ではドングリが最も多く，しかも破損していない実も多かった。クリ・トチは果皮の破片である。編み物№1の東側ではこれらの堅果類が集中して出土し，編み物№12は堅果類に包み込まれるように出土した点が注目される。D－14では編み物は出土せず，堅果類も特に多くはなかったが，完形のヒョウタンが出土した。

第6図　F-16出土鳥形木製品

また，F－16では堅果類と共に鳥形木製品が出土したほか，F－16からD－14にかけてこれに

類似した木製品や，大型容器・椀・きぬた状木器・板状加工木・有孔加工木・杭状加工木・割材等が出土した。下層河川跡は，県内で初めての縄文時代低湿地遺跡の発掘であったが，F－16付近で大量の堅果類と共に，土器・編み物・石皿・磨石などの植物性食糧とその選別・保存・調理用具がまとまって出土し，しかも鳥形木製品や土偶などの祭祀品が伴出したことが注目される。



第７図　Ｖ区編み物出土平面図

４．遺物について

61年度の調査では，縄文時代から江戸時代に及ぶ多様な遺物が出土している。この中でも特に注目されるのは，E－14からF－16にかけてSR8601の下層で検出された下層河川跡の粘質土（以下暗茶灰色粘質土と総称する）中から出土した縄文土器・石器・編み物・鳥形木製品及び堅果類を含む植物質遺体である。これは，現在整理中のため，ここではF－16南拡張区とその周辺から出土した縄文土器の一部を紹介する。

第８図のうち，１・２・４・５は暗茶灰色粘質土から出土し，３は青灰色砂礫（暗茶灰色粘質土の下層）から出土した。

１は，B群土器の浅鉢である。口唇部にＲＬの縄文帯をもち，頸部下方から底部にかけてもＲＬの縄文をもつ。

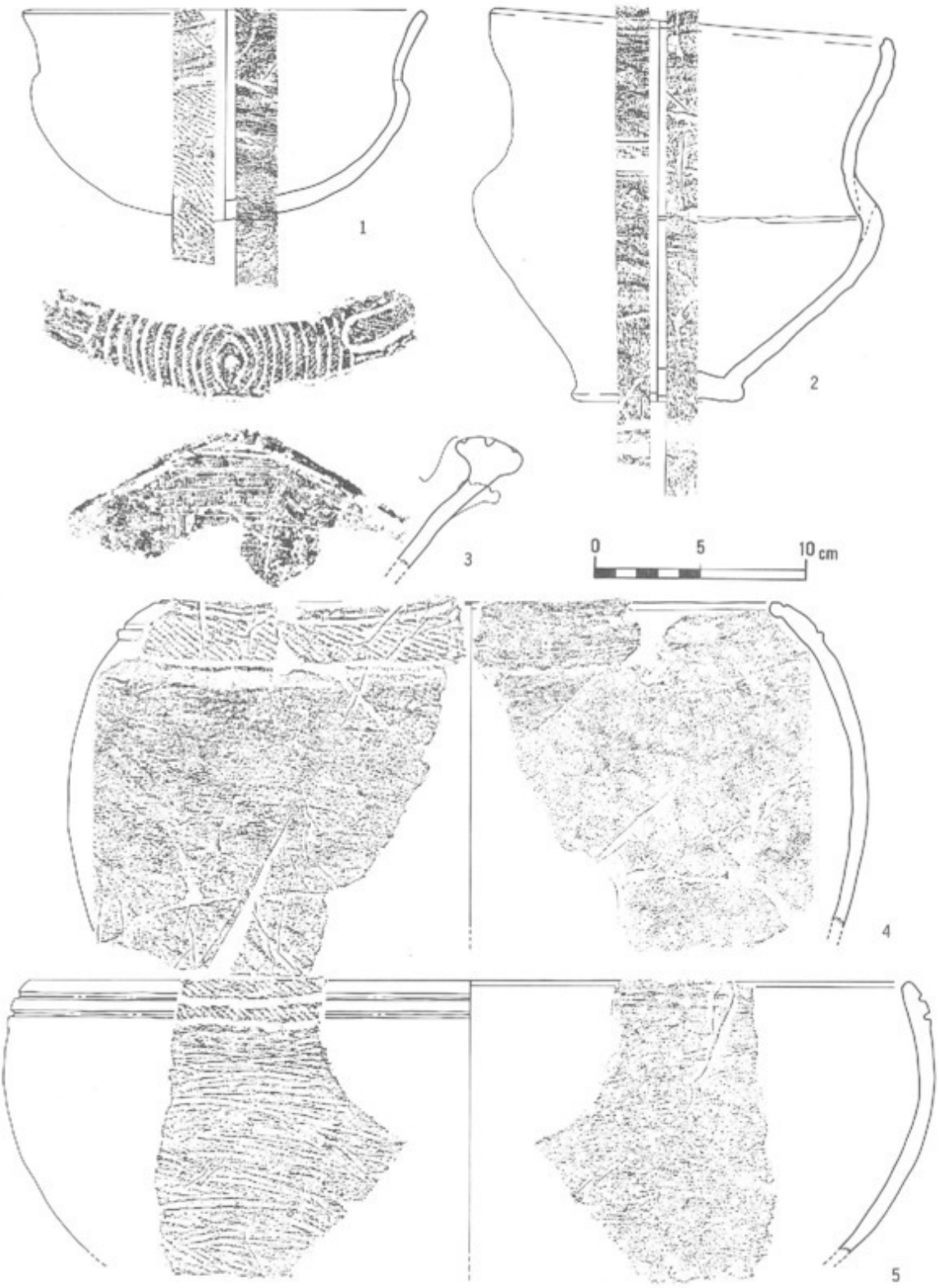
２はC群土器である。口縁から底部にかけて貝殻条痕をもつ粗製の深鉢である。

３は南壁拡張区周辺の青灰色砂礫から出土した深鉢の口頸部で，肥厚した口縁が波状をなし，上面に同心円及び平行の沈線で区画されたＲＬの縄文をもつ。さらに頸部外面には格子目状の細い沈線文を施す。

４はD群土器の一部で，内湾した口縁部外面に，ＲＬの縄文帯を充填した２条の沈線をもつ浅鉢である。

５はB群土器の浅鉢で，口縁部にＲＬの縄文帯を押捺し，その上から沈線で区画した文様をもつ土器である。

以上のように，これらの縄文時代後期の土器群を，中部瀬戸内地方における編年案に対応させると後期中葉の津雲A式・彦崎ＫⅠ式の特徴に類似していることから，D－14からF－16にかけて検出された下層河川跡の暗茶灰色粘質土及びその上下層から出土した土器群は，上記土器型式の併行期と考えられる。



第8図　F-16南拡張区出土土器

中　村　遺　跡

所在地　善通寺市中村町筆岡　　調査期間　昭和59年７月３日～９月17日

中村遺跡では，遺構面２面，三時期の遺構が検出された。

弥生時代には，自然河川（幅約10m・深さ約1.5m）とこれに併存する溝状遺構（幅約0.8m・深さ約0.5m）が検出されている。埋土最上層に弥生土器（時期不明）を包含することから，埋没年代は弥生時代のある時期と推定される。

次に，平安時代前半（９～10世紀）に埋没した溝が二ヶ所で検出された。方向は，真北から西へ約30°振っており，溝間距離は約106mを計る。埋土は砂で形成されており，平安時代前半には廃棄されたものと推定される。また，埋土の中から銅印（私印「貞」）と銅製帯金具巡方が出土している。

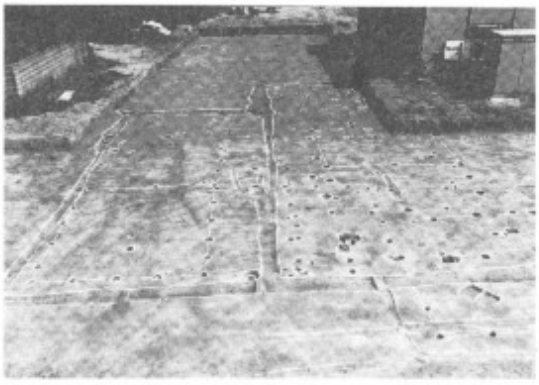
中村遺跡位置図

次に，室町時代後半に推定している掘立柱建物が数棟ある。また，溝と掘立柱建物・土坑も検出された。遺構配置図は，中村遺跡の中心部模式図である。

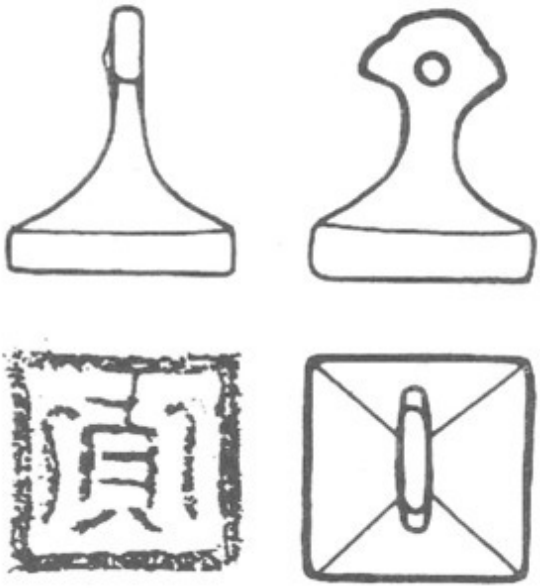
詳細は，報告書によられたい。

第１図　中心部遺構配置図

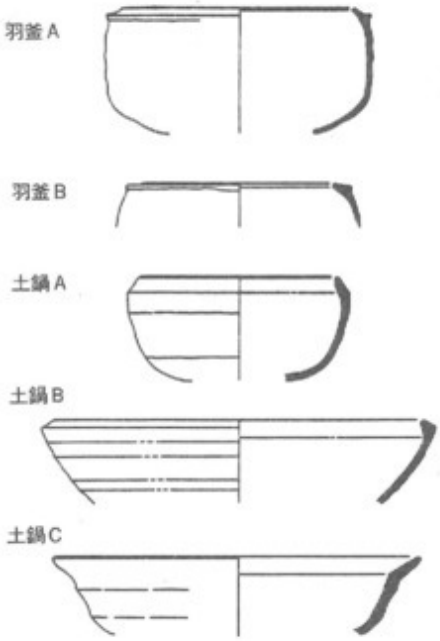
第２図　中央部建物群全景（東から）



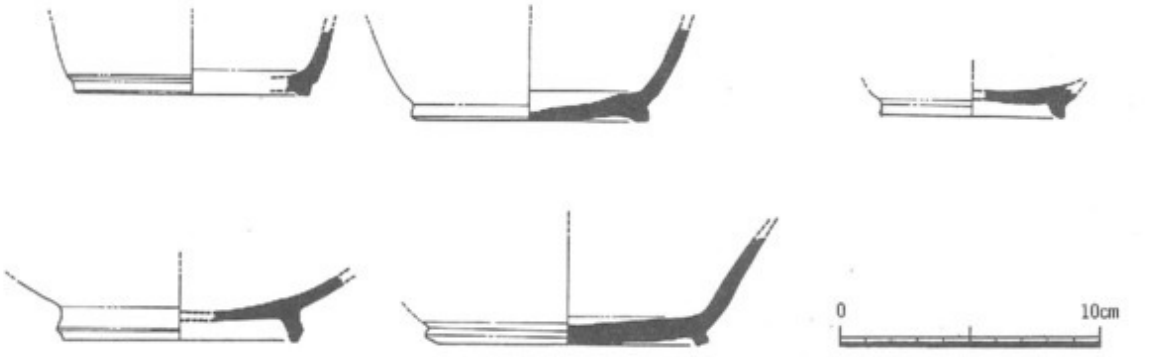
第３図　中央部建物群全景（西から）



第４図　銅印実測図



第５図　釜・鍋類の形態分類



第６図　平安溝出土遺物実測図

乾　遺　跡

所在地　善通寺市中村町　　調査期間　昭和60年９月２日～11月20日

１．立地

乾遺跡は，県道多度津・善通寺線の西約200m，善通寺市中村町乾に所在する。標高は15～16mを計り，東から西に向けてゆるやかな傾斜を示す沖積平野上にある。

乾遺跡位置図

２．調査の概要

検出した遺構は，弥生時代前期の自然河川（SX8501）と近世後半の時期が考えられる落ち込み状遺構（SX8502），同時期の自然河川（SX8503），明治時代以後の可能性が高い土坑群などがある。ここではSX8501とその出土遺物についてのみ記述する。

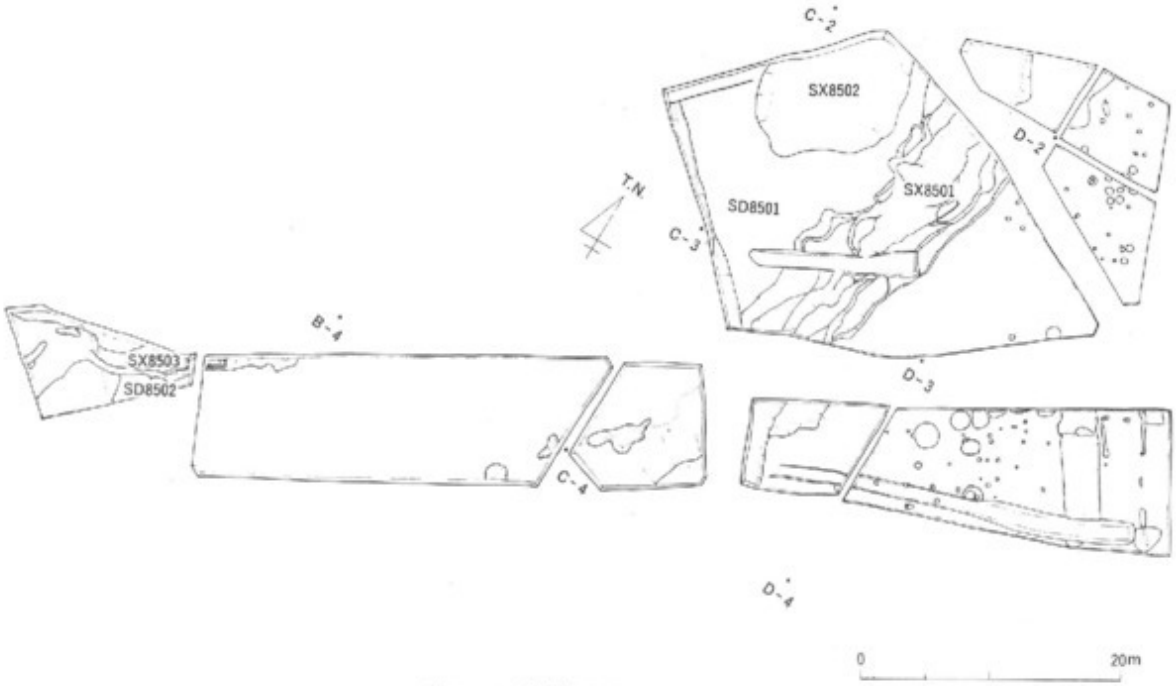
SX8501　調査区のほぼ中央付近（C列）で南北方向に流れを持つ自然河川である。幅約15m，深さ約1.2mを計り，断面形はゆるやかなV字形を呈する。

遺物　弥生時代前期の特色を持つ完形の壺，ミニチュア土器，木製鍬の半製品などが出土した。壺は器高25.6cm，口径13.2cm胴部最大径24.3cmを計る。頸部に幅広の削り出し突帯を有し，３条の沈線がある。口縁端部に１条，胴部上半部に４条のヘラ描きによる沈線を有する。木製鍬の半製品は３点出土した。刃先を地中につっこむ様に，３点まとまって出土した。この内１点は，縦31.3cm，横23.7cm，断面形の最大厚は4.6cmを計る。刃部から頭部に向けてゆるやかに隆起するが突起部は明瞭でない。突起部に掘られるべき柄孔も未だ作られていない。工具痕は，ある程度観察可能で，幅約３cmのノミ状の工具で面が成形されていることが解る。樹種はけやき類の可能性も考えられるが断定はできない。

３．まとめ

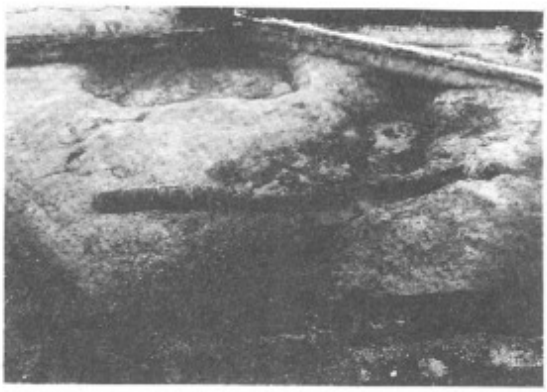
SX8501より出土した弥生時代前期の完形の壺，木製鍬の半製品は，調査区の南に広がる沖積平野に弥生時代前期の遺構が広がる可能性を高めたものと考える。また，少量であるが縄文時代晩期の土器が出土した。土層はSX8501が切り込まれた黄灰色粘質土層（遺構面ベース）の下層の青灰色粘土層である。この層より縄文時代晩期の土器が出土したことは，周辺の平野部の形成時期を考える上で，見逃すことのできない事実である。

詳細は，報告書によられたい。

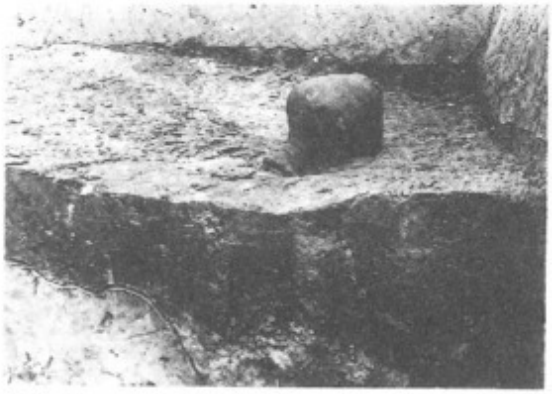


第1図　遺構配置図

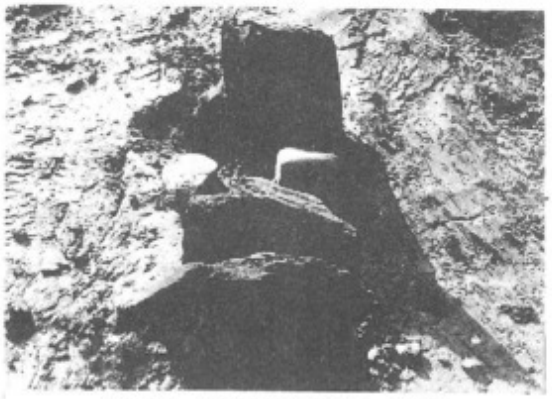
第2図　発掘前の風景



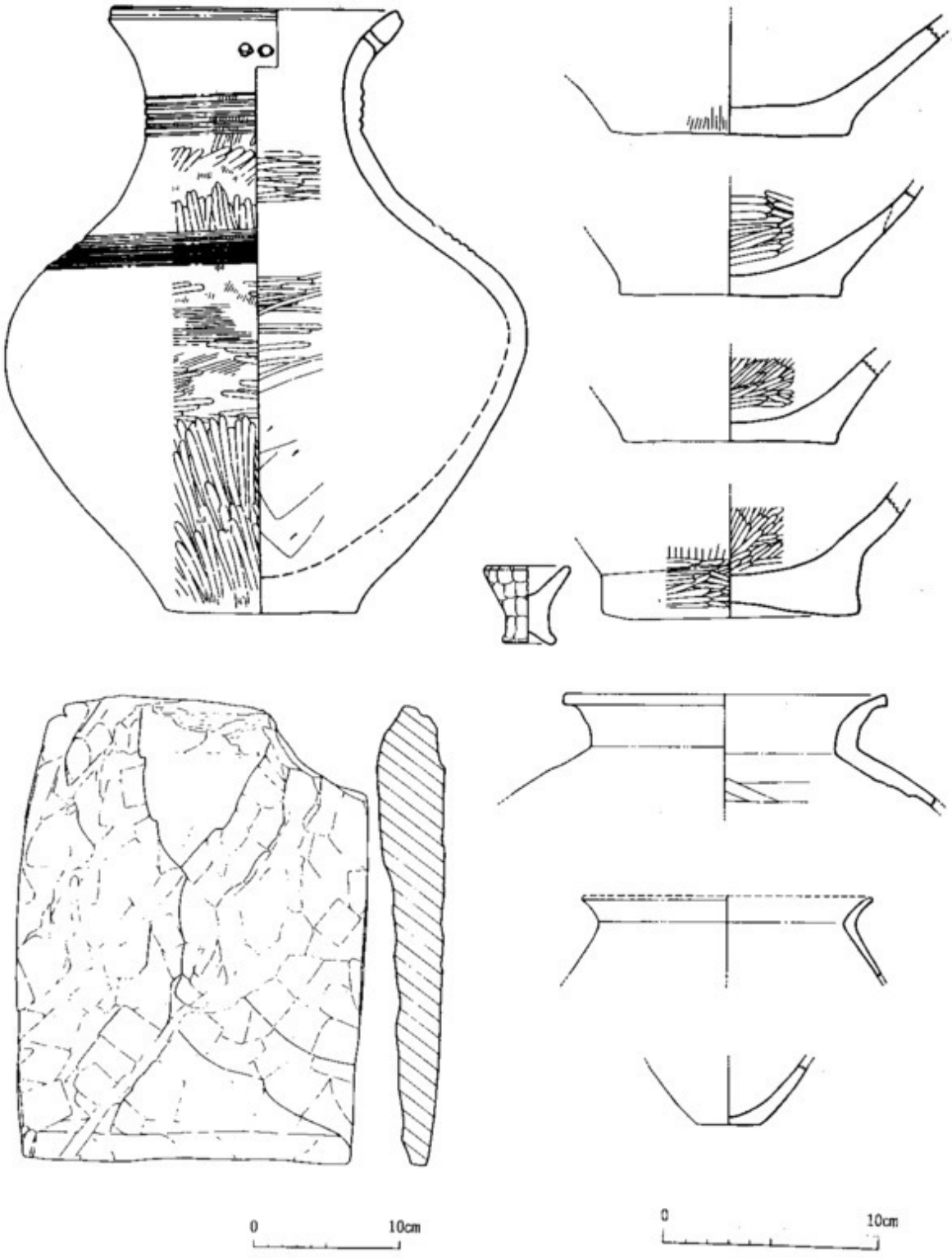
第3図　SX8501・SX8502全景（南より）



第4図　SX8501土器出土状態



第5図　SX8501木製鍬出土状態



第6図　SX8501出土遺物実測図

上 一 坊 遺 跡

所在地　善通寺市吉原町　　調査期間　昭和60年11月13日～61年１月24日

１．立地

上一坊遺跡は，国道11号線と県道西白方・善通寺線が交差する地点より南300m付近の丸亀平野西端部に位置しており，標高13～14mの沖積平野に立地している。

上一坊遺跡位置図

２．遺構

調査で確認された遺構として，多数のピット群の存在を挙げねばならない。検出したピット群のなかには柵列の穴のように非常に小さなものもあったが，その大半は直径20～30cmを呈し，そのうちの幾つかには，未だに柱の下部が残っているものも確認された。残存する柱は全て素掘りの柱穴に直に埋め込まれており，根石は伴っていなかった。但し，柱を固定する目的で柱の横に巨礫を埋め込んだと思われるものは，幾つかのピットで確認している。

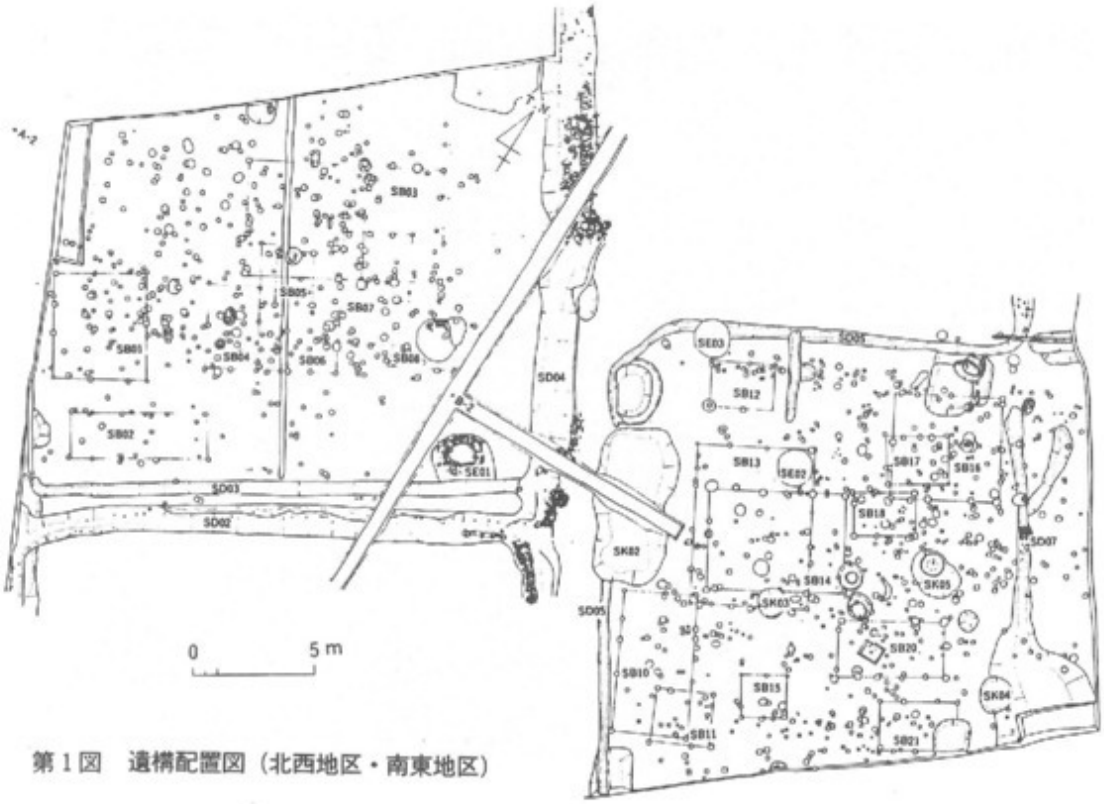
さらに，中世，近世の溝も同時に検出されたが，どちらの時期の溝もN—30°—Wの方向で北に向かって流れており，途中でN—60°—Eの方向にほぼ直角にその向きを変えて流れていた。近世の溝においては，この屈曲部分の溝側壁に石を組んでおり，水流による側壁の崩れを防止する目的ではなかったかと思われる。これら両時期の溝は，50cm～１mの感覚で走っており前述したピット群よりも，より正確には溝によって区画された土地の北西と南東に集中しているということができる。この溝の方向性は，丸亀平野西部に認められる条里地割とも一致している。

他の遺構としては，井戸及び土坑が検出された。井戸は３基確認されており，３基とも石組みの井側であり，中世の井戸のそれは上方がやや開く石組みを行っている。近世のものは，２基とも垂直に石を組み上げて井側としていた。

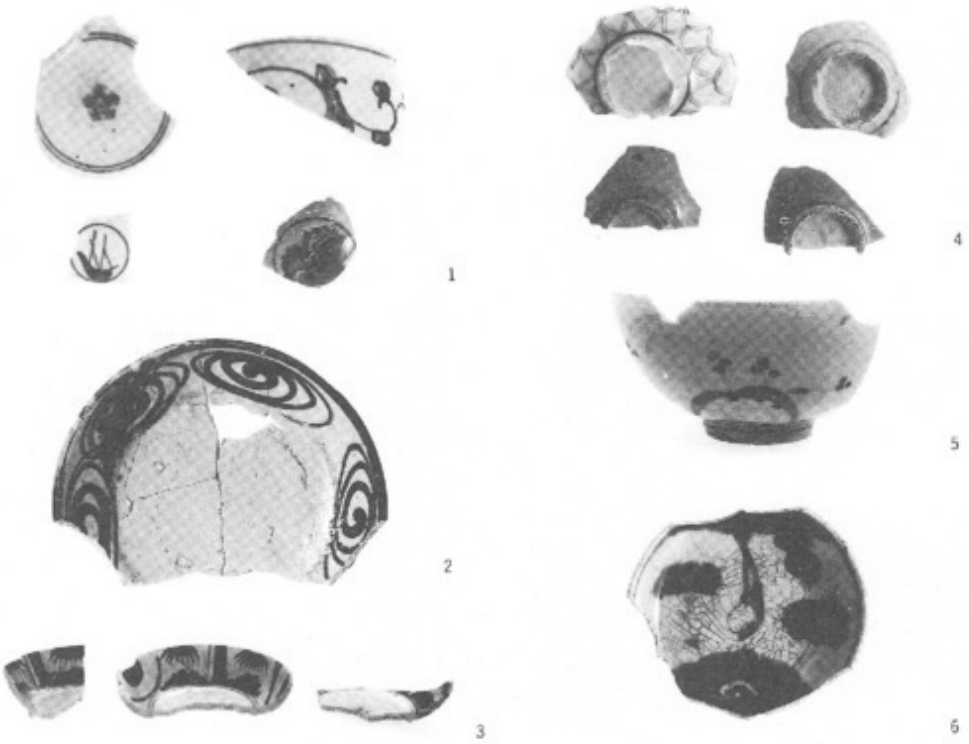
３．遺物

検出された多数のピット群のなかで，ヘラ切り小皿を出土したピットが，計６ヶ所存在する。さらにこれらの小皿の上に古銭（主として北宋銭）をのせた状態で検出したピットが２ヶ所，古銭のみ出土したピットが２ヶ所確認している。その位置もほぼ一定の間隔で検出されている。

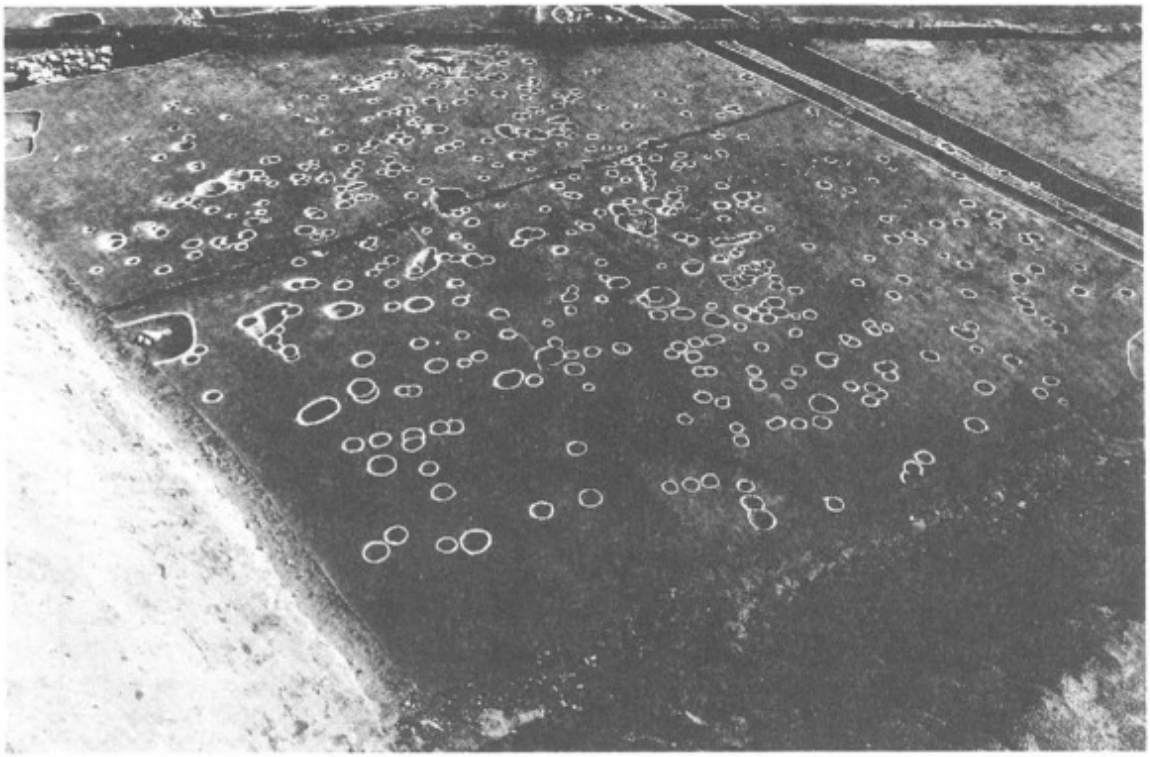
詳細は，報告書によられたい。



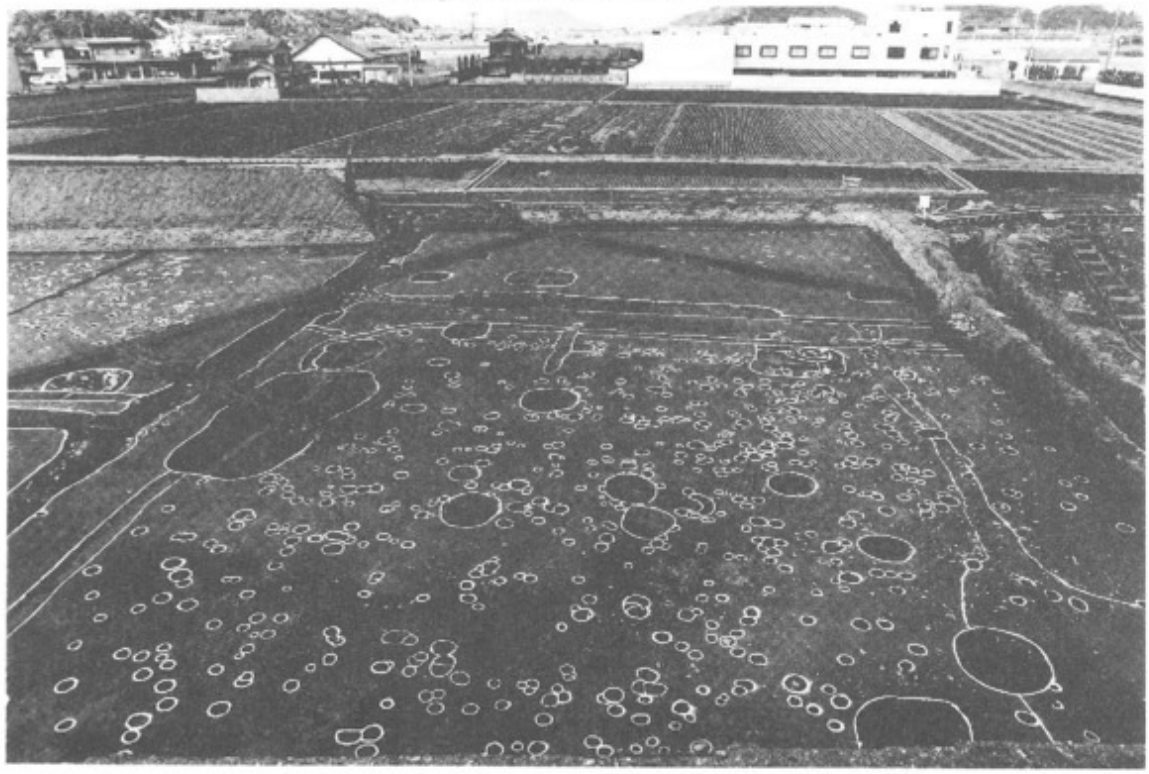
第1図　遺構配置図（北西地区・南東地区）



第2図　磁器



第3図　北西地区全景（西より）



第4図　東地区全景（南より）

矢ノ塚遺跡

所在地　善通寺市吉原町　　調査期間　昭和59年10月8日～60年8月30日

1．立地

矢ノ塚遺跡は丸亀・善通寺平野の西端，善通寺市吉原町矢ノ塚，碑殿町矢ノ塚に所在し天霧山の南東裾野に営まれている。その標高は19～28mを計り，西から東に向けて下る傾斜地形を呈している。市道十五丁・三井之江線をはさんで西へ約100m，東へ約200m，南北約60mが調査対象地域である。西側の地区は，南北の丘陵がせまった非常に限定された地形であり，東側の地区は天霧山からの谷筋と南の二反地川の間の狭い台地上に立地する。

矢ノ塚遺跡位置図

2．調査の概要

検出した遺構は，建物遺構・溝状遺構・土坑・井戸などであるが，これらは地表下約20～80cmで認められる。各遺構の時期は大別して弥生時代中期，奈良時代，中世の3時期になる。奈良時代の遺構は方形の柱穴を持つ建物17棟（うち1棟は総柱状をなす）・溝状遺構数本などである。中世の遺構は掘立柱建物17棟，溝状遺構，井戸などがある。建物，溝状遺構の主軸方位はほとんどがN30°Wを表す。

遺物は，コンテナ数で約400杯になる。ほとんどが弥生時代中期の遺構，包含層に伴なうものである。土器の種類は，壺・甕・高杯などの他にミニチュア土器・分銅形土製品・銅剣形土製品など多種におよぶ。弥生時代中期以外の土器としては，須恵器・土師器・瓦器・黒色土器・磁器があるが量は少ない。石器は石鏃・石斧・石庖丁・石槍などが出土している。

銅剣形土製品は，写真で見るとおり真ん中で折れているもののほぼ完形に復原できる。長さ約13.5cm，幅約3cm，厚さ約3cmである。鋒，樋，茎などを表現し，関を表わしていると考えられる所には2つの孔が作られている。調査区の南に近接する我拝師山で出土した平形銅剣を模したものではなく，細形銅剣か中細形銅剣を模したものと考えられる。細形銅剣の土製品であるとしたら，周辺地域に出土例がないだけに非常に興味深い資料となろう。

3．まとめ

○　弥生時代中期の方形の掘り方の柱穴を持つ建物を12棟検出した。

○　E列の線（SD85036の流れる方向）で弥生時代中期の遺構は消滅する。

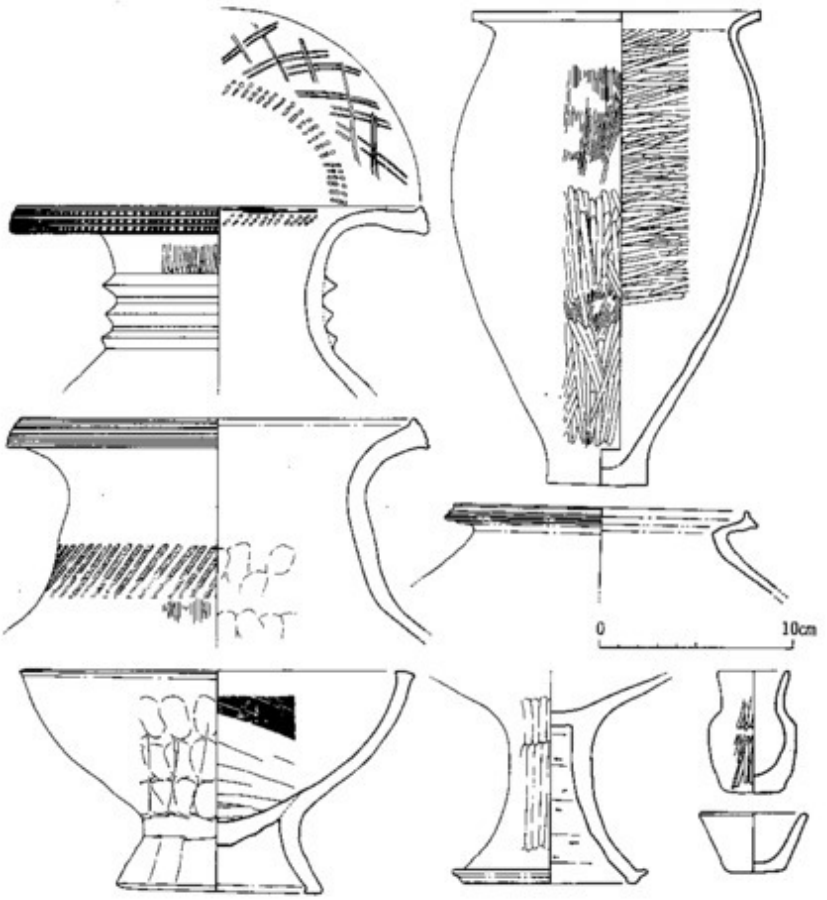
○　鳥形土製品，銅剣形土製品，分銅形土製品，ミニチュア土器などの祭祀遺物が多く出土した。

○　金蔵寺下所遺跡，稲木遺跡B地区で確認された方形の掘り方の柱穴を持つ奈良時代の建物群とほぼ同時期になる可能性の強い建物を17棟検出した。

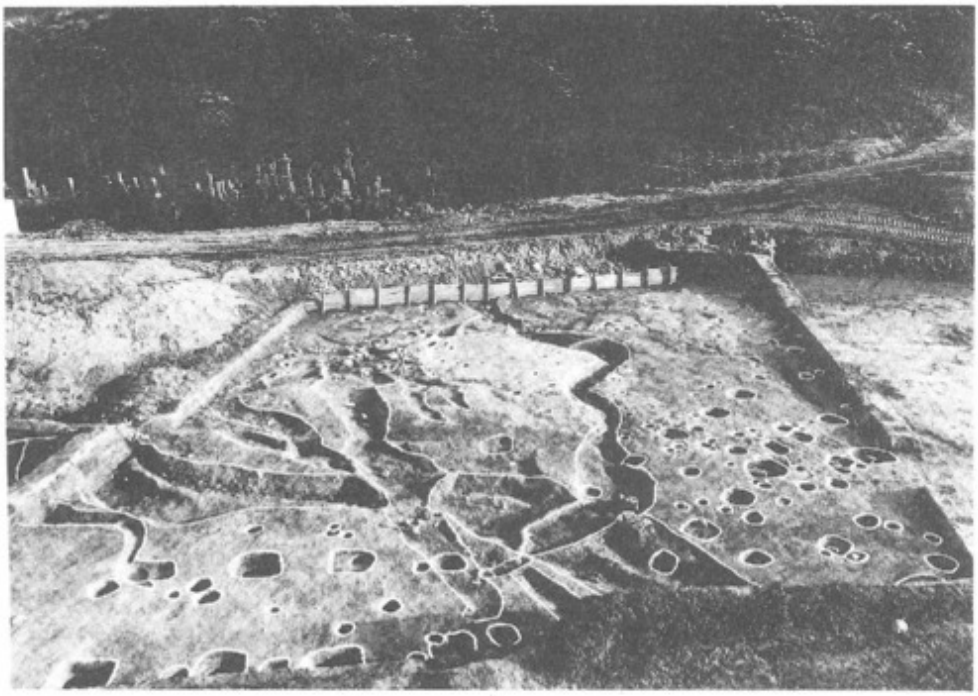
○　中世の建物，溝状遺構，土坑などの主軸方位はほとんどがN30°Wとなる。

以上が調査区での成果である。また，B列の調査区北辺に隣接する場所で善通寺市が約300㎡の調査を実施した。弥生時代中期の竪穴式住居1棟，方形の掘り方を持つ弥生時代中期の建物（1×1間，柱穴の大きさは約120cm×120cm）1棟などを検出した。このことから弥生時代中期の遺構が天霧山の山裾に向かって広がる可能性を強くした。

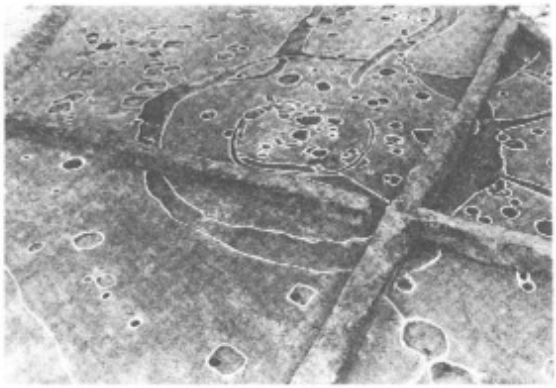
詳細は，報告書によられたい。



第1図　SD85101・SD85102出土土器実測図



第2図　SD85101・SD85102



第3図　竪穴住居

第4図　掘立柱建物遺構（弥生時代）

第5図　ミニチュア土器・鳥形土製品

第6図　銅剣形土製品

西碑殿遺跡

所在地　善通寺市碑殿町三反畑　　調査期間　昭和60年2月4日～4月30日　61年7月28日～8月11日

1．はじめに

西碑殿遺跡は，善通寺市の西端にあたる天霧山南麓の谷あいに位置し，そこに形成された扇状地の上に立地する。標高は34～39mを計る。また，扇状地の西方には丘陵が伸び，標高50m附近には東向きにテラスが広がる。

本調査は昭和60年2月4日から昭和60年4月30日と7月28日～8月8日にかけて実施された。調査対象面積は5,200m²であった。

また，61年10月13日に墓地移転にともない経塚が発見された。10月14日～10月17日にかけて調査を実施した。

西碑殿遺跡位置図

2．遺構について

検出した遺構は掘立柱建物，溝状遺構，ピット，土坑である。

掘立柱建物は1×2間のもの，2×2間のもの，3×3間のもの，調査区外に柱穴をもつために規模不明のものである。柱穴の掘り方の形状は方形あるいは方形に近いものが多い。柱穴から出土する遺物は小量で破片が多いために建物遺構の明確な時期については言及できない。しかし，いずれの建物遺構からも須恵器（7世紀半ば以降）が出土し，中世遺物が出土しない。従って建物遺構は，7世紀半ばから11世紀頃という大まかな時期を与えることができる。また建物遺構の主軸方位は，それぞれ違っており統一性は認められない。各ピットについての遺物の詳細な検討はしていないが，ピットの形状の違いは時期差を反映するものとは言えない。ピットに関しては円形のものと，方形もしくは方形に近いものに2分される。方形を呈するピットからは，7世紀末から8世紀前半の須恵器と9世紀後半から10世紀前半の須恵器も出土する。

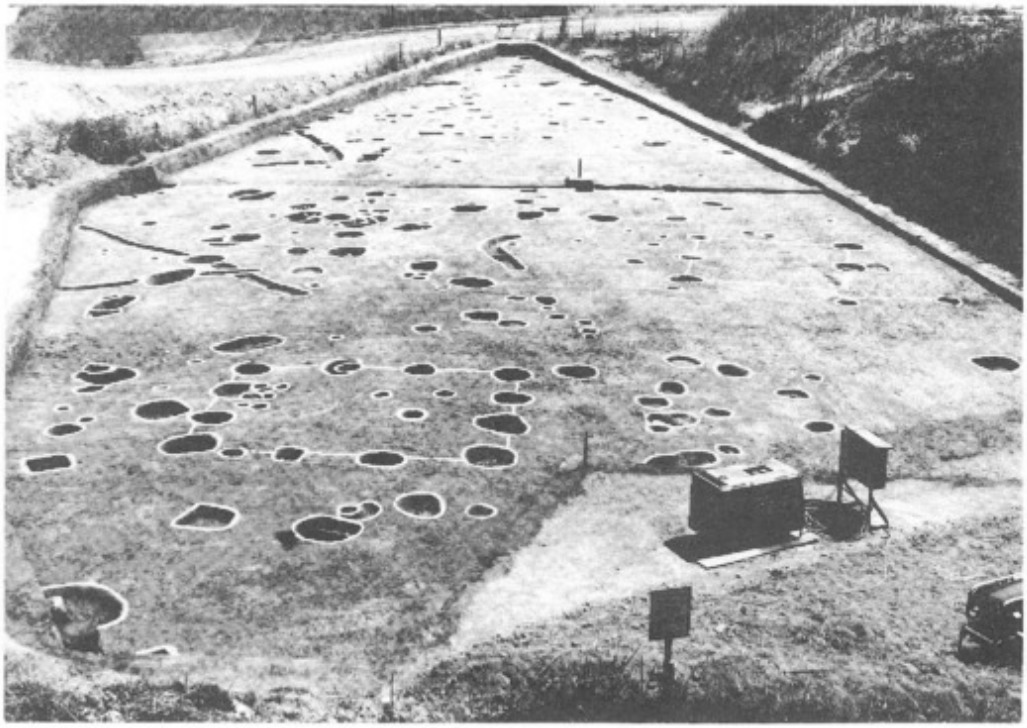
3．遺物について

出土した遺物は，弥生土器・土師器・須恵器・中世土器・石器などである。石器は石鏃・スクレイパーなどが少量出土している。

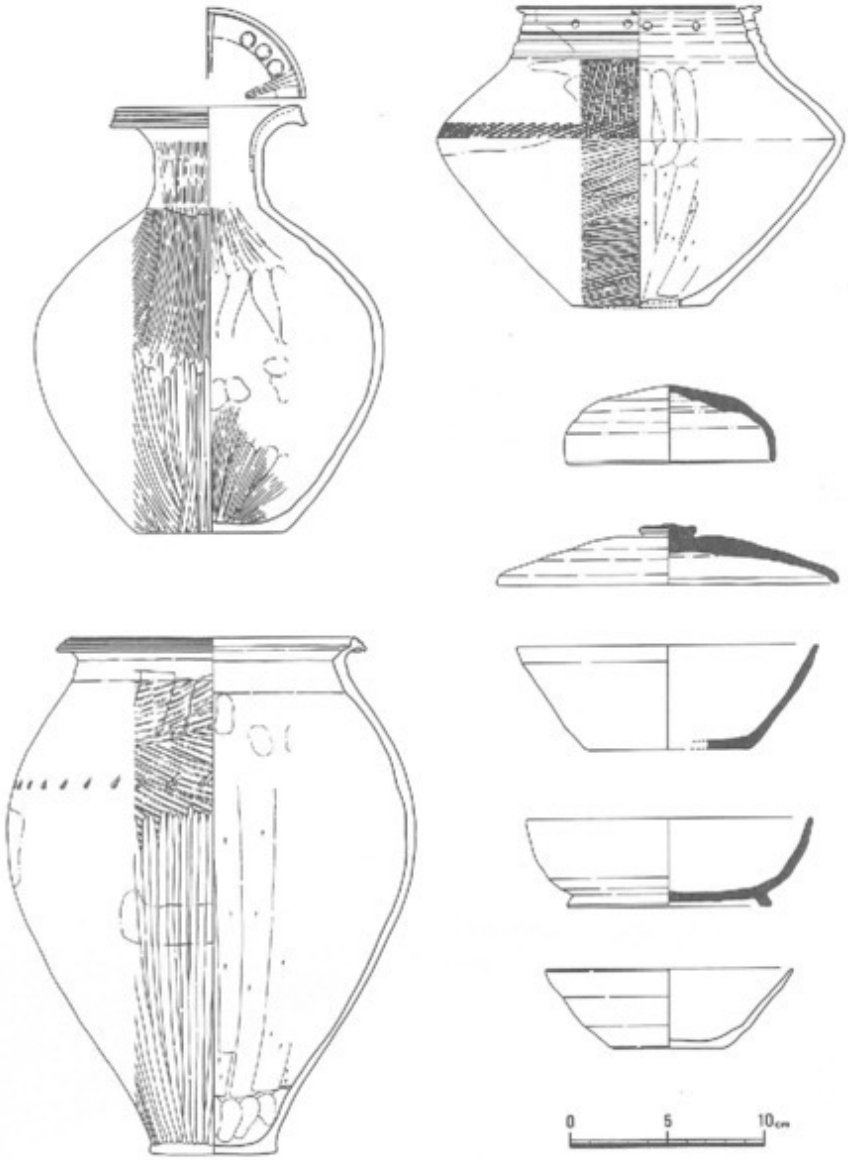
4．まとめ

検出した掘立柱建物は，隣接する矢の塚遺跡同様弥生時代中期後半，7世紀末～8世紀前半，9世紀後半～10世紀前半，中世の4時期のものに分かれるが，埋土の違い，柱穴掘り方の形状の違いでは区分することができなかった。現在出土遺物の整理途中であり，詳細は今後の検討を待ちたい。

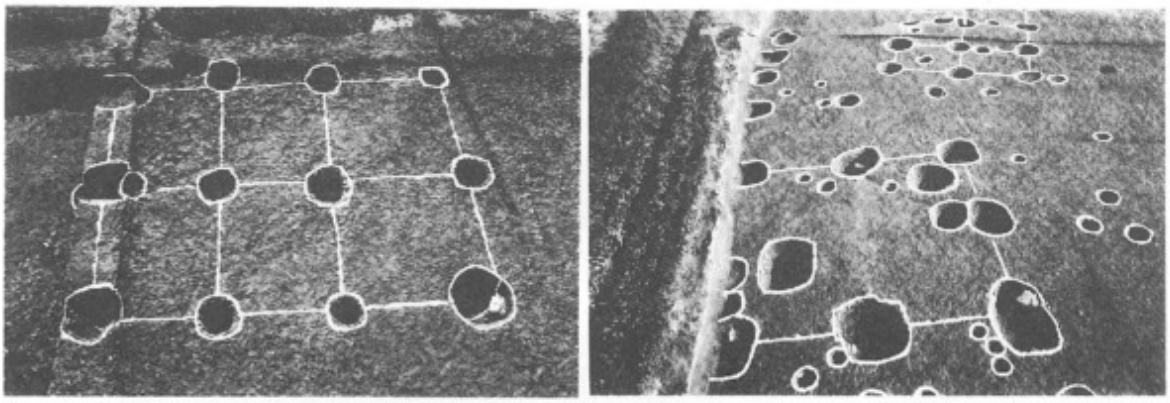
第1図　遺構平面図



第2図　東側区全景（北より）



第3図　遺物実測図



第4図　掘立柱建物

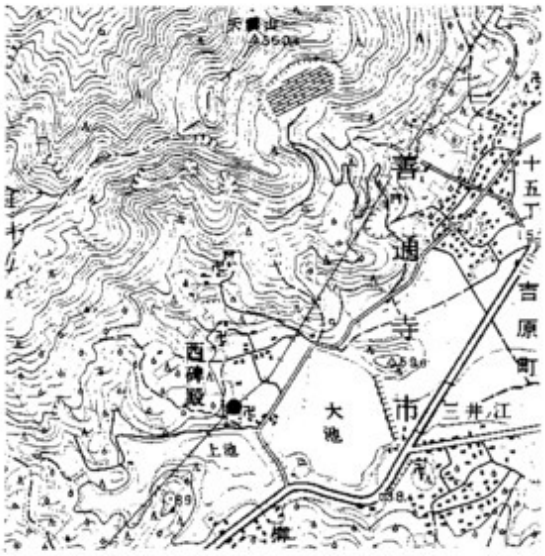
碑殿経塚

所在地　善通寺市碑殿町字三反畑730－1　　調査期間　昭和61年10月14日～10月17日

1．調査の概要

碑殿経塚は善通寺市碑殿町字三反畑730－1に所在し，標高約50mの山腹に営まれた墓地の北縁に立地する。

調査は昭和61年10月14日～17日の4日間実施した。当初，調査は経塚を目的として実施されたが，経塚にはもと石碑があり，しかも東西に墓碑が立ち並んでいたことがわかり，所有者である子孫の方の御配慮により，移転先の石碑や文献の調査もあわせて実施した。



碑殿経塚位置図

2．遺構

経塚・近世墓とも石碑はすでに除去されており，経塚の土師質容器が露出していた。

経塚は一字一石経と呼ばれるもので，土師質容器がほぼこの直径にみあう大きさの土坑に据えられていた。調査時にはほとんどの経石が外にかき出されており，土師質蓋も小片となって散乱していたが，もとは土師質容器に経石を入れ，蓋をした上に石碑が立てられていた。この経塚は，東西に埋葬された両親の追善のために，子の菅納市衛門俊信が建立したものである。経塚の東の墓は，墓碑によれば，元禄2（1689）年に没した父親の菅納彦兵衛為信（随心院了誉）の墓で，経石容器の約50cm東に掘りかえされた墓坑の一部を検出した。また，経塚の約0.5m西にある墓は，墓碑から，菅納彦兵衛為信の妻観月院妙教の墓であり，約0.5mの範囲に遺骨片をおいた上から完形の京焼風陶器の碗が出土した。

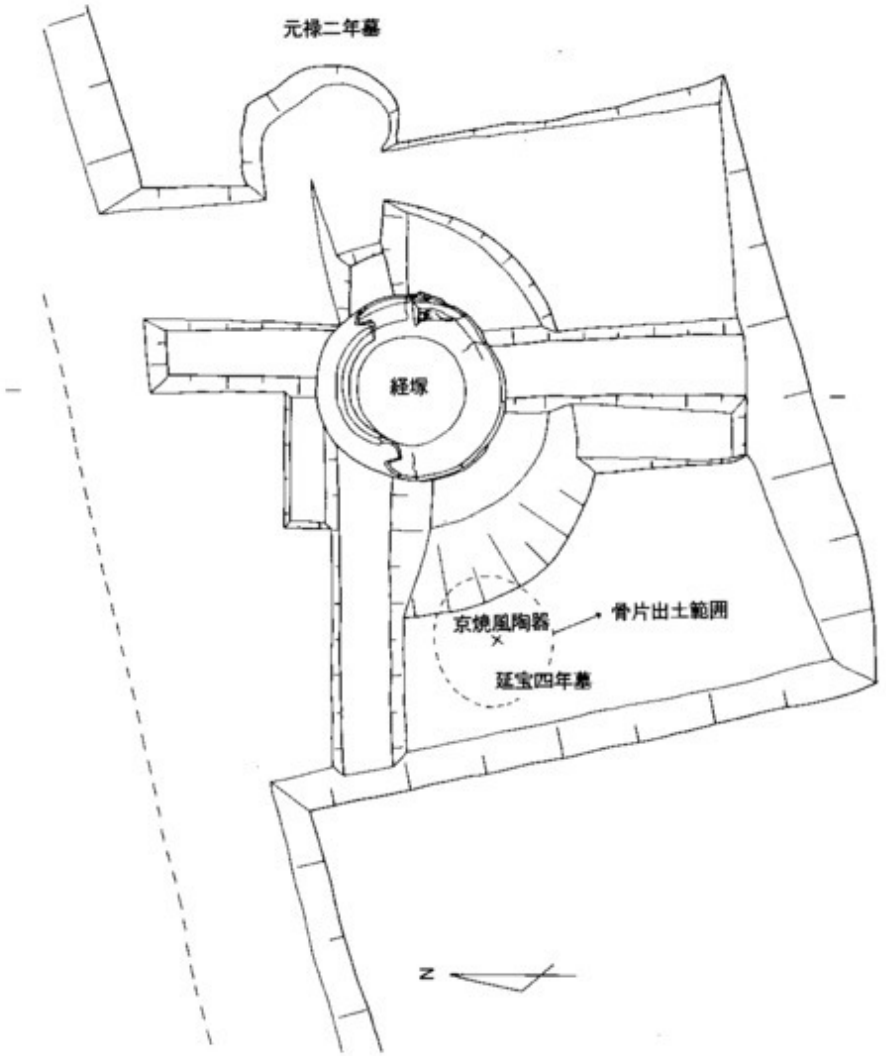
3．出土遺物

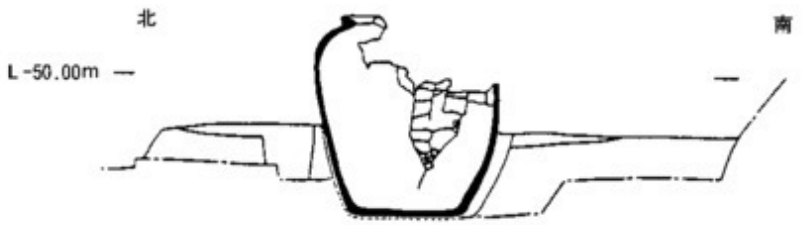
一字一石経　礫のほとんどは2～5cm大の平たい河原石で，これらの礫のうち，約10分の1程度には片面に一字が墨で書かれており，略・我・五・志・越・種・養・雖・羅・事・世・主・向・白などの文字が確認できる。法華経の経文の一部と思われる。

経石容器　蓋付の土師質甕であり，本来一字一石経の容器として作られたものであろう。

京焼風陶器は口径9.8cm，高さ5.9cmの碗で，高台部及び高台内側を除いて施釉されている。釉は淡灰緑色味をわずかに含む透明釉で，胎土の色を反映して濁った淡黄褐色をしている。内外面ともカン入が著しい。外面には濁った淡青灰色の呉須でやや崩れた山水を描くほか，その側面にも横線とその左端上に点を描いている。胎土は灰白色ぎみの淡灰褐色で，精良である。焼成も良

い。高台内側の外底面には「清水」の刻印が認められる。





0 1m

第1図　経塚平・断面図

道　免　窯　跡

所在地　三豊郡三野町大見道免丸尾　　調査期間　昭和59年９月11日～10月23日

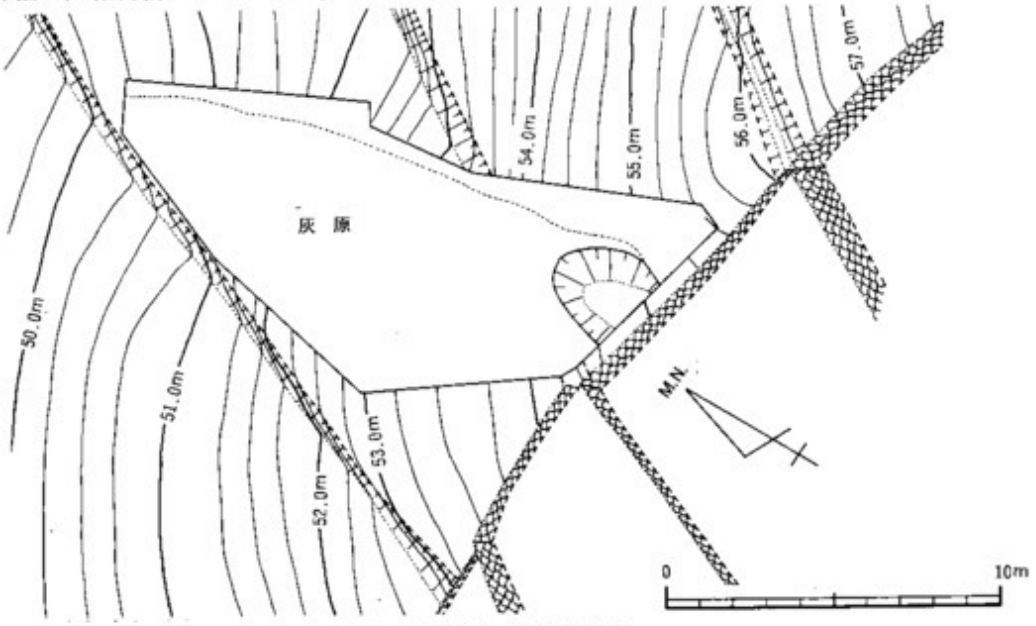
三野町の火上山西裾から南西裾にかけては，総数６基の窯跡が存在し三野古窯跡群として周知されている。県教委はその地域近辺に計画されている横断道建設路線上の遺跡の有無等を重機（ユンボ）を用い調査した。その結果，火上山西裾の北向き斜面で窯跡灰原跡を検出し，須恵器片をコンテナ10箱採取した。そこで10月９日～10月23日（実働９日間）で発掘調査を実施した。

道免窯跡位置図

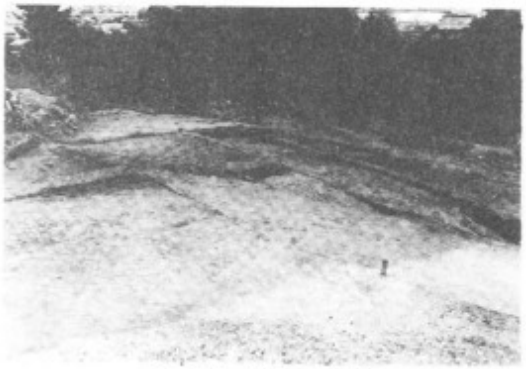
発掘調査は，南北に１本，東西に３本の畦畔を残し，土層を確認しながら掘り進めた。しかし，土層はかなり攪乱されており当地がかつて果樹園造園のため開墾されたことを示唆していた。そのため本来の灰原の範囲，堆積状況等は把握できなかった。発掘区南端で検出した土坑もその南部が未買収地区のため全容は明らかにできなかった。埋土は褐黒色粘質土で深さ40cmを計測した。なお窯体は未買収地に存在すると思われる。

窯の操業時期は出土遺物から７世紀前半頃と考えたい。

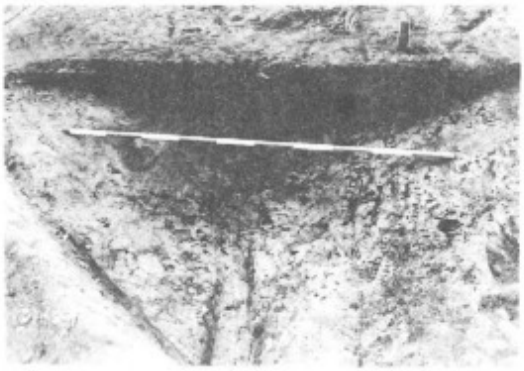
詳細は，報告書によられたい。



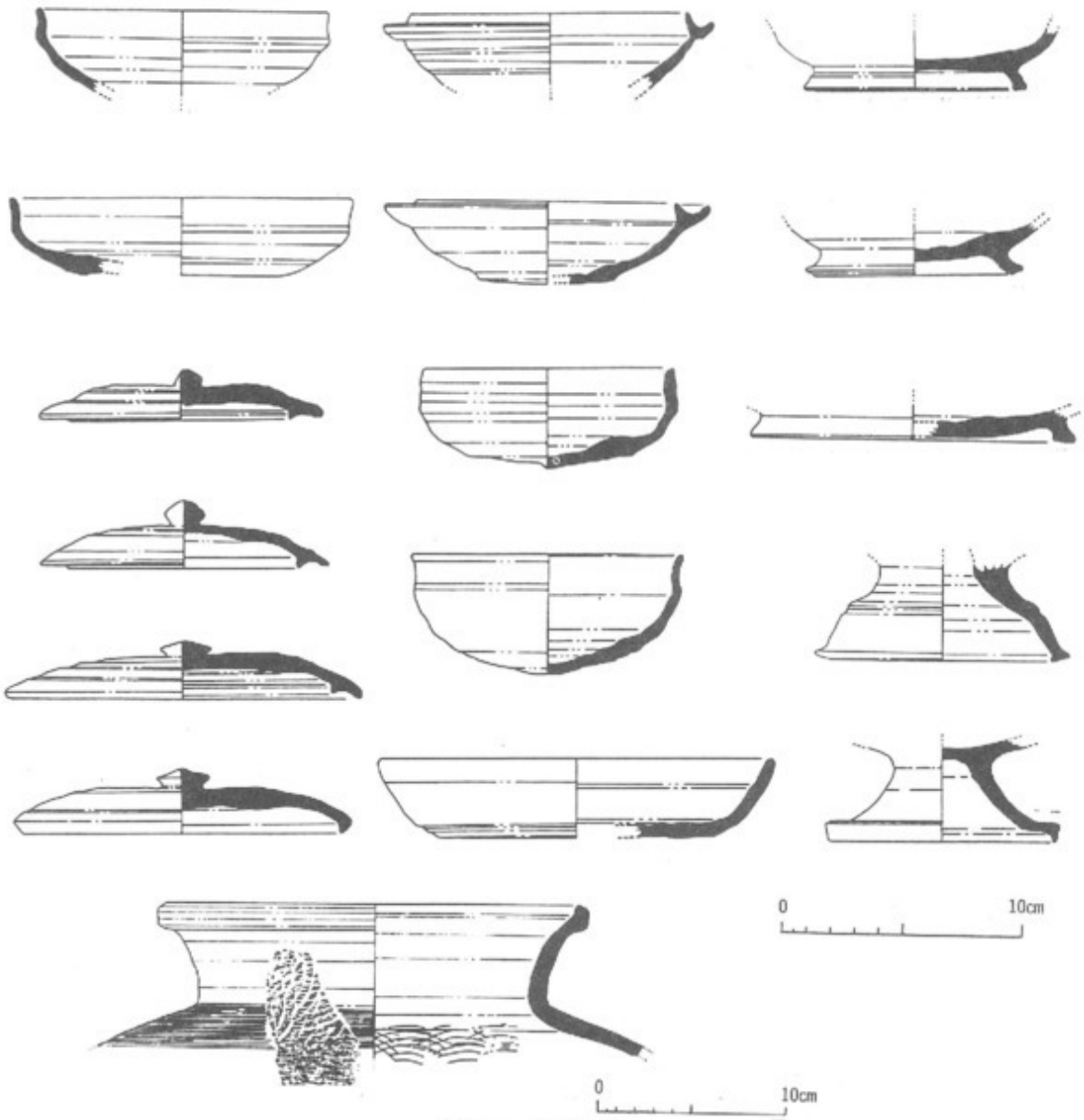
第１図　地形測量・遺構配置図



第２図　遺物の広がり



第３図　土坑



第４図　遺物実測図

利 生 寺 遺 跡

所在地　三豊郡高瀬町上勝間砂古　　調査期間　昭和60年5月22日～7月18日

1．立地と環境

遺跡は，鬼ヶ臼山の裾部で西方に開口する谷地に立地する。その谷の底部で，もっとも広くなっている部分がI区である。標高約36m，水に洗われた荒い花崗土を基盤とする。

この付近には，「利生寺」という小地名が残されている。谷の最奥部では，骨蔵器が発見されている。

谷の北側斜面部に，わずかにあるテラス状の平坦地がII区である。標高約39m，褐色粘質土（花崗土）を基盤とする。

この付近には，最近まで，石製五輪塔が散在していた。

利生寺遺跡位置図

2．遺構

I区は，用地買収前，そこに生えていた竹などを重機で除去し，さらにそれを同所に埋める，という工事が行われた。その結果，調査区全域にわたって，径2～5m，深さ2～4mの攪乱坑が掘られたために，遺構の残存状態は極めて悪い。

I区からの検出遺構

弥生時代の竪穴遺構　1　　江戸時代の掘立柱建物跡　1　　井戸　1　　土坑　8

当初，予想されていた中世寺院跡があるとすれば，ここよりも，もっと奥部にあると思われる。そこには，現在，郭状の平坦地がある。

III区からの検出遺構

弥生時代の土坑　2　　室町時代の竪穴住居跡　1　　円形・方形のピット　多数

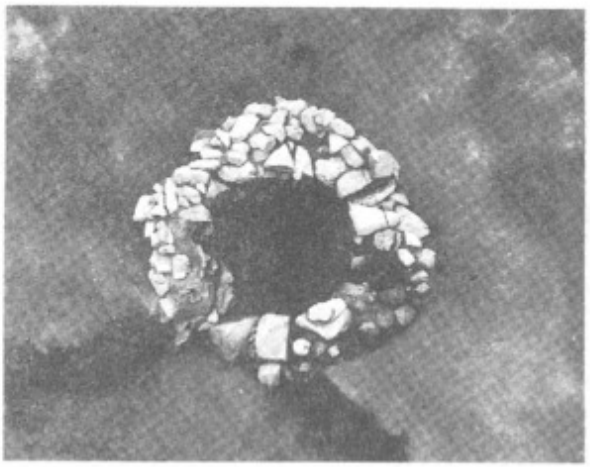
竪穴住居跡は，3×2.7mの規模で，竪穴内には円形の土坑が掘られていた。

3．遺物

I区の竪穴遺構からは，弥生土器の小片が，井戸・土坑からは，江戸時代と考えられる染付椀等が出土した。包含層からは，中世の土器や銅銭（「永楽通宝」等）が出土している。これは，当区よりも高所からの流れ込みと思われる。

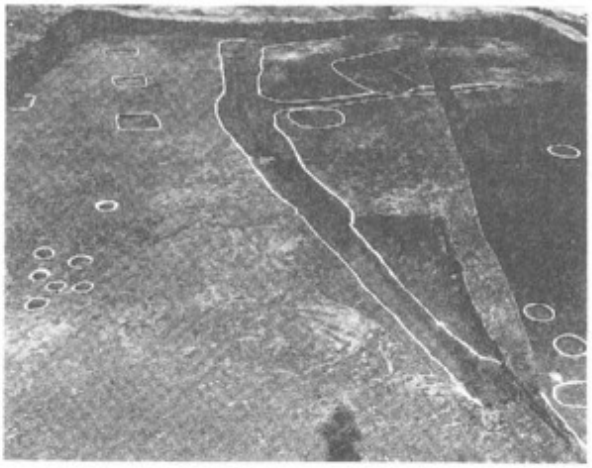
II区の土坑からは，弥生時代後期の弥生土器が出土した。竪穴住居跡の床面から土鍋が出土した。

詳細は，報告書によられたい。

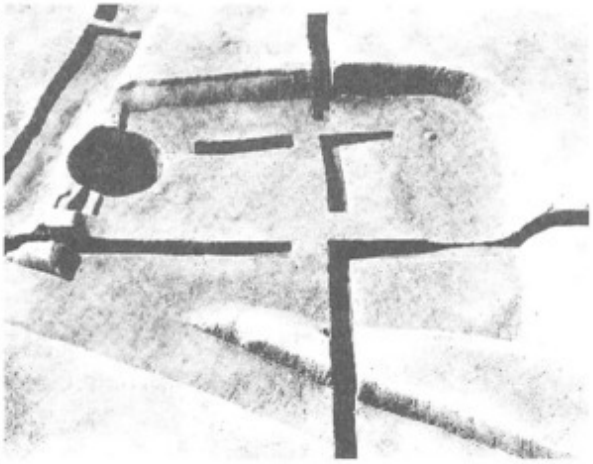


第1図　井戸

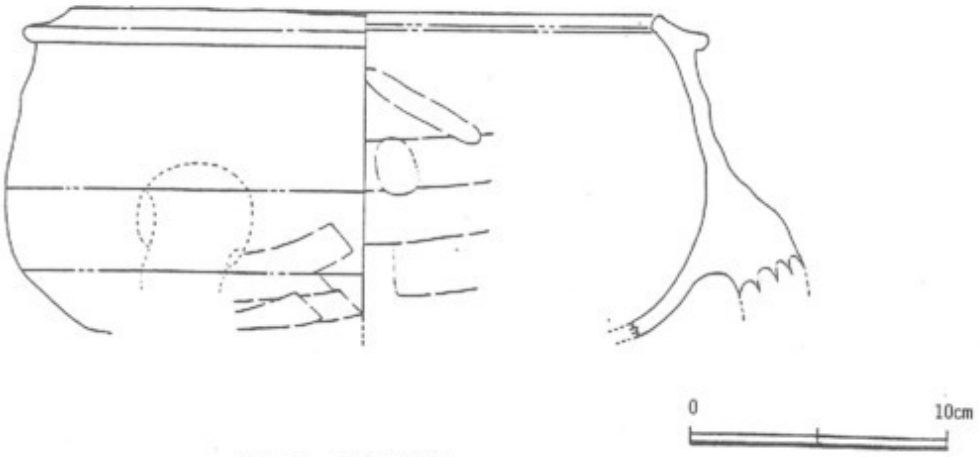
第2図　井戸の発掘



第3図　利生寺遺跡II区



第4図　竪穴住居跡



第5図　土鍋実測図

大　門　遺　跡

所在地　三豊郡高瀬町上勝間砂古　　調査期間　昭和60年7月22日～61年1月28日

1．立地と環境

鬼ヶ臼山から派生する一尾根が終って，高瀬川に至る間の巾約70mの狭小な平地に立地する。北は山で，南は西流する川で，東は幾条もの尾根で遮られている。一方，西には，瀬戸内海まで続く平地の広がりが見渡される。標高19m前後，北東から南西へ緩やかに傾斜する。淡褐色粘質土を基盤とする。

大門遺跡位置図

2．遺構

古墳時代後期の遺構

竪穴住居跡　15　　掘立柱建物跡　1

土坑　7　　溝状遺構　多数

15棟の竪穴住居跡のうち8棟は，カマドと煙道をもっている。土坑のなかには，床面が平坦で，土坑内に1及至4のピットをもつものがある。これは，作業小屋などとしての用途が推測される。溝状遺構は，それ単独で機能しているものと，竪穴住居に付属すると思われるものがある。前者のなかには，集落内を真直に貫通しているものもある。後者は，竪穴住居からの排水の機能などが考えられる。

室町時代の遺構

掘立柱建物跡　3　　礎石建物跡　1　　土坑　多数　　井戸　1　　溝状遺構　多数

礎石建物跡は，西方が調査区外にあたるため全体の規模は不明であるが，2×2間以上で，総柱のものである。土坑からは，鞴の羽口や焼土を出土するものがある。井戸は，石組井戸で，石組下には桶側を利用した井筒をもつ。溝状遺構のうち石組溝が1本ある。また溝内に堰状の石組遺構をもつものもある。

3．遺物

古墳時代後期の遺物　溝状遺構と竪穴住居跡から主に出土している。

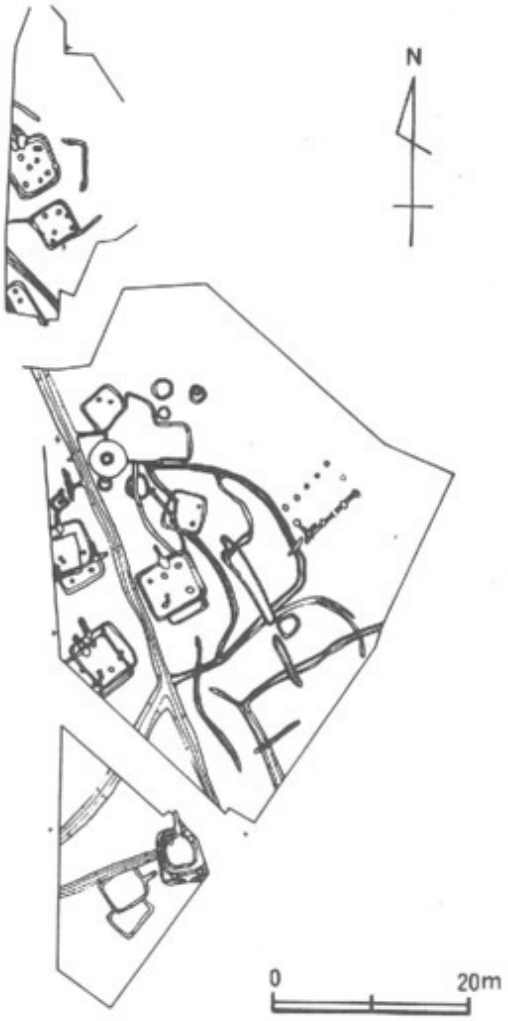
須恵器　土師器　鉄滓　獣骨

鞴の羽口と鉄滓は，特定の竪穴住居跡から出土した。

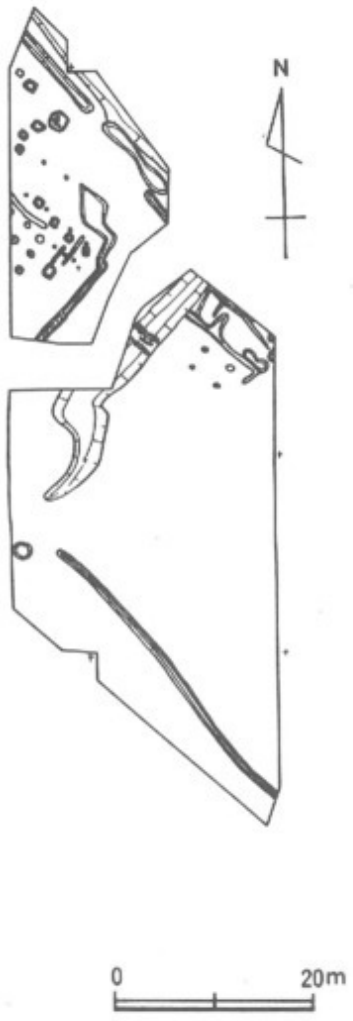
室町時代の遺物　各遺構と包含層から多量に出土した。

土師質土器　瓦質土器　備前焼　青磁　鉄製の鋤先　銅銭

詳細は，報告書によられたい。

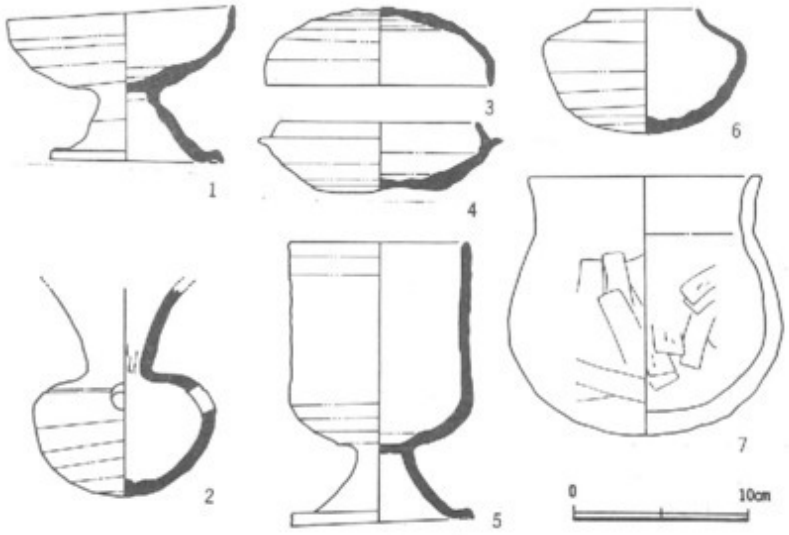


第1図　古墳時代の遺構配置図

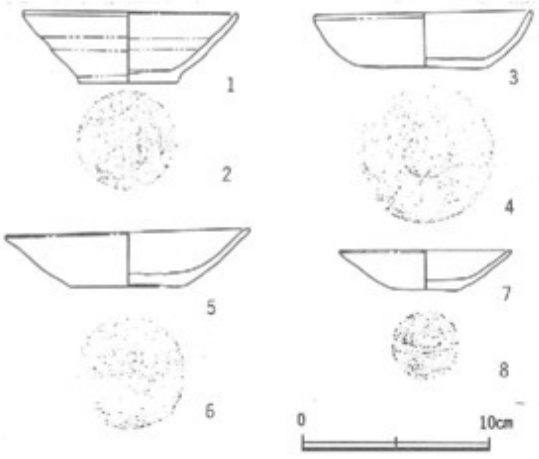


第2図　室町時代の遺構配置図

第3図　ヘリコプターによる航空測量



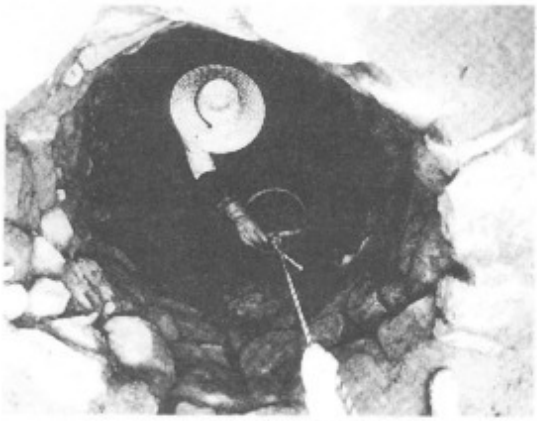
第４図　遺物実測図（古墳時代）



第５図　遺物実測図（室町時代）

第６図　鞴の羽口

第７図　堰状の石組



第８図　井戸の発掘

利生寺古墳

所在地　三豊郡高瀬町上勝間砂古　　調査期間　昭和60年12月2日～61年3月17日

古墳は，鬼ヶ臼山の最末端の小尾根上に立地する。標高は，約44m，西方には，高瀬川・平野・瀬戸内海を見通せる。古墳は，近・現代の開墾によって，大きく破壊を受けている。石室に利用された石は，羨道部に基底石が3個残るのみであった。

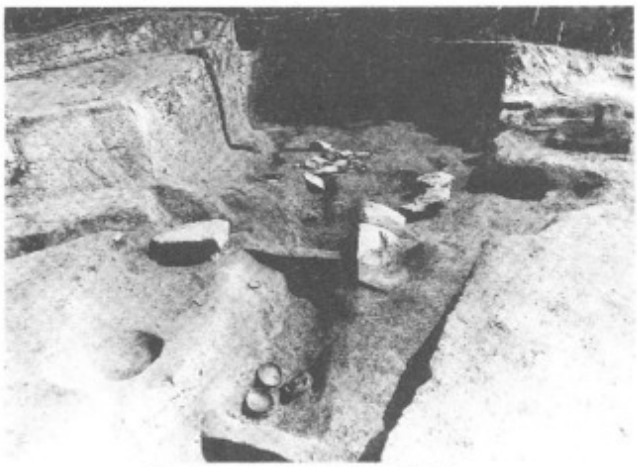
利生寺古墳位置図

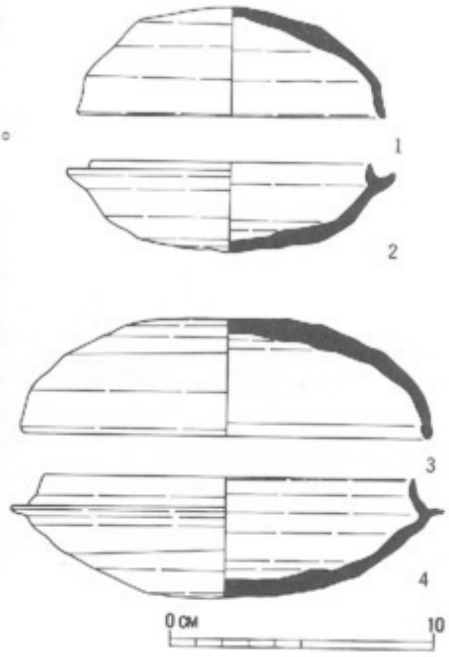
墳丘の形状・規模は不明である。

羨道は，西方に開口し，内巾0.8m，長さ2.8m，高さは不明。中央に排水溝が貫通する。排水溝は，羨道外へ，さらに2.4m伸びていた。最奥部埋土中から須恵器が多く出土した。

玄室部には，石室構築に使用された石は1個も残存していなかった。掘り形の規模は，巾3.8m，奥行き4m，深さ1.1m，形状は，奥行きがやや長い長方形である。北壁下の床面には，基底石の据え穴が残っていた。床面中央付近からは，羨道へ続く排水溝が掘られていた。溝内には，小礫を詰めていた。この小礫の上面から耳環が2点出土した。

排水溝内から，身と蓋を入れ子状にした須恵器の杯が3セット出土した。羨道部の埋土中から，須恵器の坏・高坏・鼈・平瓶・横瓶・壺・甕・土師器の鼈が出土した。耳環は，銅製で渡金の跡があった。


第1図　羨道・玄室（西から）



第2図　遺物実測図

矢ノ岡遺跡

所在地　三豊郡高瀬町上勝間矢ノ岡　　調査期間　昭和61年1月28日～2月27日

矢ノ岡遺跡は，高瀬川南岸の河岸段丘上に立地する。調査区は，段丘がちょうど途切れる先端部と，段落ち部の両方にまたがっている。前者については，調査区の南方で宅地造成中に石製五輪塔が出土したことが知られている。後者には，「土佐神社跡」と称する径約1.5m，高さ約0.5mの塚が現存していた。

矢ノ岡遺跡位置図

○検出した遺構

竪穴住居跡（1棟）

掘立柱建物跡（8棟）

土坑（4基）　溝状遺構（6本）

○出土した遺物

土師器（高坏・鉢・甕）

須恵器（坏身・坏蓋・壺）　瓦器（椀）　土師質土器（皿・坏・鍋・釜）　銅鏡（八稜鏡）

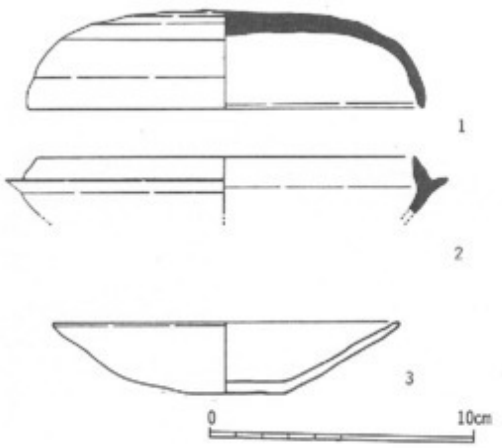
竪穴住居跡（SB01）は，6.4×5.0mの隅丸方形。主柱穴は4穴である。作り付けのカマドを有する。南西隅から竪穴壁面をトンネル状に抜いて，つながる溝状遺構をもつ。

掘立柱建物跡は，鎌倉時代のものが多く，その前後のものが少しあると考えられる。

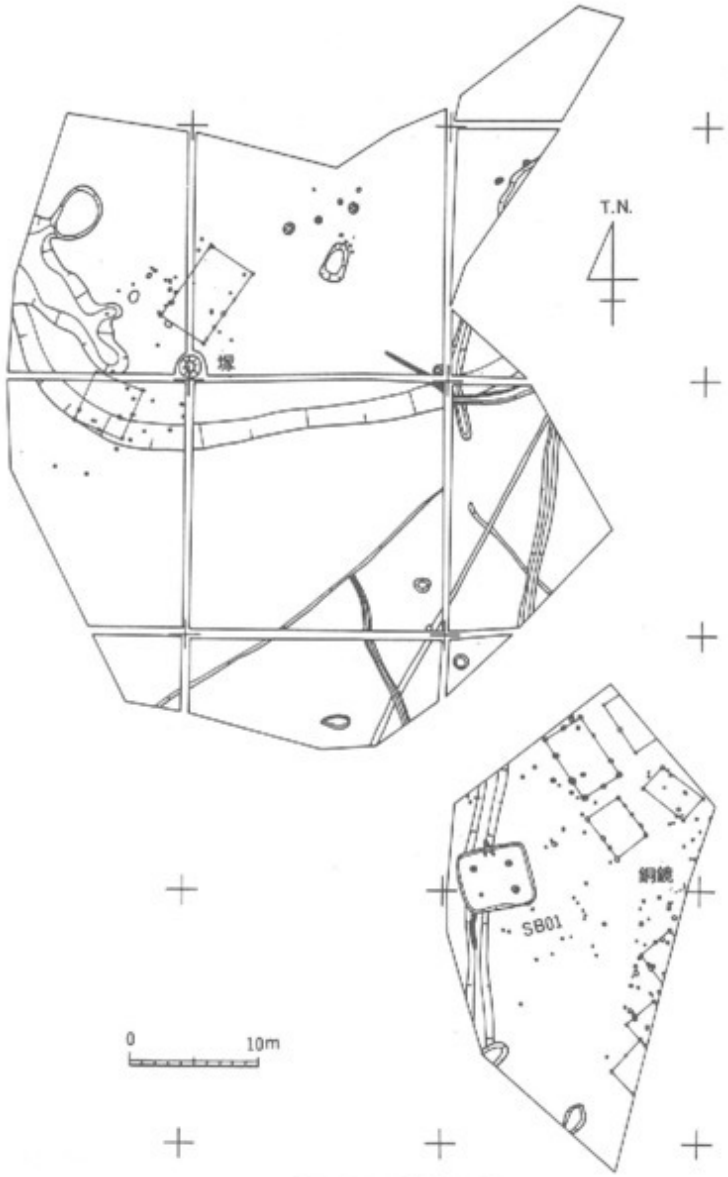
塚は，3層の土層によってなる。土層は，ほぼ水平に分層できる。最上層から土師質土器の坏が出土した。

詳細は，報告書によられたい。

第1図　八稜鏡

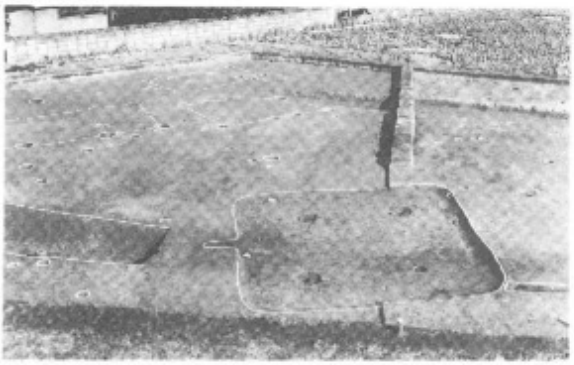


第2図　遺物実測図



第3図　遺構配置図

第4図　塚の断面



第5図　SB01（西から）

四ツ塚２号墳

所在地　三豊郡豊中町笠田笠岡　　調査期間　昭和59年３月27日～５月14日

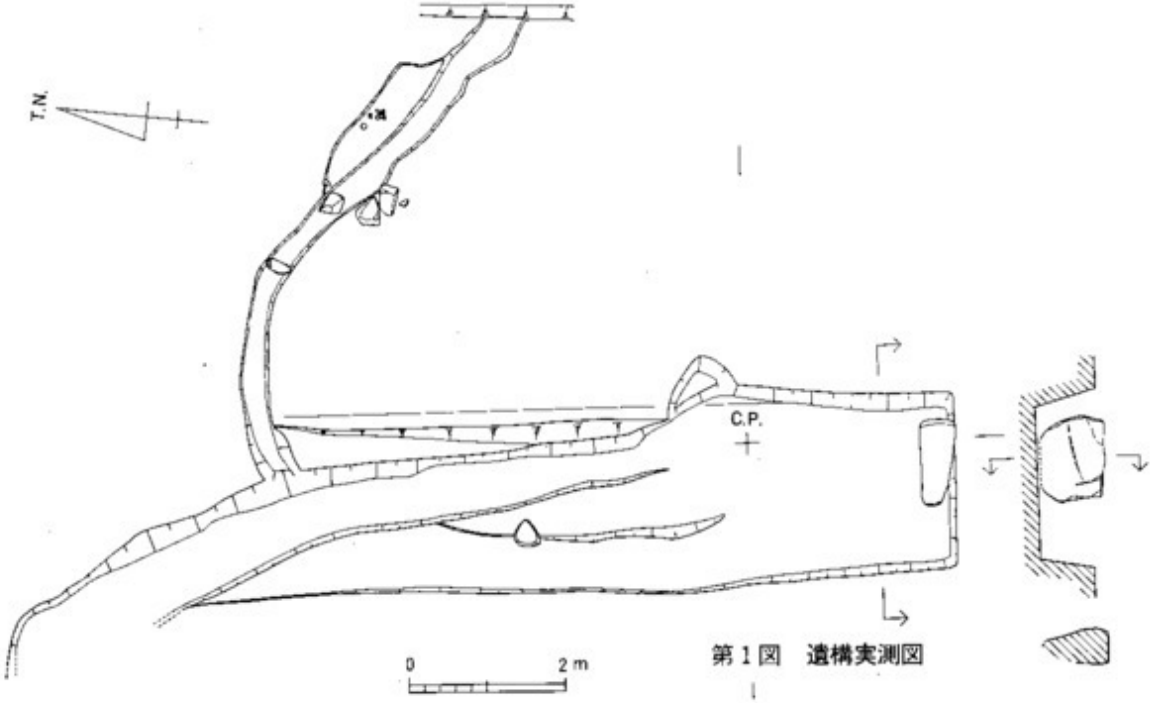
１．はじめに

四ツ塚古墳群は，標高184mを測る鳥越山から北北西にのびる尾根の頂部（標高79-84）および斜面に立地する。本来４基で形成されており，今回２号墳のみ対象となった。

四ツ塚２号墳位置図

２．調査の概要

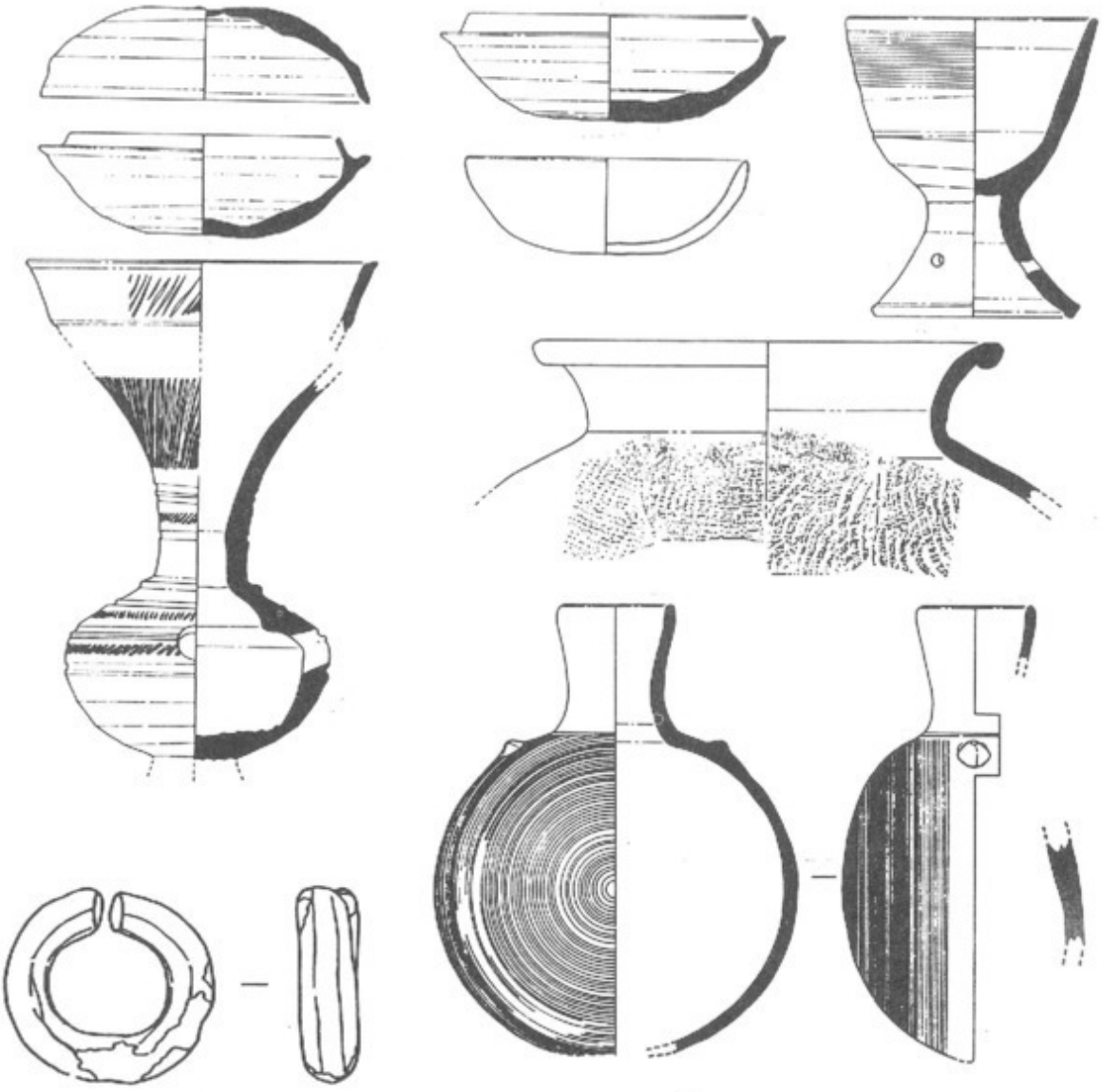
調査区は，ぶどう畑として開墾を受けており遺構の残りはよくなかった。検出されたのは，石室掘り方と墓道および周溝の一部である。石室には奥壁一石だけ残り，他は除かれていた。石室の推定規模は，全長約12m，玄室最大幅３mを測り，片袖式の横穴式石室を主体部とする。周溝規模から見て，径10～14mの円墳と考えられる。遺物は，羨道部および墓道部から出土している。羨道部では，原位置を保った状態で検出され，墓道部では，砕かれた状況が見られた。出土遺物から，築造年代は６世紀末頃に比定される。詳細は，報告書によられたい。



第１図　遺構実測図

第2図　四ッ塚2号墳

第3図　羨道部土器出土状態（東から）



第4図　遺物実測図

福岡神社跡

所在地　三豊郡豊中町上高野3360番地　　調査期間　昭和61年6月23日～6月30日

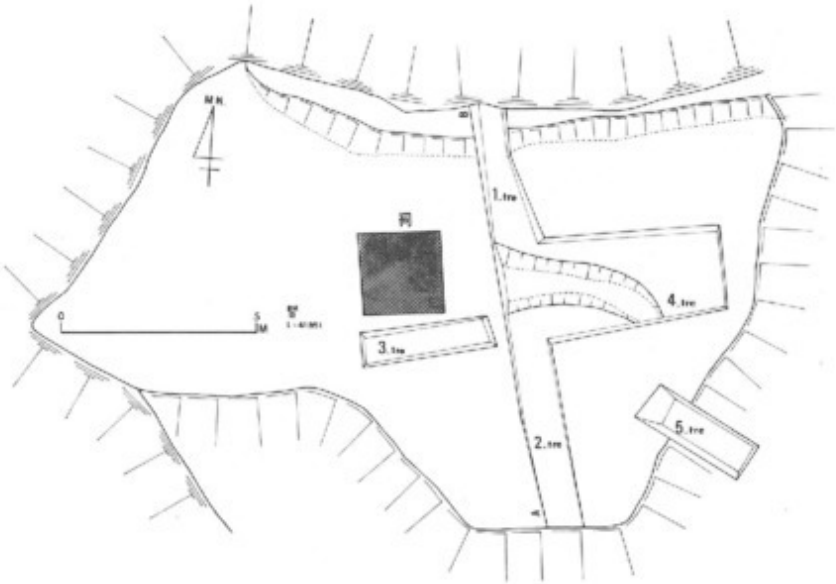
福岡神社跡は，陣山から南に向かって派生する尾根の一端に位置するが，東側にはため池があり，西側は工事により大規模に掘削されているために独立丘陵状の景観を呈する。標高は約42mを計る。

福岡神社調査位置図

昭和58年度の財田古墳群発掘調査中，地元より「当該地は古墳の伝承がある。」ということを聞き，予備調査の必要性を公団へ申し入れていた。調査の条件が整い，本年度の6月23日～6月30日にかけて予備調査を実施した。

調査の結果は以下の点にまとめることができる。①表土より20～30cm掘り下げると地山となる。②地山は丘陵の傾斜とほぼ同様に南から北へ向かって上がっている。③石室，周溝などは検出されなかった。④第1・2・4トレンチで最大幅1.5m，深さ30cmの溝状遺構を検出した。⑤溝状遺構から出土した遺物は時期不明の土器片数点にとどまる。⑥溝状遺構は第5トレンチ，北・西の崖状を呈する断面では確認できない。

以上の調査結果をもとに本調査の必要性について検討した。溝状遺構の時期・性格は明らかでないが，本調査の必要性は見い出せなかった。



第1図　トレンチ設定図・遺構配置図

延命遺跡—八反地地区—2次調査

所在地　三豊郡豊中町上高野八反地　　調査期間　昭和61年9月1日～9月30日

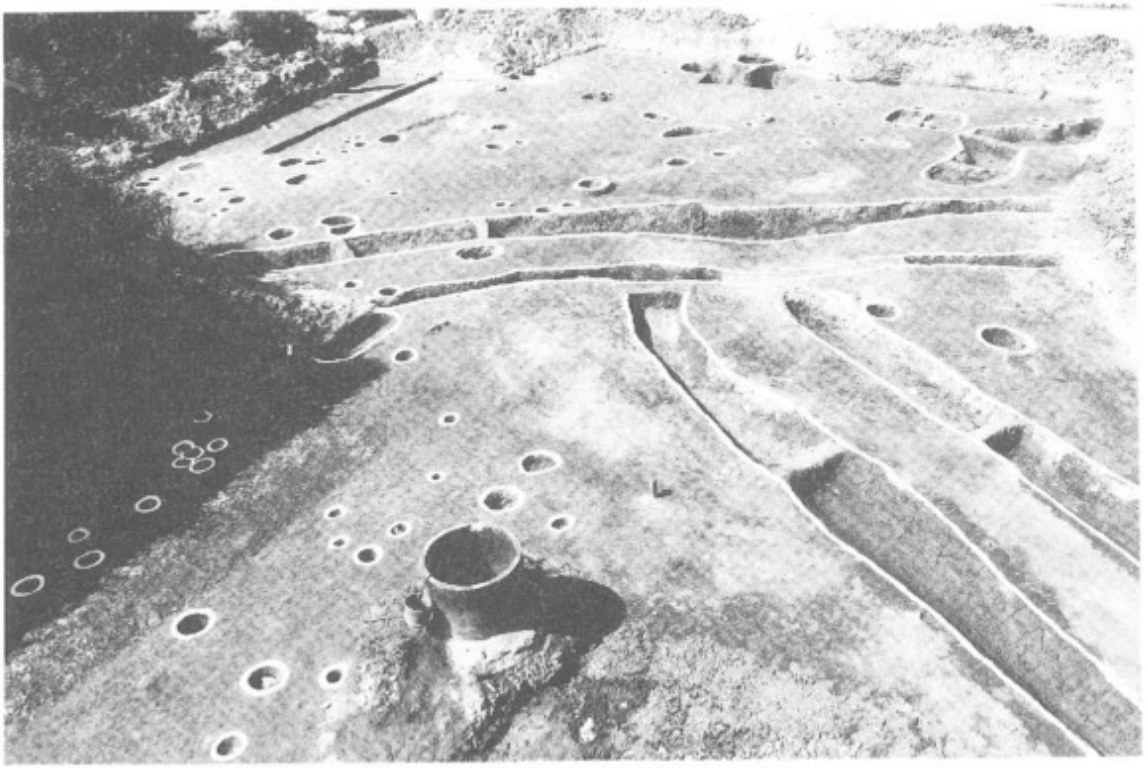
遺跡は，財田川の支流宮川の右岸微高地に位置し眉山・鳥越山・陣山の山稜が南へ派生した尾根終結部の先端にあたる。昭和58年度に発掘調査を行った「城岡」地区とは宮川を挟み対峙している。

宮川上流の白坂・高塚・向谷には古墳群や弥生の遺跡群が点在し，銅剣・銅鐸が伴出したことは注目されている。源流にあたる二宮には，大水上神社叢があり，古瓦の窯跡が保存されている。

延命遺跡調査地

遺構・遺物

溝状遺構は，弥生時代末～古墳時代初のもの3本（SD01，SD02，SD05）と平安時代末～鎌倉時代に比定されるもの2本（SD03，SD05）が検出された。SD01とSD02は，南西から北東



第1図　遺構（南から）

方向に平行する流路をもつ。埋土は，暗黒茶褐色を呈するが，床面は砂層となっている。二本の溝は，南東一北西に流れる溝（SD03）によって切られていると想定される。切りあいは，攪乱のため不明である。

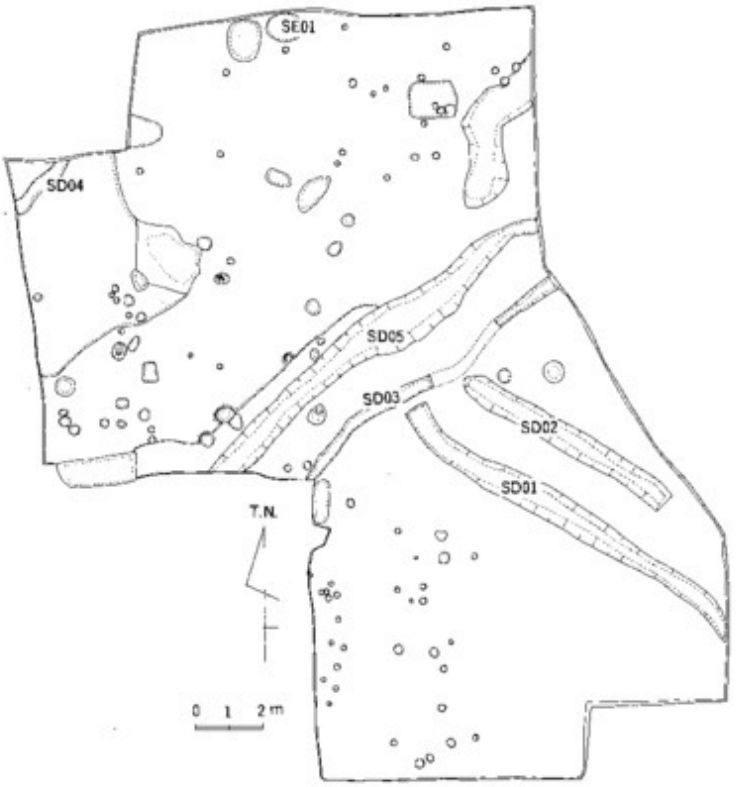
SD05は，南東一北西に走る。最大幅1.3m，深さ30～40cm。埋土は，暗黒茶褐色粘質土を呈す。この溝は，さらに北西方向に走り，59年度発掘調査区の検出溝に繋がる。

SD03は，古代末～中世の細溝で，南東一北西へやや蛇行気味に走る。埋土は，暗灰色を呈し，深さ30～35cmを測る。

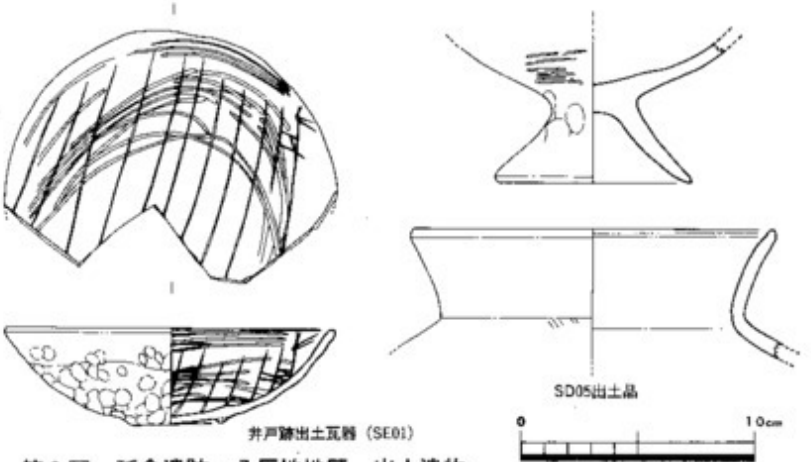
SD04は，砂層に掘り込んだ細溝で，埋土は暗灰色で，古代末～中世に比定される。

井戸（SE01）は，調査区の北端で検出された。径1m，深さは，遺存しているもので80cmを測る。川原石を立てたように1段構築しその下部に木製の曲物を据え付けている。八反地地区全域で，鎌倉時代3，江戸時代1の井戸を検出したことになる。

建物跡は，後世の攪乱がひどく，復元することは出来ないが，柱穴の並びと推定される箇所があり，4棟程度が建物跡と想定される。



第2図　遺構図



第3図　廷命遺跡一八反地地区一出土遺物

一の谷遺跡群

所在地　観音寺市古川町，本大町　　調査期間　昭和60年５月15日～61年12月25日

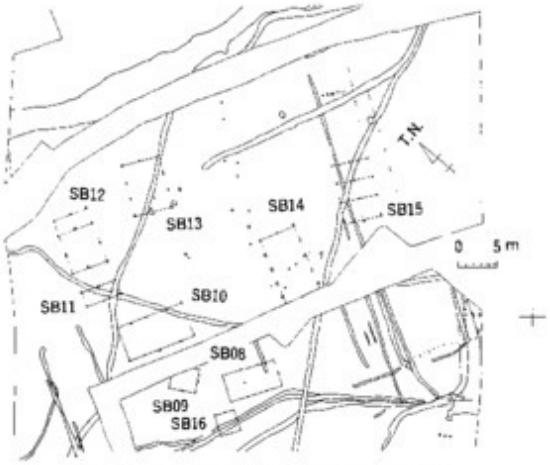
遺跡は，現財田川西岸の沖積平野に営まれており，総延長約1.1km，調査対象面積36,100㎡に及ぶ。調査の便宜上６地点に分割したが，遺跡の中心は竹道地区（位置図３）と平塚地区（同図１）にあり，他の地区については遺構の密度，遺物の出土量ともに稀少である。そこで本稿では上記２地区の概要を報告するに留める。

一の谷遺跡群位置図

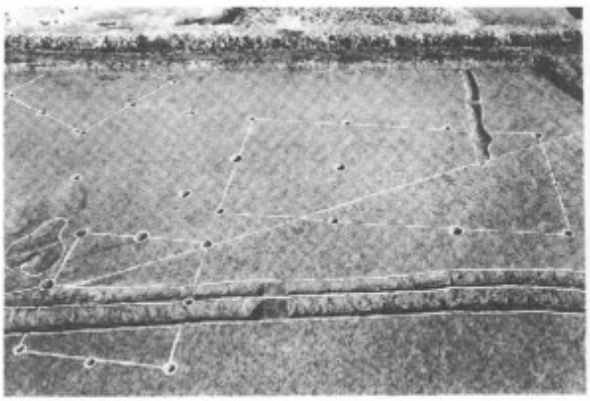
竹道地区において検出された主な遺構は掘立柱建物跡と溝状遺構である。前者は総数９棟であるが，主軸の方向性から３群に大別することが可能である。特に６棟から成る一群が現存する方格地割と共通する方向性を有する点は注意したい。また個々に規模および形態上の差異が認められる点から，遺構の性格付けについての課題，さらに時期決定の作業も残している。

平塚地区は弥生時代前期と同終末期の集落跡である。前期の遺構としては竪穴住居跡２基と夥しい数の性格不明の土坑を検出しているが，特に同時期の竪穴住居跡は三豊郡域では初例である。またSK308，338と呼称する不整形土坑は食物残滓と考えられる魚骨，獣骨を多量に包蔵しており，当時の食生活の復元あるいは経済活動の究明の資料として注目されている。さらに同時期の遺物としては石包丁，磨製石斧，石鏃などの生業に関連する資料が多い。

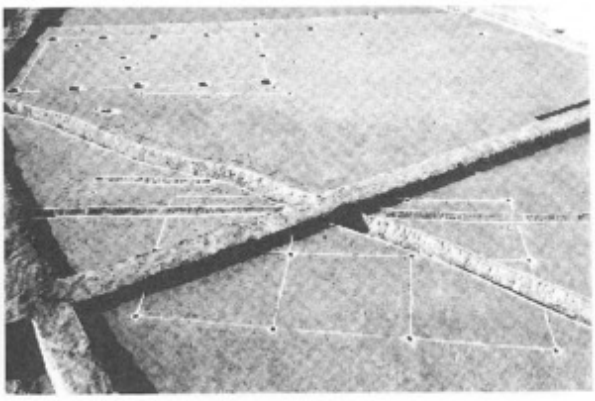
終末期の遺構は29基の竪穴住居跡が中心となる。しかもこれらの多数が調査区東部の微高地部に集中する点は，自然地形に適応した居住形態として理解することができる。またその住居形態と方向性を拠りどころとして，数種のグルーピングが可能であると考えている。この点については時期差，用途差，あるいは異なる地域様相の反映などととらえることができるのではなかろうか。



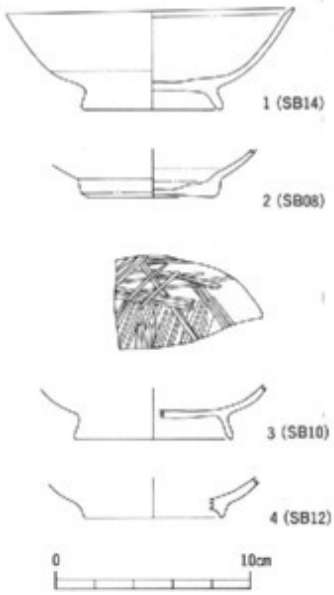
第１図　掘立柱建物跡群（竹道地区）



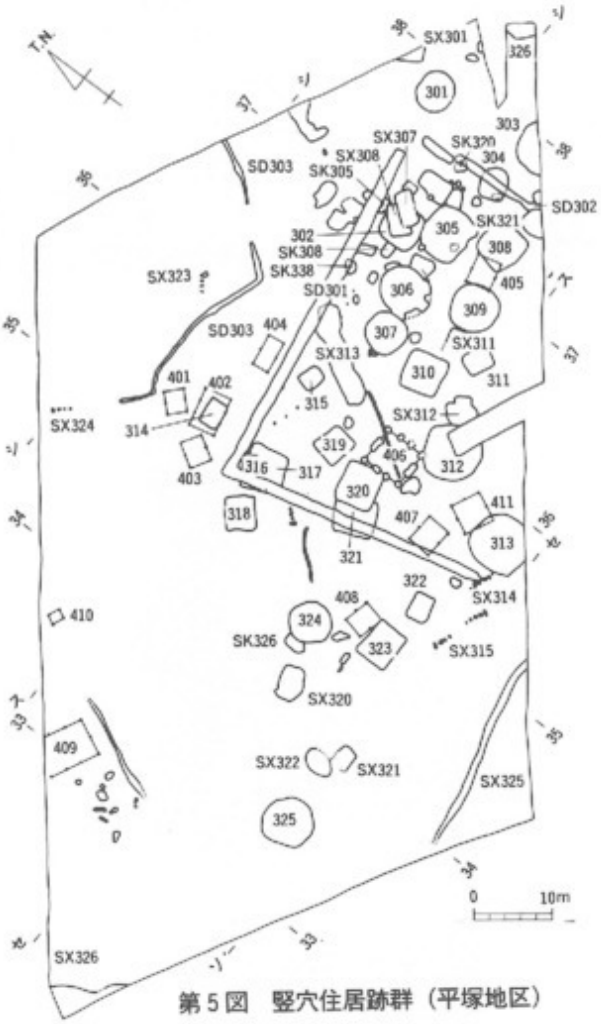
第2図　SB08，09，16



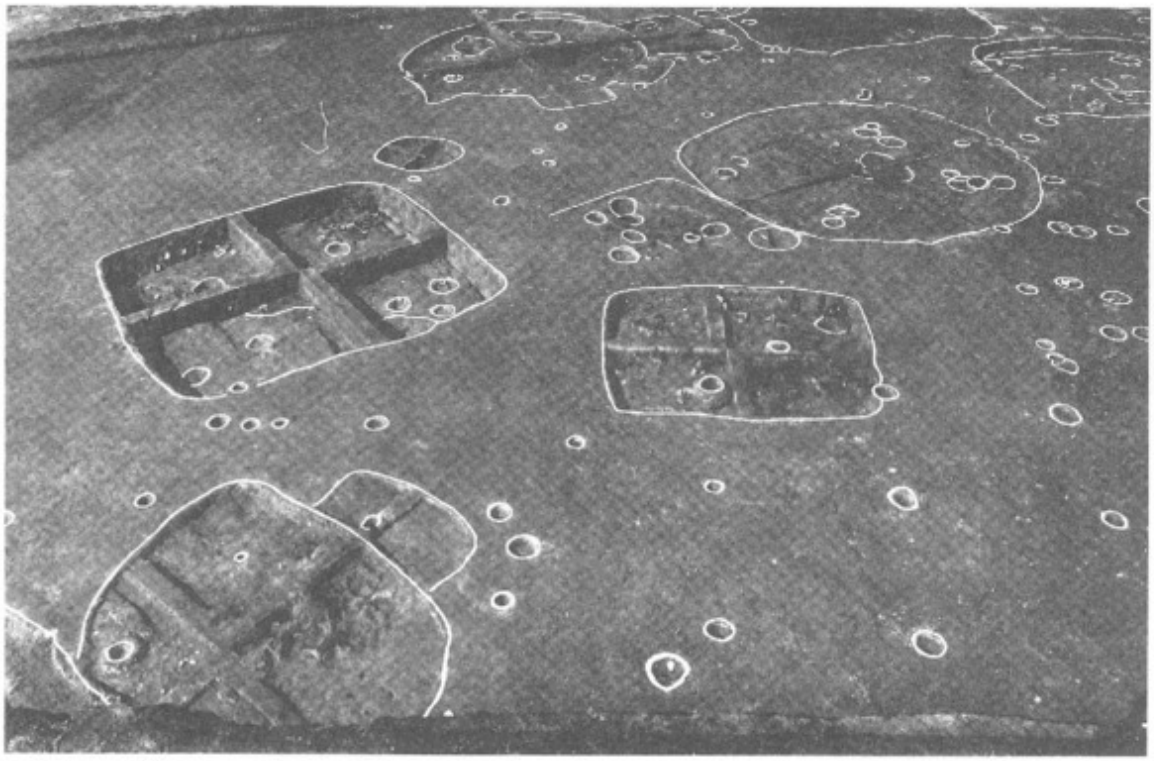
第3図　SB14，15



第4図　掘立柱建物跡出土遺物実測図

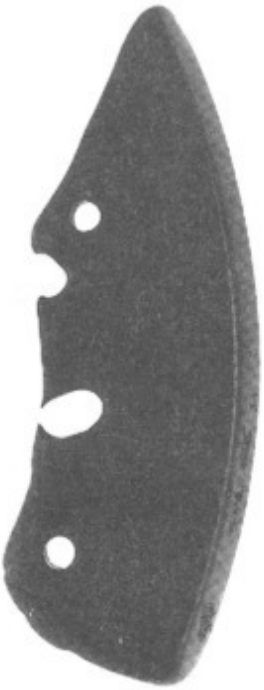


第5図　竪穴住居跡群（平塚地区）



第6図　竪穴住居跡群（平塚地区）

第7図　平形銅剣



第8図　銅鏡

石　田　遺　跡

所在地　観音寺市池之尻町石田　　調査期間　昭和60年５月１日～61年１月11日

はじめに

石田遺跡は，西讃に広がる広大な沖積平野である三豊平野のほぼ中央に位置する。また，観音寺市をはさんで流れる財田川と柞田川の中間地点にあたる当遺跡は，菩提山（312m）から派生した尾根筋の裾部にある丘陵状の微高地に立地する。

尾根筋の上位にあたる南方を望むと，香川県内でも有数の群集古墳を構える母神山(92.1m）が一望できる。また，その遠方には雲辺寺山(911m)をはじめ，阿讃山脈に連なる山々が重なっているのを展望できる。

石田遺跡位置図

北方に目を転ずれば，刈田郡条里が眼下に広がり，北西方向には七宝山がそびえている。

1923年（大正12年）４月17日に，観音寺市古川町の水田（刈田郡条里内）より出土したとされている，東京国立博物館収蔵の「伝古川町出土」の外縁付鈕式２区流水文銅鐸も，当遺跡から北へ約500m離れたところから出土したと伝承されており，当遺跡の丘陵部にも遺構が残存する可能性はきわめて高いと考えられた。

当遺跡の北半部は，尾根筋裾部の分岐点が形成した谷筋部分にあたり，北東方向（刈田郡条里の方向）へ丘陵から緩やかな傾斜面を形成していたものと思われる。近現代の圃場整備等で地形はかなり削平されている。

また，当遺跡の南半部は，戦後，製瓦用の粘土を採取していたと言われており，発掘調査がすすむにつれ，耕作土直下で土層の基盤となる地山を検出したり，近現代の攪乱が広範囲に及んだりしている箇所が随所に見られた。

遺　構

前述した様にかなり広範囲にわたり削平を受けており，微高地上の高所における遺構は希薄であった。しかし，やや下った斜面部に比較的良好な遺物包含層を有し，掘立柱建物・溝状遺構・土坑など多数の遺構を検出した。そのうち，掘立柱建物は全部で17棟検出され，①６Ｃ末以前，②古代末～中世にかけての２時期に大別できる。

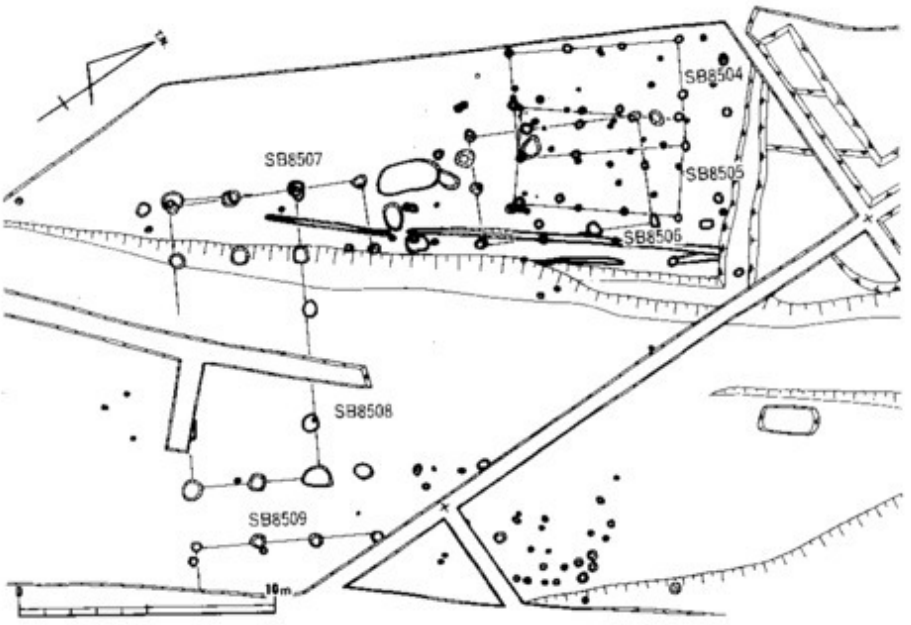
①６Ｃ末以前の掘立柱建物

SB8510～12（第3・4図）の掘り方は，全て60～70cmの不整円形で，他の建物に比べるとしっかりしている。また主軸方向もほぼ一致することから，調査区内では，特異な一群を形成している。時期的には，SB8511が，6C末の溝SD8545に切られていることから，6C末以前の掘立柱建物と思われる。

②古代末～中世の掘立柱建物

SB8502，03（第5図）・04～07（第6図）・14は，全て20～30cmの掘り方を持つ掘立柱建物であり，主軸は，検出された一群ごとにまとまりを見せている。また，雨落ち溝を有するSB8514なども見られる。

その他の建物遺構は，時期不明であるが，溝状遺構SD8510については，6C末～中世にかけての遺物を包含しており，建物遺構と同時期に機能していたものと思われる。



第1図　E-9，F-9遺構実測図

遺　物

石田遺跡の調査では，主に須恵器・土師器・緑釉・石製品などが，各遺構及び包含層より出土した。（第2図）

まず，遺構に伴う遺物として，第3図―1はSD8545から出土した須恵器坏身である。SB8510～13の時期決定の資料として使った土器で，6C末頃と思われる。

同2，3はSB8502の柱穴より出土した土師器坏であり，丸味を持ち口縁端部に至るものと，直線的なものがある。

同4～15は，SD8510より出土した土器であり，須恵器（4～9）・土師器（10～15）を時期的に見ると，建物遺構の存在する時期と同時期のものが出土しており，この溝が，当遺跡にとって重要な位置にあったことがわかる。

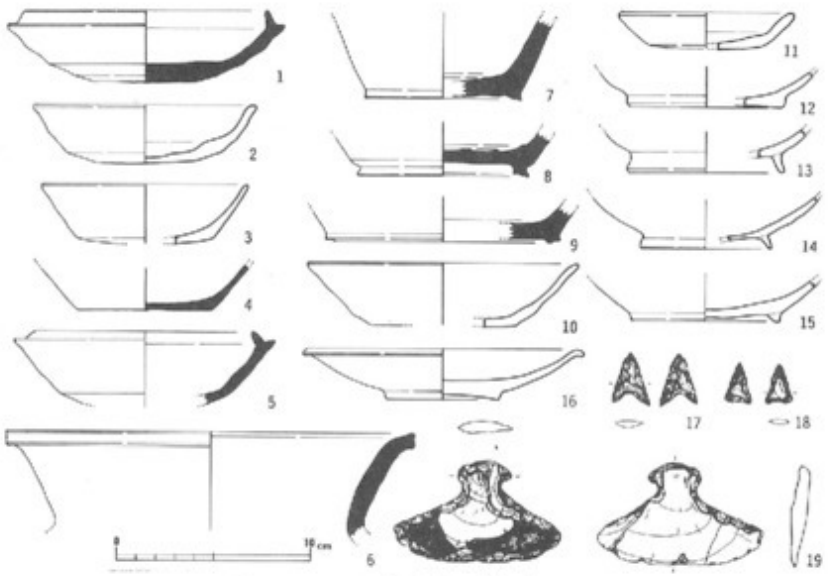
同16～19は，包含層出土遺物であり，16は緑釉陶器である。計4点出土した緑釉は，全て軟質であり，その内，完形であった皿（16）は，口径14.4cm，器高2.6cmで，底部から直線的にのびた体部は，口縁で下方にまがる。17～19は，包含層出土の石鏃・石匙である。

以上，今回の石田遺跡の調査では，遺構及び包含層からの出土遺物は，削平を受けていることもあり，あまり多くはなく，完形品はきわめて少量であった。

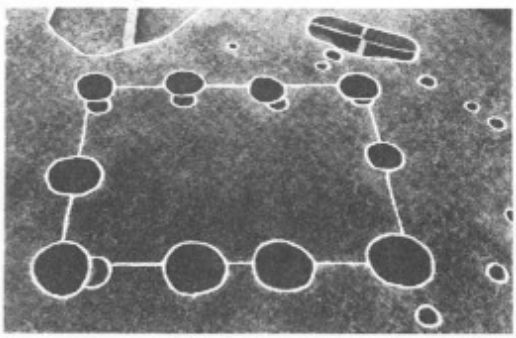
おわりに

背後に県下有数の古墳群である母神山を控え，眼下に財田川，柞田川，その流れ込む燧灘を見るこの微高地は，古代より集落を営むのに適した場所であったことは言うまでもない。

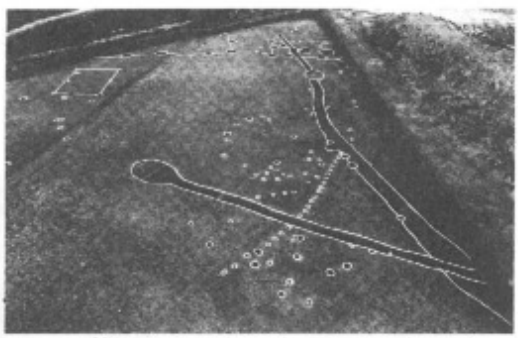
今回の石田遺跡の発掘調査では，古川銅鐸との関連遺構を期待したが，弥生時代の遺構はほとんど検出されず，主として，古墳時代～中世にかけての掘立柱建物が検出された。これらは各時代ごとにまとまりを見せており，規模的にも違った様相を呈している。



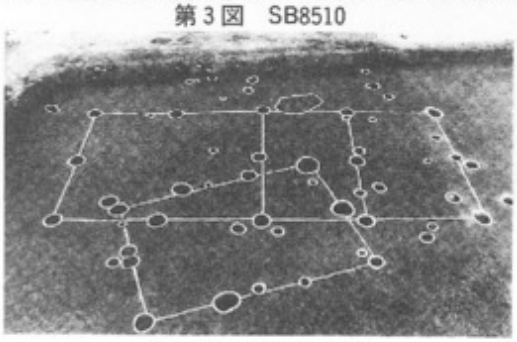
第2図　石田遺跡出土遺物実測図



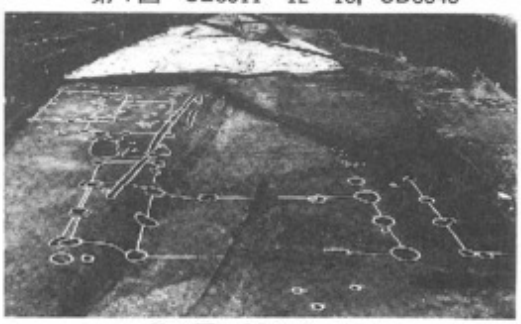
第3図　SB8510



第4図　SB8511・12・13，SD8545



第5図　SB8502・03



第6図　SB8504～09

長砂古遺跡

所在地　観音寺市池ノ尻町大長　　調査期間　昭和61年１月13日～９月19日

はじめに

長砂古遺跡は，三豊平野のほぼ中央に独立丘陵を形成している母神山（92.1m）の裾部を北西方向に延びる丘陵状の洪積台地の縁辺部に位置している。その標高は現地形で22～25mを測り，鎮守池西畔をピークとして，北東，南西両方向に緩やかに傾斜する様相を呈している。長砂古遺跡の立地と環境は，当遺跡より北東600mに位置する石田遺跡とほぼ同じである。しかし，三豊平野最大規模である母神山古墳群を間近にすることから当遺跡では，母神山を墓域とする集落，あるいは墳墓の存在が期待された。

長砂古遺跡位置図

遺構について

長砂古遺跡は，先に述べた様に近現代の攪乱，削平が広範囲にわたっており，遺構は全体的に希薄であったが，各調査区において以下に示す様な遺構が検出された。

Ⅰ区（第１図）

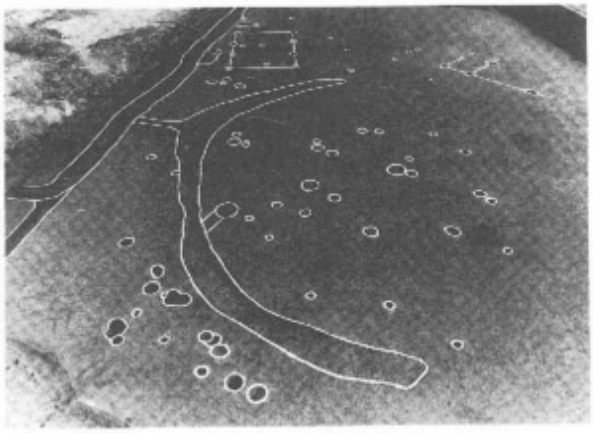
他の調査区に比べ遺構の遺存状態が良く，多数の建物遺構，溝状遺構等を検出した。建物遺構としては，掘立柱建物が５棟，竪穴住居跡が１棟検出された。

SB8601

Ⅰ区南部で検出された竪穴住居跡で，削平を受けているため，柱穴のみ確認された。ほぼ中央に主柱穴１個を持ち，その周囲に８穴の柱穴が認められる。北半を囲繞する溝（SD8601）を含め，周辺より多量のサヌカイト片（製品を含む）が出土している。時期は弥生時代中期と考えられる。

溝状遺構は13条が検出されたが，その殆んどは流路を北西方向にとっている。

SD8609



第１図　SB8601・SD8601

Ⅰ区北部において検出された溝で，流路を北西方向に持ち，幅約１～２m，深さ約0.3～１mを測る。底面より須恵器坏蓋が出土しており，６世紀後半に機能していたことが考えられる。

Ⅱ　区

Ⅱ区は，北西から南東方向に走る段差によって，二つに分かれている。以北は特に削平が著しく，遺構の遺存状態は悪いものであった。検出し得た遺構としては，10数条の溝状遺構と若干の土坑等が挙げられる。

溝状遺構はその殆んどが小規模で，その流路も方向に統一性は見られない。

SD8616

Ⅱ区東部において検出されたが，流路を北から北東方向に持ち，その規模は幅約３～６m，深さ約1.5～４mを測る。弥生土器（後期），瓦質土器が出土しており，２時期に機能していたことが考えられる。

その他目立った遺構としてSK8605が挙げられる。1.4m×0.8m程度の不整楕円形をしており，断面はごく浅い皿状を呈している。須恵器片，土師器片を多く含んでおり，時期的には古代末から中世のものと考えられる。

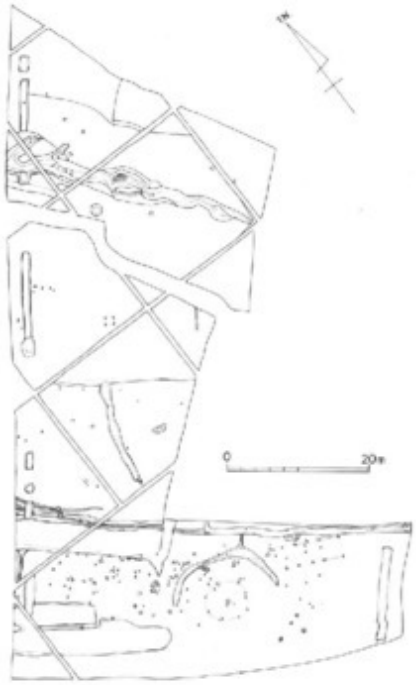
Ⅲ　区

全調査区を通じて最も削平の程度が甚しく，遺構の遺存状態は極めて悪いものであった。削平によって封土を失い，下半のみが遺存した横穴式石室が１基認められた。

横穴式石室（第４図）

Ⅲ区北部において，弥生時代後期の遺構を取り巻く形で検出された。

石室は，ほぼ東西に主軸を持つ（S－82°－W）両袖式の横穴式石室で西に開口している。石室規模は，玄室長2.6m，奥壁幅1.7m，玄門側幅1.65m，最大幅1.88mを測り，若干の胴張り傾向を呈している。羨道は長



第２図　Ⅰ区遺構配置図

第３図　石室礫床（上層）

さ約３m，幅約１mを測り，持ち送り気味に構築されており，羨道の先には更に長さ約６m，幅約0.9～1.2mの墓道が続いている。

石室基底石には比較的長大な石材が使われており，玄門部分と側壁最奥部，奥壁には大形ではあるが偏平な石材が使われている。石室内部は基底石が据えられた後に淡暗茶褐色土が厚さ約５cm程度，全面にわたって敷かれており，その面から排水溝が掘りこまれている。

排水溝は断面「U」字形で，奥壁から墓道にかけて，中央に真っすぐ穿たれており，その規模は長さ約7.5m，幅約0.4m，深さ約0.2mを測る。なお，排水溝には偏平な石材が全面にわたって蓋石として被せられている。

側壁は最奥部を除いて玄室・羨道とも小口積みされた河原石で構築されている。

床面は二重構造の礫床になっている。上層は４～10cm程度の玉砂利を使用しており，白褐色粘土を礫間に充塡することによって礫床を形成している。下層は10～20cm程度の礫が使われており，上層同様粘土が充塡されている。なお，上層には敷石とは別に，長さ30cm程度の大きめの石材が矩形に並べられており，棺台としての役割を果たしたものである可能性がある。

玄門には仕切り石が据えられており，羨道部側には閉塞石と考えられる石積みが認められた。

墳丘については，封土を完全に失っているが，直径12～14m程度の円墳と考えられる。

遺物について（第４図）

長砂古遺跡では，全調査区より弥生時代から中近世に至る種々の遺物が出土したが，注目されるものはIII区において検出した横穴式石室に伴う資料である。

それらは，須恵器（提瓶，短頸壺，台付長頸壺，有蓋高坏，器台），装身具（銀環，勾玉，管玉，切子玉，ガラス製丸玉，同小玉，土製丸玉），鉄製品(直刀，刀子，鉄鏃，雲珠，辻金具，革金具)，紡錘車，土師器，等多岐にわたっている。そのうちの，若干の須恵器についてのみ紹介しておく。

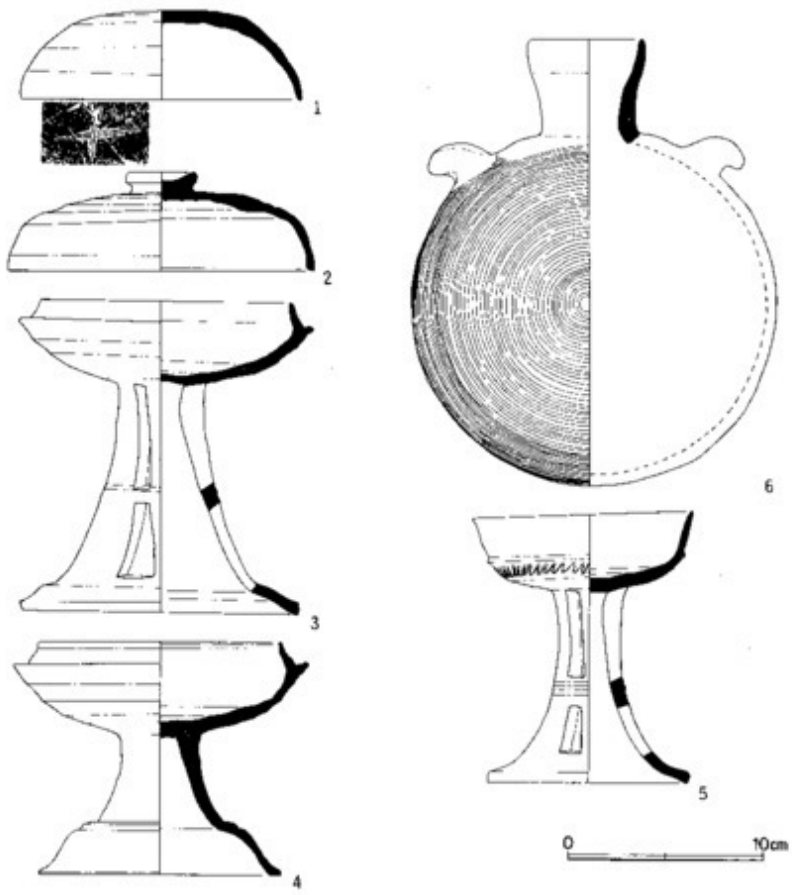
１は羨道埋土中より出土した高坏蓋であり，外面上部に「十」字形のヘラ記号を有している。なお，つまみを持たないその形状は坏蓋と酷似している。

２～４は石室北西において一括して出土した須恵器群中の資料である。２は３とセットをなして出土した高坏蓋である。形態的には１と異なり中央が凹んだ偏平なつまみを有しており，内面中央には同心円スタンプ文が観察される。３は蓋坏を転化した坏部に，緩やかに外方に広がる形状を示す脚部を有する形態の有蓋高坏である。坏部はやや内傾する立ち上りを持ち，端部は丸く仕上げられている。脚部は長方形２段のスカシ窓を３方向に有している。４は基部が太く短い脚部を伴う有蓋高坏であるが，スカシ窓は存在しない。坏部の立ち上りは３同様内傾しているが，丸く仕上げられた端部は直立気味である。

５は１と同様羨道埋土中より出土した無蓋高坏である。比較的小型で，坏部外面下半に篦描きによる波状文が施されている。

6は石室床面直上から，転倒した状態で出土した提瓶である。口縁部は比較的肥厚で，わずかに外反する形状を示しており，体部上面に付された把手は鉤状に退化している。

これらの須恵器は若干古い要素を残しているものも見られるが，概ね陶邑編年のII形式3ないし4段階の範疇で把えることができるものと思われる。



第4図　III区出土須恵器実測図

まとめ

長砂古遺跡の発掘調査では，広範囲の削平のため，大半は遺構を確認し得なかった。しかし，I区においては弥生時代（前・後期），古墳時代（後期）の生活址を確認することができ，III区においては6世紀後半の所産と考えられる横穴式石室1基を検出することができた。

柞田八丁遺跡

所在地　観音寺市柞田町八丁　　調査期間　昭和61年4月3日～11月28日　62年6月5日～6月17日(二次調査)

はじめに

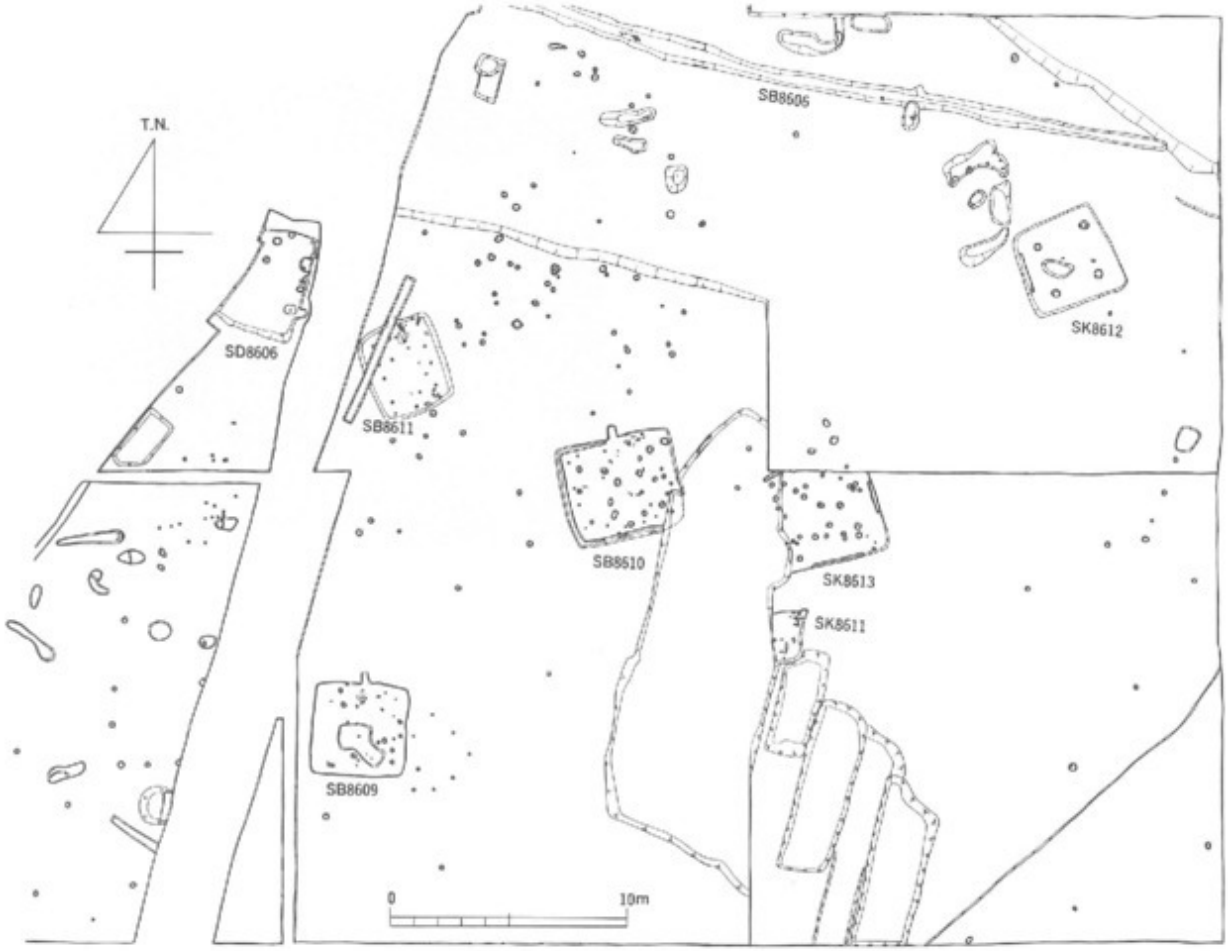
柞田八丁遺跡は，三豊平野の南西部，観音寺市柞田町八丁の上井之池北側に位置する。当遺跡から南方を望めば，讃岐山脈が東西に連なり，その中の雲辺寺山麓に源を発する柞田川が当遺跡の北方を流れて扇状地形を形成しており，当遺跡はその扇端部に立地している。東方にかつて70余基の古墳が密集していたと伝えられており，その後の開墾により消滅したものも多いと言われている。また，県内でも有数の群集墳である母神山(最高92m)をも一望できる地にある。北方を望めば，人口約4万の観音寺市街が広がり，さらに北方には七宝山塊の山々が連なり，西方には讃岐が広がっている。

柞田八丁遺跡位置図

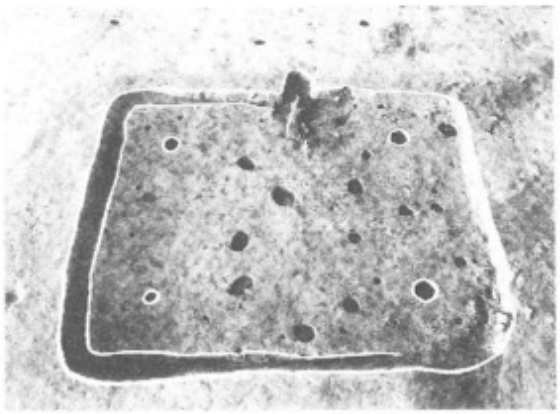
調査区付近には，奈良時代以降都と地方を結ぶ交通路であった南海道の柞田駅址が当遺跡の東南部に存在したであろうと推定されている。また，政府の鎮護国家の思想により各国に造られた国分寺・国分尼寺建立以前のものである安井廃寺も当調査区から東へ約500mほどの所に存在するなど，奈良期の遺跡が存在している。また一昨年には付近の水田から奈良時代のものと推定される陶印（須恵器，「封印」と刻字）が出土していることなどから，当調査区でも以上の事柄に関連した古代の遺構・遺物が検出される可能性が推定された。

次に当調査区はまずV区では耕作土から土層の基盤である地山までの間に多くの層が形成されていた。しかしIV区とV区の境あたりで，IV区の方がV区に比べ水田面が約1m程高くなっている。そのIV区・III区・II区そしてI区の北半分までは水田面が同じ高さになっており，耕作土直下では地山が検出された。しかし，I区の南半分から土井之池の堤までは，耕作土から地山までの間にV区と同様多くの層が形成されていることから，旧地形はIV区からIII区・II区・I区の北半分に移るにつれてゆるやかにではあるが高くなっていく地形で，耕作土から地山までの間には多くの層を形成していたであろうと推測される。

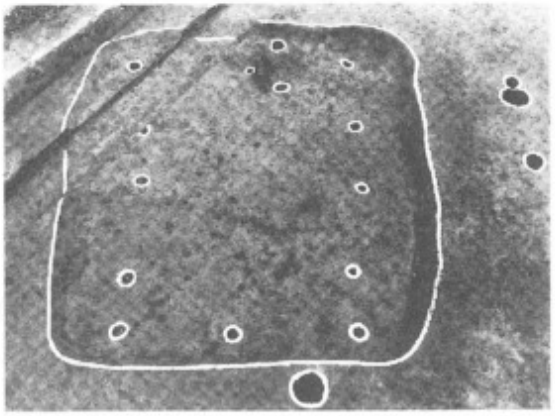
以上のことを反映してか，II区・III区・IV区（南半分）は，遺構を検出しても，その遺構のプランをかすかに確認できる程度で，すぐ底が出てしまったもの，あるいは消滅したであろう遺構が多く見受けられた。



第1図　柞田八丁遺跡（D-6・7・8，E-6・7・8）遺構実測図



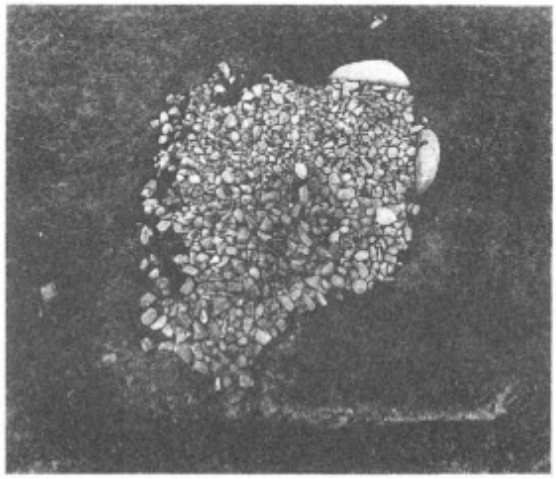
第2図　E-7・8　竪穴住居SB8610



第3図　E-7　竪穴住居SB8611

遺　構

調査の結果，F・G・H・I列では，後世の攪乱及び，削平により，遺構の残存状況が悪く，主な遺構は，F列より北側とI列より南側に検出されただけであった。まずF列より北側（第1図）では，溝によって区画されたと思われる竪穴住居群が検出された。溝（SD8606）は，調査区をおおよそ東西に横切る様に流れており，溝より南側に全て隅丸方形の竪穴住居6棟が検出され，北側では，竪穴住居は検出されず多数のピットが確認された。竪穴住居群（第1図）は，主軸方向でまとまりを見せており，主軸方向が北よりに西に20°傾く一群（SB8610～13），北を向く一群（SB8609），北より東に20°傾く一群（SB8606）の3グループに分かれる。しかし竪穴住居は，住居址間に切り合いがないこと，造りつけの竈（カマド）をもっているという住居形態，出土遺物もほぼ同時期であることなどから，これら住居群には，同一期間内での連続性と共存性が窺える。また竪穴住居内での主柱穴が確認出来ないものがあったが，特異な例として，SB8611のように直径5～10cm程度の柱穴を2×4間というように住居内にもつものも確認された。



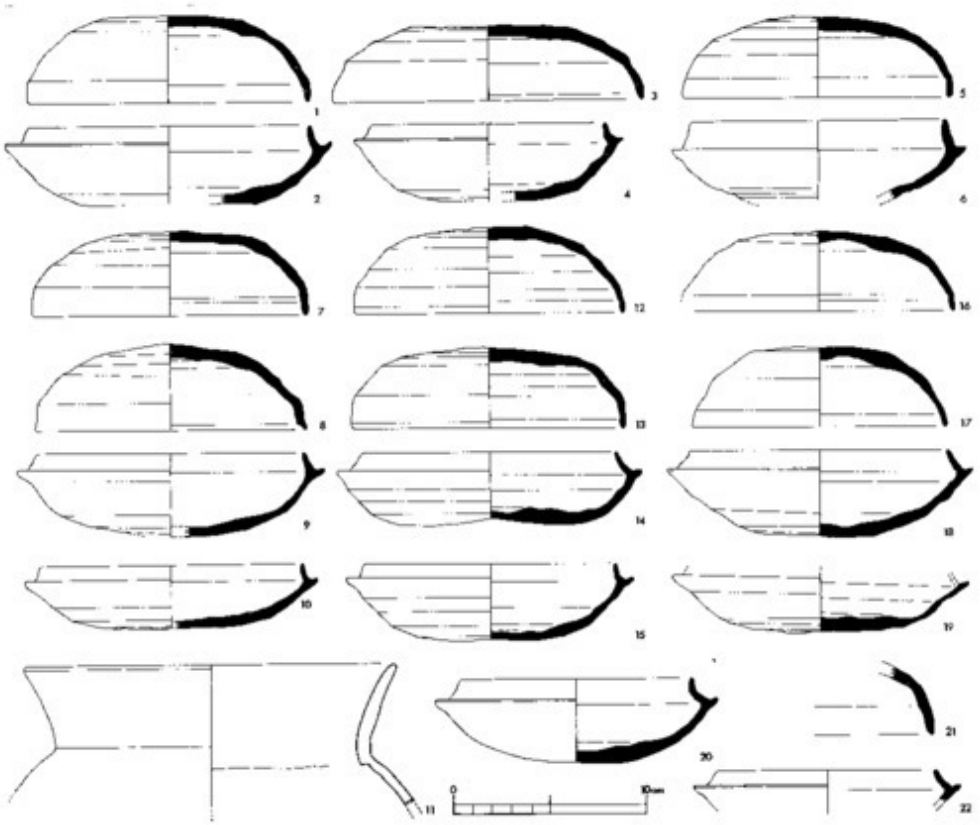
第4図　L-3古墳検出状況

I列より南側では，竪穴住居1棟，掘立柱建物1棟，古墳1基が検出された。これらがあまり距離をはなさずに，検出されたことは，6世紀末を中心とした時代に居住空間と墓域とが接して形成されていた集落形態が存在したことがわかる。竪穴住居（SB8608）は隅丸方形で，おそらく造り付けの竈は北西辺についていると思われる。掘立柱建物（SB8607）は，3×3間（4.4m×5m）で，50～70cmの柱穴を持つ。また古墳は，基底石と石床を少し残すのみで，ほとんど後世の攪乱によって破壊されていた。

遺　物

当遺跡では，遺構に伴い多数の遺物が出土した。今回は，竪穴住居及び古墳に伴う遺物についてのみ報告する（第5図）。まず竪穴住居は，全部で計7棟（SB8606，SB8608～13）検出され，SB8612を除く全てから遺物は出土している。

1・2は，SB8606より出土した須恵器で，坏身2は，口径12.5cm，器高推定3.6cmで立ち上りにやや古い様相を残す。3・4は，SB8608より出土した須恵器である。5・6は，SB8609より出土した須恵器で，坏身6は，口径11.2cm，器高推定4.0cmで立ち上りにやや古い様相を残す。7～11は，SB8610出土の須恵器7～10，土師器壺11である。12～15は，SK8611出土の須恵器である。このなかで須恵器12・13はSB8610の出土須恵器と同一個体の破片があり，SB8610とSK8611は確実



第5図　柞田八丁遺跡遺物実測図

に同時期に存在したことが実証された。16～19は，SB8611出土の須恵器である。19は，故意に口縁の立ち上りを打ち欠いており，坏身を何か別のものに転用した可能性がある。20は，SB8613出土の須恵器である。21・22は，古墳出土の須恵器である。これら全ての遺物は6世紀末頃のもので，竪穴住居の主軸方向で3グループに分かれはするものの，これらの遺物からは，時期差は考えられず，遺物からも，この時期，竪穴住居3グループと古墳は共存したと思われる。

まとめ

当初，柞田八丁遺跡においては，古代白鳳期に建立された安井廃寺，また南海道関係の遺構・遺物が検出されると思われていたがそれを明確に表すものは確認されなかった。

今回の発掘調査の結果，多数の柱穴群が密集する地区，竪穴住居が造られた居住空間，古墳の造られた墓域とに分けられて集落が形成されたのではないかと推測されるような遺構が確認された。

これらの遺跡の存在した古墳時代（6世紀末頃）には，観音寺市母神山古墳群，大野原町縁塚古墳群というように，県内でも有数の古墳群が形成されていたのにもかかわらず，居住空間と墓域が同時期に近接することは何を意味するのだろう。

柞田八丁遺跡の竪穴住居群には，造り付けの竈を有するものがほとんどで，方向性などでグループ分けはできるものの，ほぼ同一時期に存在したと思われる。

香川県内では発掘例の少ない古墳時代（6世紀末頃）の竪穴住居群とそれに伴うと思われる古墳が検出されたことは，今後の集落単位の墓域の形成条件を考えるにあたり，良好な資料になるに違いない。

普及活動から　埋蔵文化財発掘調査報告会

昭和53年度以降実施してきたこの報告会は，引き続き当該年度の発掘調査成果を中心に実施し，昭和62年度で第10回を迎えることになった。

各年度の日時，会場，テーマ等は下記のとおりである。

昭和59年度	日　時	昭和60年３月２日（土）　　13：30～16：00	
	会　場	坂出市勤労福祉センター大ホール	
	テーマ	四国横断自動車道建設に伴う発掘調査	廣瀬常雄
		羽佐島遺跡の調査より	小西正行
		大浦浜遺跡の調査より	東原輝明
		架橋に伴う発掘調査の成果と課題	大山真充

昭和60年度	日　時	昭和61年３月１日（土）　　13：30～16：30	
	会　場	善通寺市民会館	
	テーマ	四国横断自動車道建設に伴う発掘調査について	鷹田耕作
		瀬戸大橋建設に伴う発掘調査について	大山真充
		高松城米蔵丸跡発掘調査について	真鍋昌宏
		仙遊遺跡発掘調査について	笹川龍一
		60年度発掘調査と文化財保護	松本豊胤

昭和61年度	日　時	昭和62年３月14日（土）　　13：30～16：00	
	会　場	高瀬町農村環境改善センター	
	テーマ	四国横断自動車道建設に伴う発掘調査について	岸上康久
		瀬戸大橋建設に伴う発掘調査について	藤好史郎
		昭和61年度の埋蔵文化財発掘調査と文化財保護	松本豊胤

昭和62年度	日　時	昭和63年２月13日（土）　　13：30～15：50	
	会　場	高松市役所大会議室	
	テーマ	瀬戸大橋建設に伴う発掘調査についてⅠ（島嶼部の調査）	藤好史郎
		〃　　Ⅱ（下川津の調査）	大山真充
		国道バイパス建設に伴う発掘調査について（上天神の調査）	大久保徹也
		高松市教育委員会が実施した発掘調査について	藤井雄三

文化行政課埋蔵文化財調査担当職員名簿（昭和59年度）

課　　長　遠藤　啓（～59.11.20）
課　　長　磯田文雄（59.11.21～）
主　　幹　林　　茂
主　　幹　松本豊胤
課長補佐　中村　仁

（文化財調査）

調査一係

主任技師　渡部明夫
主任技師　東原輝明
技　　師　中西　昇

調査二係

所長（嘱託）　松下　均
主任技師　大山真充
主任技師　藤好史郎
技　　師　小西正行
技　　師　松野一博
嘱　　託　安藤　一
嘱　　託　坂口淳子

調査三係

所長（嘱託）　石塚徳治（～59.4.30）
所長（嘱託）　入江　久（59.5.1～）
係　　長　伊沢馨一
文化財専門員　岸上康久
主任技師　廣瀬常雄
主任技師　池内右典
主任技師　真鍋昌宏
技　　師　野中寛文
技　　師　薦田耕作
技　　師　西岡達哉
嘱　　託　中本雅之
嘱　　託　河野　裕
嘱　　託　片桐孝浩

文化行政課埋蔵文化財調査担当職員名簿（昭和60年度）

課　　長　磯田文雄（～60.12.20）
次　　長
課長事務　樫原　悠（60.12.21～）
取り扱い
主　　幹　松本豊胤
課長補佐　片山　堯

（文化財調査）

調査一係
文化財専門員　渡部明夫（～60.11.20）
文化財専門員　廣瀬常雄（60.11.21～）
主任技師　池内右典
技　　師　中西　昇

調査二係
所長（嘱託）　松下　均
兼　　執　松本敏三（60.9.1～）
主任技師　大山真充
主任技師　藤好史郎
主任技師　藤田任亮
技　　師　西村尋文
技　　師　松野一博
技　　師　松原伸二
技　　師　浜田重人
嘱　　託　安藤史郎
嘱　　託　坂口淳子
嘱　　託　岩崎晃彦

調査三係
所長（嘱託）　入江　久
係　　長　伊沢肇一
文化財専門員　岸上康久
文化財専門員　渡部明夫（60.11.21～）
文化財専門員　廣瀬常雄（～60.11.20）
主任技師　藤好史郎（～60.4.30）
主任技師　真鍋昌宏
主任技師　小西正行
主任技師　野中寛文
技　　師　薦田耕作
技　　師　三好彩三
技　　師　西岡達哉
嘱　　託　藤田耕正
嘱　　託　片桐孝浩
嘱　　託　田淵裕司
嘱　　託　今井和彦
嘱　　託　磯崎　寛
嘱　　託　株木　彰

文化行政課埋蔵文化財調査担当職員名簿（昭和61年度）

課　　長　廣瀬和孝
主　　幹　松本豊胤
課長補佐　片山　堯
（文化財調査）

調査一係
文化財専門員(兼執)　松本敏三
文化財専門員　廣瀬常雄
主任技師　真鍋昌宏（～61.5.31）
主任技師　中西　昇（61.8.1～）
技　　師　國木健司
嘱　　託　高木竜太郎（～61.4.30）

調査二係
所長（嘱託）　佐藤正義
文化財専門員　大山真充
文化財専門員　藤田任亮
主任技師　藤好史郎
技　　師　西村尋文
技　　師　松野一博
技　　師　大久保徹也
技　　師　浜田重人
技　　師　松原伸二
技　　師　北山健一郎（62.1.1～）
嘱　　託　安藤史郎（～61.12.31）
嘱　　託　坂口淳子
嘱　　託　今井和彦（～61.11.1）
嘱　　託　清水周作（62.1.1～）
嘱　　託　石田美和
嘱　　託　加藤隆也
嘱　　託　山元敏裕（61.12.1～）

調査三係
所長（嘱託）　入江　久
文化財専門員　伊沢肇一
文化財専門員　岸上康久
文化財専門員　渡部明夫
主任技師　安藤清和
主任技師　真鍋昌宏
主任技師　野中寛文
主任技師　小西正行
主任技師　薦田耕作
主任技師　三好彩三
主任技師　中西　昇（～61.7.31）
技　　師　西岡達哉
技　　師　片桐孝浩
技　　師　岡田静明
技　　師　磯崎　寛
技　　師　北山健一郎（～61.12.31）
嘱　　託　植田　広
嘱　　託　山元敏裕（～61.11.30）
嘱　　託　清水周作（61.9.1～12.31）
嘱　　託　田淵裕司
嘱　　託　馬淵元之（～61.5.31）
嘱　　託　松浦　隆
嘱　　託　竹内峰雄（～61.12.31）

文化行政課埋蔵文化財調査担当職員名簿（昭和62年度）

課　　長　廣瀬和孝
課長補佐　片山　堯（～62.5.31）
課長補佐　高木　尚（62.6.1～）
副主幹　小原克巳（62.6.1～）

（文化財調査）

調査一係

係　　長　廣瀬常雄
技　　師　大久保徹也
技　　師　國木健司
嘱　　託　植田　広
嘱　　託　石田美和
嘱　　託　山元敏裕
嘱　　託　山本英之（～63.2.29）
嘱　　託　秋山成人（62.11.1～）
嘱　　託　和田素子（63.1.8～）

調査二係

所長（嘱託）　佐藤正義
文化財専門員　大山真充
文化財専門員　藤田任亮
文化財専門員　藤好史郎
主任技師　中西　昇
技　　師　西村尋文
技　　師　植松邦浩
技　　師　岩橋　孝
技　　師　松原伸二
技　　師　北山健一郎

調査三係

係　　長　渡部明夫
主任技師　安藤清和
主任技師　真鍋昌宏
技　　師　西岡達哉
技　　師　片桐孝浩
技　　師　岡田静明
技　　師　磯崎　寛
嘱　　託　山本英之（63.3.1～3.31）

香川県埋蔵文化財調査年報

昭和59年度～昭和62年度

昭和63年３月31日　発行

編集　香川県教育委員会事務局文化行政課
高松市番町４丁目１番10号
電話　(0878)31－1111

発行　香川県教育委員会

印刷　㈲　成　光　社